

第二部 各熟議の取組～実践者からの声～（平成22年10月末時点）

1 ネット熟議

1-1 「教員の資質向上」に関する熟議

テーマ	教員の資質向上方策は？
実施期間	平成22年4月17日（土）～6月7日（月）（52日間）
熟議の概要 （コメント数 も含む。）	<p>本テーマは、文部科学省ネット熟議の開設にあたり、「未来の学校」と並び、最初に設定されたものである。当初は、参加者の属性ごとの掲示板（ ・ ）を設定し、その後、議論の進展をみながら論点ごとの掲示板（ ・ ・ ）に再編し、すべての参加者が共通の掲示板で意見交換が行われた。</p> <p>【設定テーマ】</p> <p><サイト開設期間：平成22年4月17日～平成22年5月10日></p> <p>教員の資質向上方策は？（教職員・教育政策関係者・研究者の皆さまへ）[718件]</p> <p>教員の資質向上方策は？（保護者・ボランティア・研究者の皆さまへ）[291件]</p> <p><サイト開設期間：平成22年4月30日～平成22年6月7日></p> <p>教員になる際につけるべき「力」は？そのつけ方は？[1,137件]</p> <p>教員になってからも磨き続けるべき「力」は？その磨き方は？[406件]</p> <p>管理職等にはどのような「力」が必要？そのためにはどうすれば良い？[576件]</p> <p>[]はコメント数</p> <p>なお、熟議の終盤、鈴木副大臣から熟議参加者に対して、熟議のエッセンスをまとめていただきたい旨の呼び掛けがなされ、参加者からの意見や提案をふまえた「文部科学省への提案書」が取りまとめられた。「提案書」は6月25日、鈴木副大臣室において熟議参加者有志から副大臣へ手渡され、その後、中央教育審議会 教員の資質能力向上特別部会において報告が行われた。</p>

【テーマ担当部署・者の所感】

本テーマは、平成22年度度実施されたネット熟議の中では「未来の学校」（約7,000件）に次いで多くのコメント（約3,100件）が寄せられ、活発な熟議となった。

【準備・運営について】

運営については事前に一定の業務内容や役割分担等を決められていたが、現実には試行錯誤の繰り返しであった。熟議が省内の複数課をまたぐ話題になることも多く、他課に情報提供や質問対応について協力要請することもあったが、幸い他課の理解や協力が得られた。しかし、よりきめ細かな情報提供やファシリテーターの関与を充実させるためには、現行の体制下では限界があると感じた。

初めての試みであり、ファシリテーション業務に不安もあったが、先行事例の経験者でもある粉川委員による担当者に対する事前レクは大変参考になった。

当初は民間ファシリテーターがフロント（掲示板でのファシリテーション）を担当し、文部科学省職員がバック（質問への対応や議論のまとめ）を担当することとしていた。また、熟議テーマを担当している課の職員は中立性の観点から、ファシリテーションには直接関わらないこととする方針もあったが、適時の情報提供等の観点から、担当課室職員が一定のファシリテーションを行うことは必要であると思う。ただし、役所やその職員に対して先入観を持っている参加者もあり、民間ファシリテーターと職員ファシリテーターが連携を密にしつつ、状況に応じて役割分担して対応することが有益と考える。

ネット熟議は時間・場所の制約が少ないメリットがある一方、投稿がなければそもそも熟議が成立しないことや、ファシリテーターの仕切りにも限界があることもあり、対面の場合よりも話題が移り変わりやすい性質がある。このため、論点が必ずしも深まらない場合もあったと感じる。また、他の参加者による膨大な投稿に目を通し、コメントを行うことは多くの労力を要するため、“息切れ”を感じる熱心な参加者も見受けられた。

また、ファシリテーターからの呼びかけや参加者によるたしなめにもかかわらず、過剰な連続投稿や個人名を挙げた投稿を繰り返す参加者も見受けられた。

対応方法の案として、投稿を直接公開せず、ファシリテーター等がいったん内容を確認のうえ公表する方法も考えられる。更に、論点を絞る観点では、テーマに適合した投稿を選択してファシリテーターが紹介する形とする等の方法も考えられる。（もっとも、参加者が意見を自由に「カケアイ」を行うという趣旨にかんがみれば慎重な検討が必要である。）

【テーマ等について】

本テーマにおいては、教員に求められる資質能力とは、養成段階（カリキュラム、教育実習、養成期間等）、免許制度（専門免許状、教員免許更新制を含む）、採用試験、社会人の採用、研修、学校現場における業務及び教員へのサポート、教員の人数、少人数学級、管理職・・・等、トピックが実に広範囲に及んだ。それぞれのトピックにおいて様々な立場の参加者から活発に様々な意見が出されたが、必ずしも一定の方向性や解決策が見い出されたわけではなかった。

熟議は、それを通して互いの立場や果たすべき役割への理解が深まり、個々人が納得して自分の役割を果たすようになることが意義として挙げられる。これは、一定規模のコミュニティ内においては受け入れやすいと考えられるが、今回のように大きなテーマの場合には、議論がうまく収斂していくことに限界があるように感じる。

このことは、参加者からも、「個々の良い取組を集めて制度化しても、必ずしもうまくいかない場合があるので、流れのある制度にしていきたい」旨の指摘があったが、各トピックの議論とは別に、制度全体を見通した検討が必要であることを示しており、熟議と中央教育審議会を車の両輪とする構想の所以と考えられる。

もっとも、今回、参加者から様々な視点で実感の伴ったコメントが多く寄せられ、参加者においても、相互に様々な意見があることを実感し、主張の異なる他者へ一定の理解を示す等のケースも見られた。今後、テーマの設定や議論の進め方について、より適切な方法を検討していく必要がある。

【「文部科学省への提案書」の作成について】

熟議の終盤、鈴木副大臣からの呼び掛けにより、平成 22 年度開設された熟議では初めて、熟議のエッセンスを提案書の形に取りまとめる試みが行われたが、取りまとめの編集段階で参加者から非常に多くの投稿がなされた。成果物としてのまとめ（目標）があると、コメントの活発化に大いに資することが明らかとなった。ただし、議論を深めた上での編集意見もあれば、文言のみの追加意見も多く、今後、まとめを作成する熟議では留意が必要である。

1-2 「未来の学校」に関する熟議

テーマ	未来の学校
実施期間	平成 22 年 4 月 17 日（土）～8 月 31 日（火）（137 日間）
コメント数	7,010 件
熟議の概要	4 ヶ月間余りにわたって、教育内容、授業の進め方、教材・施設、学校制度、教職員、教育支援体制等について、様々に意見交換がなされ、コメント数は 7,000 件を超えた。

【テーマ担当部署・者の所感】

本や記事を紹介し合いながら学び合うプロセス、コメントや提案の仕方に関する創意工夫等、参加者同士で熟議文化が築かれたことは大変素晴らしいものだと感じる。

「未来の学校」の熟議をきっかけに全国各地でリアル熟議が開かれ、逆にリアル熟議をきっかけにネット熟議に参加する方が多くいることを非常に喜ばしく思う。

4 ヶ月間余りにわたって、継続的に活発な熟議が行われたことは、国民の教育に対する熱意とともに、国民の文部科学省への期待の表れでもあるように感じ、身の引き締まる思いをしている。

国民・参加者に対して、誠実・率直に対応することが何より大事であることを実感した。中盤から、ツリー表示がその機能をあまり果たせなくなり、閲覧性が低くなったことは、システム上の課題として捉えるべきか議論の設計の問題と捉えるべきか、十分に検討する必要がある。

テキスト形式やマインドマップ等まとめ方を工夫しながら取り組んでいたが、途中からまとめの作業が追いつかなくなり、議論の「見える化」が不十分に終わったことは大きな課題。

広いテーマであるがゆえに参加しやすい一方で、論点が多岐にわたり収集がつかなくなる面も見られた。

7,000 件を超えるような対話・意見交換の場は、政策情報空間として大きな可能性を秘めており、これらについてテキストマイニング等、議論の「見える化」のためのツールを有効に活用できれば、参加者の問題意識や現場の課題等が把握しやすくなる。

1-3 「サイト運営・改善」に関する熟議

テーマ	熟議カケアイをより良くするには？
実施期間	平成 22 年 4 月 22 日（木）～8 月 31 日（火）(132 日間)
コメント数	600 件
熟議の概要	<p>熟議カケアイサイトの開設から数日で数百件のコメントが集まり、参加者の方々から運営に関して様々なご意見やご質問が出てきたため、熟議カケアイサイトのシステムや運営について熟議を行うエリアとして開設された。</p> <p>熟議においては、システムに関するもの、運営方針やルールに関するもの、ファシリテーションや議論の進め方に関するものについて、要望や提案が為された。</p> <p>システムについては、最も要望の多かった「ツリー形式での表示」について、実際にシステムの改修を行った。また、ファシリテーションの進め方についてのご提案も大いに参考として、参加者と密に連携した運営を行うための場として機能した。</p>

【ファシリテーション担当部署・者の所感】

参加者の方々とは率直に熟議が行え、運営改善やシステムの改修といった動きに繋げることのできる場があることは、運営者としても非常に心強い

システムについては、「現在の 600 字の文字数制限を緩和することが必要（逆のご意見もあり）」「参加者間で連絡を個別に取り合える仕組みの実装を」といった提案がなされた。なかでも「ツリー形式での表示機能の追加」については、本熟議の開設から 1 週間後にスピーディーなシステム改修に繋げることができたが、これは、この熟議の場で多くのご意見を伺え、求められる施策が確認できたことが大きな後押しとなったシステムの不具合等についてこの場で報告がなされ、他の参加者が同様の事象が起こるかを確認した結果が報告される等、大いに不具合への対応のバックアップとなった運営についても「まとめエリアの編集権限を参加者に開放してほしい」「より論点を具体的に絞るべき（逆のご意見もあり）」「ある程度議論された論点については、まとめエリアに掲載し、当面議論を止めるべき」「PR をもっと行い幅広い参加者を募るべき」「著しい連騰の禁止規定を設けるべき」等、多くのご提案をいただき、対処が可能な部分から順次対応を行っている

システム改修や、テーマの設定等、多くの提案を頂いたが、これらを受け止め、蓄積し、さらには運営者としての検討結果を何らかの形でご返答していくような仕組みの必要性を感じており、今後強化をしていきたい

運営方針や、教員の参加を増やす方策等について参加者自身が議題を提起し、参加者が相互に改善策を熟議していく文化が醸成されたことは大きな成果である

1-4 「ICTの活用」に関する熟議

テーマ	ICTを活用した21世紀にふさわしい学校や学びとはどうあるべきか？
実施期間	平成22年5月14日(金)～5月31日(月)(18日間)
コメント数	402件
熟議の概要	<p>本熟議は、今後の学校教育(初等中等教育段階)の情報化に関する総合的な推進方策について検討を行うため、文部科学副大臣主催により設置された「学校教育の情報化に関する懇談会」と並行して実施。(問診型熟議)</p> <p>実施にあたり、デジタル教科書・教材、情報端末及びデジタル機器、ICTを活用した校務支援システム、児童生徒、教員等へのICT教育、その他、教員へのサポート等、といった論点を提示し、様々な意見交換がなされた。寄せられた意見(書き込み総数402件)については、事務局で整理したうえで懇談会における有識者による議論の参考とされた。</p> <p>(意見が多く寄せられた論点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒へのICT教育(約130件)...「情報教育」の学校教育における位置付け、情報教育の推進の必要性、学習指導要領の在り方、授業におけるICT活用等 ・ デジタル教科書・教材(約110件)...デジタル教科書や教材の可能性或いは課題(機能面、制度面等) ・ 校務支援システム(約70件)...校務の現状、システム導入への期待、導入に際しての留意点等 <p>(文部科学省からは、政府全体の動向や懇談会等の議論を踏まえ中間的に取りまとめた「教育の情報化ビジョン(骨子)」を8月26日に公表。)</p>

【テーマ担当部署・者の所感】

広く教育現場に関わる様々な立場の方々からの意見表明の場である熟議カケアイサイトは、政策を取り進めるうえで現場との認識共有に一層資するツールのひとつとして有効と考えられる。

本熟議の実施期間中には、インターネット上の円滑なコミュニケーションが不足することによるトラブルは幸いなことに顕在化しなかったが、その兆候は散見された。

個別のテーマに特化した熟議であるにもかかわらず、当該熟議テーマと直接に関係しない投稿が散見された。

議論が活発化している特定の参加者層と、一方的な書き込みのみで議論に参加されない方の二極化の兆候は見られた。

今後に向けては、これまでの各熟議で蓄積されたノウハウを踏まえ、予め十分な体制づくりや個別局面への対処手法等の整理等を行った上でファシリテートに臨む必要性を一層感じている。

1-5 「国立大学法人」に関する熟議

テーマ	国立大学法人の課題やその改善方策は？
実施期間	平成 22 年 5 月 27 日（木）～6 月 17 日（木）(22 日間)
コメント数	210 件
熟議の概要	国立大学の教育・研究・社会貢献の現状、財務会計関係、人事関係、管理運営組織等、中期目標・計画・評価等について様々なコメントが出された。

【テーマ担当部署・者の所感】

- ・ インターネット上ということで地理的制約がないこともあり、海外から、国立大学の改革の事例が紹介される等、広範な情報入手ができた。
- ・ 本来は不特定多数の意志を持った方からの議論を目的としてネット熟議を行っているが本熟議では、コメントが特定のユーザーに限定されてしまった。特に今回の報告書をもとにした熟議であると、報告書の内容に反対の意見が多く集まる傾向がうかがわれ、総論としてその記述が良いのか悪いのかという判断が容易にはできない。
- ・ 単発的で一方的なコメントが多く、かつ、コメントの投稿からそのコメントに対する返信までのタイムラグが長くなってしまいうこともあり、議論の深化が難しい。
- ・ 報告書に対する意見聴取においては、パブリックコメントとの使い分けの検討が必要。

1-6 「研究費」に関する熟議

テーマ	我が国の研究費を使いにくくしている問題点は何か？ 研究費を使い易くするための方策を、一層具体化するために
実施期間	平成 22 年 6 月 3 日（木）～6 月 30 日（水）(28 日間) 平成 22 年 9 月 27 日（月）～10 月 22 日（金）(26 日間)
コメント数	198 件 104 件
熟議の概要	研究費を効率的に使用するとともに、その使い勝手の向上を図るため、我が国の研究費を使いにくくしている問題点について熟議カケアイを実施。 <u>研究費の複数年度にわたる予算執行の重要性や、研究費の申請・交付・用途に関する課題、研究機関内における手続きの煩雑さ等について意見交換を行った。</u> 平成 22 年 7 月 29 日とりまとめられた「 <u>研究費・プロジェクト系教育経費の効果的予算措置に関する中間報告（予算監視・効率化チーム）</u> 」について、さらに詳細な検討を行うため、再び熟議カケアイを実施。 <u>中間報告の記載事項について好意的な意見を多くいただくとともに、政府における取組と研究開発現場における改善の取組を両輪で進めるべき等の指摘がなされた。</u>

【テーマ担当部署・者の所感】

< 今回の熟議で重視した点 >

今回の熟議において最も重視した点は、「政府が熟議の成果を迅速に政策立案・実行に結びつけることで、多くの熟議参加者が「政策立案に携わった」という実感を獲得できるよ

うにすること。」である。これは、黎明期である熟議カケアイの現状を踏まえ、今後も多様な現場の方々の協力を得ながら熟議カケアイを実施していくためには、熟議で議論された論点を具体的な形で政策に結びつけることが、政府と国民との信頼関係を構築する上で何より重要であると考えたためである。

ただし、熟議における意見を鵜呑みにする形ではなく、政策の有効性・これまでの経緯等の現状を踏まえた形の政策立案こそが、真に社会国民に求められるものであるとの判断から、「論点抽出」を重視する熟議及び「政策案の深掘り」を重視する熟議について、併せて2回実施することとした。

< 熟議上での意見交換の課題 >

熟議上での意見交換は、現場で発生している具体的な課題抽出に非常に有効であった。一方で、各課題に対応した具体的な政策について、ファシリテーターを中心に立案していくことは、非常に難航した。主な理由として、以下のような点が挙げられる。

- ・ 課題が多岐にわたりかつ非常に具体的であるため、ファシリテーター自身が、表出する課題の原因がどこにあるのかについて、短時間で十分に実状を把握、分析、政策立案することが難しかった
- ・ 政府の決定する政策が、熟議での発言に必ずしも拘束されない構造であっても、ファシリテーターは政府を代表して参加しているため（少なくとも参加者はそのように捉える傾向）、現行の政府の取組とは異なる方向性の発言をすることに対する葛藤があった。結果として、発言を手控えることもあった。

これらの課題は、「ファシリテーターとしての能力向上が必要」との示唆である一方、「政策立案段階に応じた熟議ノウハウの不在」や「ファシリテーターかつ政策立案担当者である者の責任の所在」等、熟議カケアイにおける構造上の課題が顕在化したものとする。

< 今後の熟議の発展に向けて >

熟議カケアイに関する課題は多く存在するが、今後の熟議において特に明確にすることが必要な点として、以下の点を提示したい。

政府が熟議を行う「目的」を、より一層明確にすること

熟議の成果を政策立案に着実に結びつける観点から、熟議を行う「目的」は、熟議成果の取り扱いと政策立案プロセスとの関係に今まで以上に配慮した形で設定されなければならないと考える。具体的には、

現在の政策立案段階（現状把握段階、課題分析段階、立案した政策の検証段階、実施された政策の評価段階 等）を明示した上で、

政府が社会国民に具体的に何を求めており（現場の事例を求めているのか、新たな政策提案を求めているのか、政策の評価を求めているのか 等）

熟議の成果を如何に活用しようとしているのか（法律・予算等どのような政策手段を検討しているか、いつまでに実施するか、誰を対象とした政策とするか 等）について明確にすることが、効果的・効率的な政策立案において極めて重要であると考えられる。

(明確な目的を敢えて定めないボトムアップ型の自由闊達な議論を批判する趣旨ではなく、「とりあえず決まりだから熟議する」というような無目的な熟議を、政府として絶対に行ってはならないとの趣旨である。)

なお、これらの事項が十分に満たされた熟議が政府・国民の間でなされるのであれば、熟議担当者及び社会国民の負担低減の観点の取組も併せて検討すべきである。

(熟議が政府や社会国民にとって過大な負担となれば、中長期的な熟議の発展を阻害することが予想されるため、熟議黎明期の現段階であればこそ、熟議参加者の負担を軽減するような取組も併せて検討すべきである。)

< 参考：熟議の成果を踏まえた具体的な取組 >

研究費に係る予算財政制度の改革

- ・ 研究費を効率的に使用するとともに、その使い勝手の向上を図るため、鈴木副大臣のイニシアティブによって設置された「予算監視・効率化特命チーム」において検討中。
- ・ 平成 22 年 7 月 29 日に「研究費・プロジェクト系教育経費の効果的予算措置に関する中間報告」(予算監視・効率化チーム) をとりまとめるとともに、同中間報告の内容について、同年 8 月 30 日に「予算財政制度の改善に関する提言」(文部科学省政務三役会議決定) として、研究費の複数年度にわたる予算執行を可能とする予算財政制度改革等を提言し、財務省・会計検査院等関係府省に通知。

1-7 「学校評価ガイドライン」に関する熟議

テーマ	学校評価ガイドラインはどうあるべきか？
実施期間	平成 22 年 6 月 14 日(月)～6 月 24 日(木)(11 日間)
コメント数	146 件
熟議の概要	学校評価ガイドラインを改訂し第三者評価に関する内容を追記する際、熟議カケアイサイトにて意見募集を行った。主に 学校評価の意義・目的、 評価項目、第三者評価の実施体制等、 実施に当たっての留意点について意見が寄せられた。

【テーマ担当部署・者の所感】

- ・ 学校評価の意義や目的についてあらためて理解していただくよい機会となった
- ・ 熟議カケアイへの掲載期間が 11 日間と短いため、質問への返信や投稿者への問いかけ・提案等、活発な熟議に向けた十分なファシリテートができなかった。その結果、熟議カケアイの長所である「双方向のやりとり」を十分に行えず、同時並行で行っていたパブリックコメント(任意の意見募集)と別に行う意義があまり感じられなかった。
- ・ 熟議のテーマと関係のない意見もいくつか見られた。この点は、熟議開始の投げかけで、熟議カケアイの趣旨、熟議テーマ(この場合、学校評価制度)を分かりやすく解説することで改善されると思われる。

1-8 「スポーツ立国戦略」に関する熟議

テーマ	我が国が「スポーツ立国」を目指す上で必要な方策は？
実施期間	平成 22 年 7 月 22 日(木)～8 月 12 日(木)(22 日間)
コメント数	593 件
熟議の概要	<p>今後の我が国のスポーツ政策の方向性を示す「スポーツ立国戦略(案)」の内容を踏まえ熟議を行った。</p> <p>主に以下のような論点が参加者から提示され、各論点について様々な意見交換がなされた。</p> <p>新たなスポーツ文化の確立の趣旨(新しい文化とは?)</p> <p>スポーツと医療・介護の連携</p> <p>スポーツの苦手な子ども達への対策(やる気を向上させるための工夫 等)</p> <p>誰もが気軽にスポーツを楽しめる環境整備 (身近なスポーツ施設の整備・充実、総合型地域スポーツクラブの育成、プログラム内容の充実 等)</p> <p>アスリート等の支援方策 (トップアスリートの育成・強化、セカンドキャリア、審判員のレベル向上、大学の活用 等)</p> <p>学校体育・運動部活動の改善 (勝利至上主義の廃止、小中学校の全国大会の廃止、外部指導者との関係 等)</p> <p>トップアスリート等が地域スポーツの場で活躍できる体制の整備 (指導者としてのスキル向上 等)</p> <p>障害者スポーツとの連携</p> <p>スポーツ予算の充実</p> <p>NAASH の機能強化(必要性がない。役割を具体的に明示 等)</p> <p>国・都道府県・市町村の連携強化、役割分担</p>

【テーマ担当部署・者の所感】

熟議参加者が 100 名を超え、投稿件数も約 600 件に至り、熟議テーマに関して多様な観点から論点が提示され、参加者間で意見交換(カケアイ)が行われる等、活発な熟議となった。

また、科学技術関係者からも投稿がある等、熟議参加者のグループは多岐にわたり、スポーツ関係者のみならず、国民の幅広い層が参加して意見交換が行われる有意義な機会となった。

現役の五輪の出場の経験もある現役のアスリートや指導者からも投稿があり、スポーツ現場での経験を踏まえた提言がなされる等、内容面でも充実した熟議カケアイとなった。

他方で、ファシリテーターからの要請にもかかわらず、一部の参加者による過剰な連続投稿が行われ、他の参加者から「参加しにくい」と苦情が寄せられる等の課題もみられた。

1-9 「特別枠」要望（初等中等教育関連）」に関する熟議

テーマ	これからの子どもたちの学び、学びの共同体としての学校はどう変わるべきか？ そのために、何が必要か？
実施期間	平成 22 年 9 月 27 日（月）～10 月 22 日（金）（26 日間）
コメント数	1,058 件
熟議の概要	本熟議においては、「元気な日本復活特別枠」に要望された初等中等教育関係予算（要望枠）に関する議論が行われた。 少人数学級（35・30人学級）の実現、 未来を拓く学び・学校戦略の推進、 高校生に対する給付型奨学金事業、 安全で質の高い学校施設の整備について 議論が行われた。

【テーマ担当部署・者の所感】

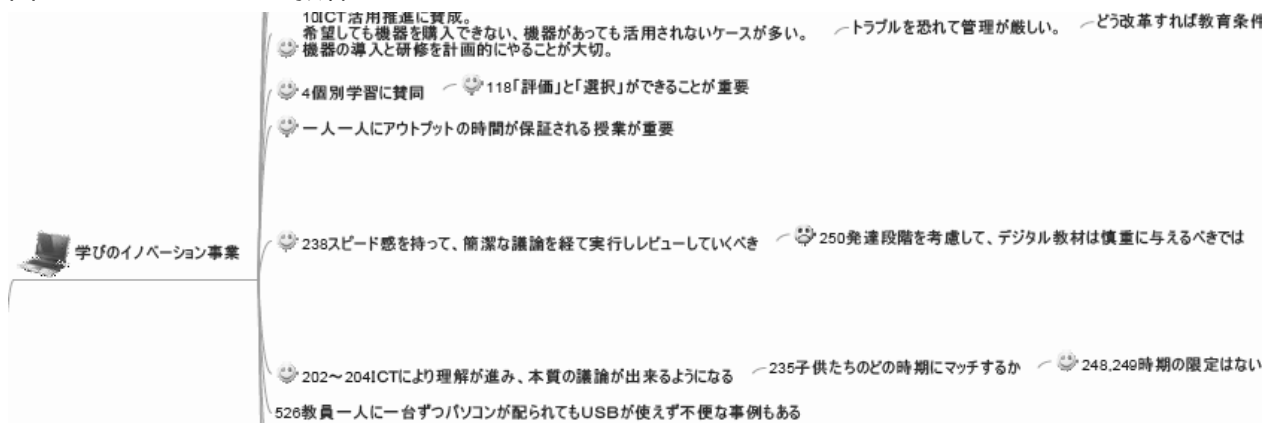
全体的な所感

- 1058 件もの意見が寄せられる等様々な立場から学校内外の視点を踏まえて、全体的には活発な議論が行われた。

マインドマップの活用

- 文部科学省の「元気な日本復活特別枠要望」に関する熟議ということで、本要望に関する賛成・反対の量的イメージについて、ニコニコマーク等を活用しながら、可能な限り「マインドマップ」に反映させた。

図5 マインドマップ抜粋



- 「マインドマップ」によって、問題意識や関心が集中する論点等を浮き彫りにするとともに、テキスト形式の「まとめエリア」によって、本要望に関する現状・課題認識や施策の留意点等を整理する等、単発のパブリックコメント等では収集しづらい具体的部分を熟議によって引き出し「見える化」する試みを行った点は、単なる賛否の集計にとどまらない、建設的・進歩的意義があると考えられる。他方「マインドマップ」や「まとめエリア」の編集等、様々な工夫を行った労力に比して得られる成果・効果が少ない、又は見えづらいことが課題。

今後の課題

- ・ 安全に係るテーマ等、基本的に賛成の立場での意見が多いことが予想されるものは、熟議カケアイが賛成意見を示すだけの場となりがちである。そのため、いかにファシリテーターが議論を活性化できるかが重要となってくるが、問題提起をするか、議論に沿って求められた内容のみを示していくか、迷う部分があった。
- ・ 議論が進むうちに、元々の熟議テーマと異なる意見が多く出た際に、熟議テーマに係る議論を再度活発化させることが難しかった。

1-10 「特別枠」要望（高等教育関連）」に関する熟議

テーマ	我が国の将来を担う「強い人材」を育成するため、大学の機能強化や学生の学びへの支援に必要な方策は？
実施期間	平成 22 年 9 月 27 日（月）～10 月 22 日（金）(26 日間)
コメント数	124 件
熟議の概要	本熟議においては、「元気な日本復活特別枠」に要望された高等教育関係予算(要望枠)に関する議論が行われた。 具体的には、 学びたい人を応援するための「奨学金等の充実(無利子奨学金事業の拡大、授業料減免の充実、新しい公共の担い手等)」、 成長の土台となる大学の教育研究基盤を強化するための「国立大学法人運営費交付金等の大学の教育研究活動を支える基盤的な経費の充実」、 成長を牽引するリーダーと高い国際感覚を備えた人材を養成するための「博士課程教育リーディングプログラムや世界展開力強化事業等」、 その他上記に関係する高等教育に関する事項、 について意見交換がなされた。

【テーマ担当部署・者の所感】

今回偶然にも熟議のファシリテーターの担当が回ってきたが、熟議の期間中は試行錯誤が続き、その運営の難しさを感じる一方で、様々な方々の協力を得て無事熟議を終えることができ安堵しているところである。

この国民と双方向の対話が可能な熟議は、議論を通じて参加者同士やファシリテーターと参加者との間の理解を深めることが可能なものとなっており、それぞれの真意をより具体的に感じ取ることができるツールであることから、政策の大きな方向性を定める場合や新規施策を立ち上げる場合等に、国民がどのような点に好感を持っているのか、あるいは国民の中にある疑問点やその解決策について、迅速に見定めることが可能なものとして有効であると考えられる。

本熟議においても、熟議の参加者がどのような点に関心を持ち、どのような点に疑問を感じているのか、その一端が垣間見えたように思われるが、より一層参加者からの意見を熟議から吸収するために、担当者が熟議を通して感じた課題等を挙げることにする。

熟議の内容等について

1. テーマの明確化（個別化・具体化）について

熟議のテーマについて、参加者から自由に意見を求めるものなのか、あるいは個別のテーマに関して議論を求めるものなのか明確にすることが改めて重要であると感じた。今回の熟議においては、個別事業の予算要望についての議論が主なテーマであったが、テーマが多岐にわたっており、多くの事業に関することが1つの熟議において議論されたこととも相俟って、結果的には個別事業に関する議論があまり深まらず、総論的な内容の意見（例えば、奨学金の充実、国立大学法人運営費交付金の充実といった大括りした意見）が比較的多く見られたところである。参加者が満足できるよう、思いの丈を述べてもらうことは歓迎するところであるが、一方でそこからもう一步先へ議論を進めていくことができるかどうかについては、ファシリテーターの力量が問われるところであろう。

提言

複数の個別のテーマに関して議論を求める場合には、1つの熟議の中で複数のテーマについて議論を求めるよりも、それぞれ別に個別化・具体化したテーマを設定して、参加者に具体的なテーマが見えるようにし、議論の焦点を絞ると良いのではないかと。（少なくとも議論するテーマが何かをファシリテーターがはっきりさせる必要がある。）

また、熟議を円滑に進めることができるよう、職員がファシリテーターの経験を積むことが必要である。

熟議の運営について

1. 熟議における各担当の役割の明確化・具体化について

担当局では、事前に熟議の意見を整理するための方針について共通理解を図ったり、関係課室の担当者の役割分担等を明らかにしたりしていたこともあり、本熟議において各ファシリテーターの協力の下、意見の整理や質問への回答等が比較的スムーズに行われたと考えている。特に奨学金関係の意見や質問が比較的多く出たが、奨学金事業担当ファシリテーターには迅速に対応していただき感謝している。

提言

特に課室を跨ぐ熟議のように多人数が熟議に関わる場合には、各ファシリテーターの役割の明確化・具体化、十分な連携体制の整備や周囲の理解・サポートが重要である。

2. ファシリテーターの熟議への関わり方について

ファシリテーターは、多くの場合、個人的な考えが明らかになったり、参加者から議論の誘導と誤って捉えられたりしないよう、資料の紹介や質問への回答等当たり障りのない（慎重な）対応に留まっているが、場合によっては、議論を活性化させるため、議論の推進役となることも必要であると考えられる。本熟議においても直接テーマには関係ない意

見であっても、議論を深めつつ本来のテーマへ繋がられそうな面白そうな意見もあったが、逆に議論を深めようとするとな個人的な意見を述べざるを得ないものがある等、どこまで踏み込んで良いのか躊躇する場面もあった。

提言

参加者に誤解を与えないことが大前提であるが、上記のような点についてファシリテーターの熟議への関わり方に関するルール等があると、当該ルールに則り、ファシリテーターと参加者との間でより議論が深まったり、参加者の真意をより掘めたりすることもあるのではないか。

1-11 「特別枠」要望（科学技術関連）」に関する熟議

テーマ	知恵（ソフトパワー）と人材（ヒューマン）に基づく科学技術の取組を強化して、元気な日本を復活させることができるか？
実施期間	平成 22 年 9 月 27 日（月）～10 月 22 日（金）(26 日間)
コメント数	67 件
熟議の概要	<p>急速な世界の多極化や競争激化に伴うイノベーション・システムの構造変化が進む中で、我が国の持続的な成長のプラットフォームたる科学技術をどのように振興し、成果を国民生活につなげていくべきかという観点から、熟議カケアイを実施。</p> <p><u>若手研究者に対する積極的な経済支援・独立ポストの確立、 学術研究費の拡充、子どもたちが科学技術に触れる機会の充実、 研究開発を支える補助者の充実等</u>について意見交換を行った。</p>

【テーマ担当部署・者の所感】

< 熟議上での意見交換の課題 >

今回の熟議カケアイでの意見交換は、意見総数が 67 件である等、参加者数が他の熟議に比較して少ないことが特徴であった。

参加者数が少ないことのみをもって熟議の成否を判断することは適切ではないと考えるが、論点について知見を有する多くの方々の参加をいただくことは、熟議を政策創造手段として発展させていくために不可欠な要素であり、その理由について十分に検証する必要がある。参加者が少なかった主な理由として、以下の様な点が考えられるのではないか。

- ・ 熟議カケアイ実施の広報については、主に文部科学省HPに掲載することのみにとどまってしまう、その他の広報手段が各ファシリテーターの判断となってしまった。
- ・ 熟議カケアイを実施する際の広報手段として、安価に、迅速に、簡便に、幅広い関係者に周知する手段について、積極的な検討をすべきであった。特に、極めて多忙な政府担当者であったとしても「簡便」に（多くの事務手続きを要しない形で）周知できることが極めて重要。

同時期に、内閣官房において同テーマの意見募集が行われていたことについては、ここでは問わない。

< 今後の熟議の発展に向けて >

熟議カケアイに関する課題は多く存在するが、今後の熟議において特に明確にすることが必要な点として、以下の点を提示したい。

「簡便な」広報手段の確立

今後とも、多くの方々に熟議カケアイに参加していただくとともに、政府の担当局課における広報に係る事務負担を最小化にするため、「簡便な」広報手段について検討することが極めて重要である。

(政府として広報活動を軽視するという趣旨ではなく、情報通信手段を十二分に活用した効率的な広報活動を推進することで、熟議の一層の活性化を図るべきとの趣旨)

1-12 「特別枠」要望(スポーツ関連)」に関する熟議

テーマ	「スポーツ立国戦略」を強力に推進していくために必要な方策は？
実施期間	平成 22 年 9 月 27 日(月)～10 月 22 日(金)(26 日間)
コメント数	185 件
熟議の概要	主に以下のような論点が参加者から提示され、各論点について様々に意見交換がなされた。 「新しい公共」の形成(住民自らが主体的にスポーツ環境を構築)する人、観る人、支える人が一体となれる場づくり(観覧席やオープンスペースを備えた構造 等) 誰もが気軽にスポーツを楽しめる環境整備 (身近なスポーツ施設の整備・充実、総合型地域スポーツクラブの育成、プログラム内容の充実 等) アスリート等の支援方策 (トップアスリートの育成・強化、セカンドキャリア、スポンサー獲得に向けた学習の場の提供 等) 学校体育・運動部活動の改善 (勝利至上主義の排除、外部指導者との関係 等) トップアスリート等が地域スポーツの場で活躍できる体制の整備 (指導者としてのスキル向上、マネジメント能力向上、地域スポーツの現状に関する学習 等) 社会全体でスポーツを支える基盤の整備(行政主導ではなく現場主導 等) 総合的なスポーツ行政体制の検討(全国的なスポーツ会議の開催 等)

【テーマ担当部署・者の所感】

前回の熟議と類似のテーマであったためか、参加者数・投稿件数ともに減少し(30名・185件と前回の3分の1規模となった)前回と比べてカケアイの活発さが薄れた。前回と同様に一部の参加者による過剰な連続投稿があった。また、熟議テーマと直接に関係しない投稿や、意味の汲み取りにくい投稿が繰り返し行われる等の課題もみられた。

1-13 「特別枠」要望（文化芸術関連）」に関する熟議

テーマ	文化施策の戦略的な展開について～「文化芸術立国」の実現に向けて～
実施期間	平成 22 年 9 月 27 日（月）～10 月 22 日（金）(26 日間)
コメント数	230 件
熟議の概要	<p>（概要）</p> <p>「文化芸術立国」の実現に向けては、子どもが身近に文化芸術にふれる機会の充実が重要である。同時に、学校における芸術教育の充実も必要である。</p> <p>特別枠は概ね支持するものの、厳しい財政状況の中では、文化芸術振興の意義や予算措置の必要性についての丁寧な説明が必要である。</p> <p>（主な意見）</p> <p>文化芸術立国のためには文化芸術への国民意識をたかめることから 芸術の振興は継続こそ大切である 文化芸術関連予算の必要性を白地で問うべき 文化芸術立国を支える国民を育てる芸術教育の充実を 文化を享受する側にも配慮する必要がある 多様な芸術観の醸成を 美術はゼロ段階から完成までを体験する教科である 図工・美術の授業のさらなる充実への配慮を 教員への研究実践補助を 「子どもたちのための優れた舞台芸術体験事業」はきっかけとして重要 「次代を担う子どもの文化芸術体験」はタイミングが重要 文化財の認知を上げることから始めるべき 日本各地の伝統芸能の基盤である 芸術家へクオリティに値する生活保障を</p>

【テーマ担当部署・者の所感】


- ・ 個別事業の実施方法等具体的なテーマであれば、様々な意見とそれらへの賛否が出て具体的提案としてまとまっていく様子が見られた。その一方で、文化芸術振興の意義等といった抽象的なテーマの場合には、様々な意見が出てなかなか議論に発展せず、意見を集約した提言としてまとめるのが困難であると感じた。
- ・ 熟議の参加者の属性が教育関係者(特に、小中高等学校の教職員や教育分野の研究者等)中心になった。そのため、文化芸術の振興を図る手段としては多様な方法があり、芸術家の育成・芸術団体への支援・文化財の維持活用への支援等についての意見・議論が必要である中で、学校教育に関する議論に集中してしまう傾向があった。
- ・ ただし、「子どもの体験活動」や「次世代人材の育成」のための方策が必要とする意見が多く寄せられた点は、内閣官房で実施した特別枠要望に関するパブリックコメントで

の傾向とも類似しており、文化芸術振興における「子どもの体験活動」や「次世代人材の育成」の重要性・必要性に高い関心が寄せられているということが、熟議においても裏付けられる結果となった。

- ・ 文化芸術振興についての熟議において、学校での芸術教育の充実が中心に語られるように、熟議のテーマと議論展開によっては、当該熟議の担当局課の所掌外の意見が寄せられる可能性がある。その際に、文部科学省全体あるいは政府全体（文部科学省の所掌も超える場合）として、熟議での意見を汲み上げる仕組づくりが必要と感じた。
- ・ 文化芸術振興の在り方の検討をする際には、偏りのない客観的な意見が重要だが、実際の各事業等の当事者となるアーティストや文化芸術団体関係者、文化財の管理者等の議論も重要ではないかと思う。文化芸術関連予算を受けて活動する当事者が、運用上の課題や現場の要望を集約することで、予算や事業内容の検討・改善につながると考えられるが、実際の参加者の属性構成が必ずしもそうでない点に課題を感じた。

2 リアル熟議

2-1 熟議に基づく教育政策形成シンポジウム

主催	文部科学省
テーマ・内容	小・中学校をよりよくするにはどうすればよいか？
日時	平成 22 年 4 月 17 日 (土) 13:00 ~ 16:50
場所	文部科学省東館 3 階 講堂
参加者数	112 名 (約 12 名×9 グループ)
熟議の概要	学校の先生には時間、設備、裁量のそれぞれについてゆとりがない。 学校にマネジメントサービス部(「スーパー事務室」)を置いて、教員の負担を軽減することで教育の質が向上するのではないか。 学校と地域の連携を進めるために、学校側からよりオープンになっていくことが重要。 色々な立場の人が一堂に会し議論するこのような熟議の場が重要であり、今後も各地で設けられるとよい。
熟議の様子	

【主催部署(生涯学習政策局政策課)の所感】

会場が参加者数に対して若干狭かったため、他のグループの声が聞こえてしまい、参加者同士の意見が聞きづらかったが、それゆえに、参加者同士が近づき互いの意見に耳を澄まして議論をしたことにつながったという面も見られた。

文部科学省職員がファシリテーター(進行役)を務め、参加者の意見を引き出すよう努めた。教職員、保護者、学生等と文部科学省の政務三役・職員が車座になって議論することは画期的な試みであると広く受け入れられた。

ホワイトボードや模造紙・付箋等を用意していなかったが、各人の意見を画用紙に次々と記入して地面に置くことで、議論の「見える化」を主体的に試みる参加者があられ、非常に助けられた。皆で知恵を出し合うことや議論の「見える化」をすることの重要性を痛感した。

前半には固い表情だった人も、後半には、前のめりになって生き生きと意見交換をする様子を目の当たりにし、熟議の大きな可能性について、運営側としても実感することができた。

2-2 リアル熟議 - 未来の学校 - ヨコハマの学校と地域～明日からできること～<竹原委員>

テーマ	ヨコハマの学校と地域～明日からできること～
日時	平成22年6月23日(水)18:00～20:00
場所	横浜市都筑区役所6階大会議室
共催	文部科学省、横浜市教育委員会・北部学校教育事務所、港北区役所、緑区役所、青葉区役所、都筑区役所
協力	東山田コミュニティハウス、あおば学校支援ネットワーク
参加者	63名(8グループ×7,8名)
熟議の概要	<p>【熟議の結果、見えてきた課題】</p> <p>学校が何に困っていて、どういうサポートを望んでいるのか、積極的に情報発信していくことが必要。</p> <p>子どもの視点から、どんな連携が効果的か、改めて議論が必要。</p> <p>地域と学校が継続的な信頼関係をつくることが不可欠。</p> <p>学校と地域をつなぐ「地域コーディネーター」の養成をさらにすすめることが大切。</p> <p>【熟議後ワーキンググループが考察した具体策】</p> <p>学校・教育委員会・方面別学校教育事務所に地域連携担当を置く。</p> <p>地域コーディネーターのネットワーク化</p> <p>継続した地域連携のため教員の異動年数を検討</p> <p>学校運営協議会を推進する。</p> <p>市民局と調整し、地域と学校の連携の「場」コミュニティハウスのあり方の再構築</p>
熟議の様子	

【竹原委員の所感】～全国初の現場熟議 ヨコハマ熟議を振り返って～

ヨコハマ熟議は地域のちょっとした会話から生まれました。学校支援のコーディネートをしている市民と、学校で地域との連絡調整をしている先生が情報交換し、地域連携を一緒に考える場が持てたらという話からスタートし、区役所の学校支援連携担当、そして教育委員会と輪が広がってきました。

5月13日熟議開催のため最初の会議を開き、市民、教育委員会、区役所の職員が同じテーブルにつき、まず自己紹介からはじめたのですが、大変硬い雰囲気、どうなることやらと心配しました。今まで接点のなかった立場の違う人が集まり、全国で初めての現場熟議を開く・・・そして誰もが熟議という言葉に初めて出会ったので当然だったかもしれません。

そんな雰囲気を一変させてくれたのが、文部科学省共催ということでした。熟議の結果をそれぞれが当事者として行動につなげるだけでなく、政策にも活かされるということが、今までにない仕組みとして受け入れられたのでしょうか。

開催にあたり、まず100名程度が集まれる場所を確保、次にテーマを決め、対象者は実際に現場で日々動いている人とししました。広報・参加者募集・会場準備は教育委員会・区役所・市民が手分けして行いました。チラシや参加者のリスト作成・グルーピング、ワークショップの進行、交流会は市民によるものでした。6月23日当日までに北部教育事務所で計6回の打ち合わせを行いました。参加者リストができ、傍聴希望者の数が日々増え続けるなか、教育委員会指導主事の方から「いよいよですね・・・」という声が聴こえ、ようやく一体感ができてきました。

熟議当日は63名のワークショップ参加者と72名の傍聴者があり、その後同じフロアのレストランを貸し切って行われた交流会にも105名が参加し、サンドイッチと飲み物を手に名刺交換をしたり、熱く語り合う姿がありました。企画から深くかかわった人も、当日机を運び会場設営を手伝った人も、達成感は大きく、熟議にかかわったという共通の思いを持てたように思います。

大きなイベントが無事終了ということではなく、その後が問われるのが熟議ですが、ヨコハマ熟議では終了後毎週木曜日の夜5回集まりました。主催者、協力者、ボランティアによるワーキンググループがファシリテーターのコメントを加え、まとめていきました。ワークショップの結果であるすべての付箋内容を入力したり、それをもとにデータ化した検討資料を作ったり、それぞれが自発的に動きました。学校、地域保護者・区役所・教育委員会・文部科学省など役割を明確に、熟議の結果をいかに活かしていくか・・・何度も書き直し検討を重ね「まとめ」ました。

ヨコハマ熟議ではどのグループからもコーディネートの重要性が指摘されましたが、現在横浜市中期4ヵ年計画と横浜市教育振興基本計画に「地域コーディネーターの養成」が明記されています。これらは新しいものではなく、すでに横浜市で取り組んできたもので

< チラシ >



すが、「熟議」によって政策が組み立てやすくなり、追い風の役割を果たしたと言われてい
ます。結果は同じでも、行政だけが政策をつくるのではなく、現場から出た意見でもある
ということが確認できたという事例になったのではないのでしょうか？

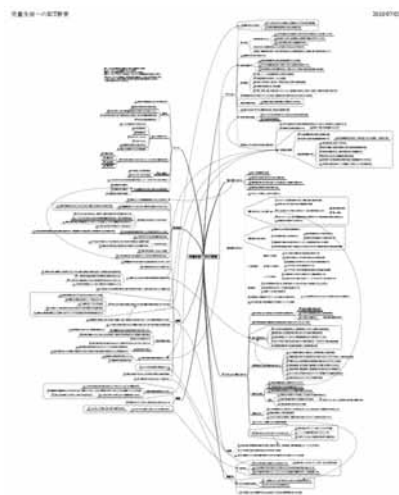
今回熟議によって、学校と地域の共通課題を確認し、行動につなげるヒントがでたこと
は大きな成果でした。もうひとつの成果として、「熟議」開催という誰にとっても初めての
ことにチャレンジをすることで、立場の違う人たちが思いを確認しながらつながること
ができました。このプロセスで生まれた信頼関係が教育現場だけでなく、地域の力となっ
ていく予感がしています。

その後北部教育事務所と都筑区役所こども家庭支援課が連携し、「小1プロブレム」解
消に向けて指導主事の保育園研修を行うことになりましたが、これも熟議の成果でしょう。
2月には地域コーディネーターの横のつながりをつくるため、さらにテーマを絞った「ヨ
コハマ熟議パート2」につながりました。

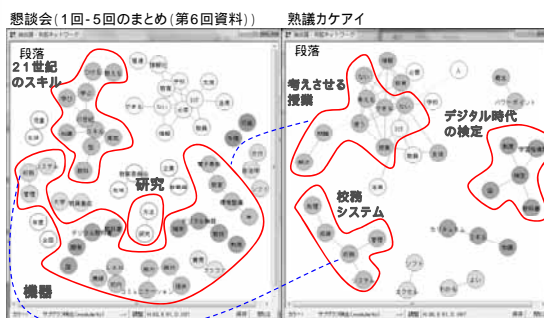
2-3 ICTに関する熟議（とうきょうED夏の研究会）＜平本「熟議カケアイ」サポーター＞

主催 共催	NPO法人とうきょうED研究会 文部科学省
テーマ・内容	ICTを活用した21世紀にふさわしい学校や学びとはどうあるべきか？
日時	平成22年7月4日（日）13：00～17：00
場所	千代田区立九段中等教育学校
参加者数	44名（約9名×5グループ）傍聴含め67名
熟議の概要	<p>「熟議カケアイ（ICTを活用した21世紀にふさわしい学校や学びとはどうあるべきか？）と「学校教育の情報化に関する懇談会」の議論を踏まえて、現場の先生を中心とした熟議を行った。</p> <p>事前に、熟議カケアイと懇談会の議論を整理したマインドマップを配布し、以下のサブテーマ毎に議論を行ったので、深く議論することが出来た。</p> <p>A：デジタル教科書・教材 B：情報端末及びデジタル機器 C：児童生徒へのICT教育 D：教員等へのICT教育 E：ICTを活用した校務支援システム・教員へのサポート</p> <p>主な議論</p> <p>昔の学校の教育情報化は自由があって良かった。今は規則が多すぎて夢のある授業がしにくい。</p> <p>全体としての計画性をもち、学校の環境をデザインも構築していくことが必要。</p> <p>意欲のある先生は多く、そうした先生をエンパワーし、デジタル機器を使ってより良い授業が出来ることを伝えていくことが必要。また体験できるセンターなどもあると良い。</p> <p>何が何でも使えばよいわけではなく、どのような力を付けさせたいかという原点に戻る必要がある。</p> <p>単に行政がこれでやれということではなく、地域特性、子どもの発達段階にあったシステムと一緒に考えながら作っていく。</p> <p>学校の校務を情報化する際に、要求分析が出来ていない。要求分析、業務を標準化し、その上でシステム化を行うことが重要。</p>

熟議の様子



全体会場、各熟議テーブルには大画面モニタを配置し、マインドマップ、テキストマイニングを使う等、ICTを徹底活用



【平本「熟議カケアイ」サポーターの所感】

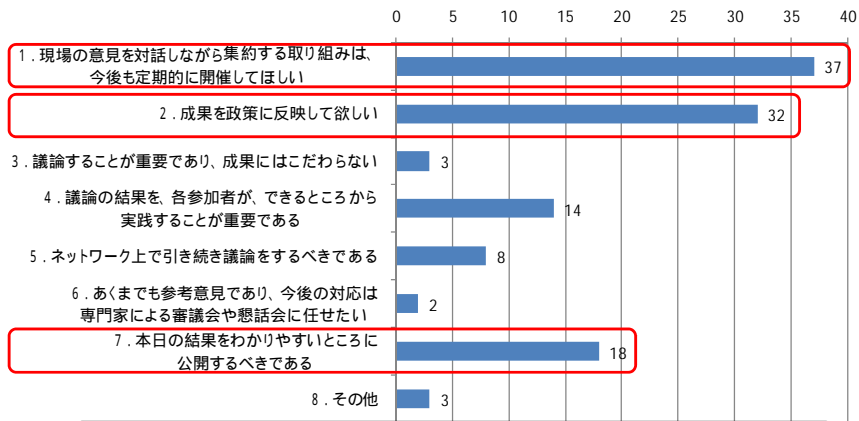
事前の準備で、熟議カケアイの議論と懇話会の議論を整理する作業は大変であったが、当日、廊下に張り出したり、各テーブルに配布したりすることで、基本情報の共有でき良かったと思う。

当日オリエンテーションで基本的な情報の提供は行ったが、参加者のバックグラウンドが異なることから、議論が円滑に進まないことがあった。事前資料を早めに配布するようにしたが、短い時間に議論を進めるためには、まだ工夫の余地がある。

議論の時間が短く、半日では短かった。午前中に講義とレベル合わせのウォーミングアップをして、午後課題変え決に向けて議論を行うなどの仕組みが必要と考えられる。雑談的になってしまう面も否めず、参加者からの指摘もあった。熟議として議論することも重要であるが、何らかのゴール設定が必要ではないか。


事後アンケートによると、政策に反映して欲しいと言う意見が多いことから、熟議結果の報告とともに、政策にどのように反映されたかをトレースしていくことが必要である。単に熟議カケアイやリアル熟議を進めるだけでなく、成果広報用のホームページを作ってはどうか。(熟議カケアイやリアル熟議提言項目が実現できました!!等)

本日の結果や今後の熟議に期待すること(MA, n=46)



「対話機会の継続」
「政策としての実現と結果のトレース」
が求められている

2-4 新宿区四谷地域第1回「学校熟議」

主催	エデュケーショナル・フューチャーセンター/文部科学省
テーマ・内容	四谷地域の学校をより良くするために私たちができること
日時	平成22年7月17日(土) 13:00~16:50
場所	新宿区立四谷中学校 コミュニティルーム
参加者数	45名(教員、地域本部役員、PTA、四谷地域の企業、熟議そのものに興味のある人、など)
熟議の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・一番の当事者でもある「子どもたち」が学校熟議に関われるようにする ・社会教育主事と共に地域と学校をつくる ・参加者がのべ1000人になるまで熟議を継続していく ・やらされ感を無くすためにも教師も生徒が「学び合い」「議論する」場をつくる ・子ども達の夢のための応援団をつくる ・先生と保護者向けの環境づくりセミナー(自然環境・学びの環境) ・今後の学校熟議へ知人・友人を口コミ参加を促す
熟議の様子	

【主催団体・者の所感】

会場が公立中学校のコミュニティルームだったため、地域の方や学校の教諭にとっては参加がしやすく、他の地域の方々には学校に来てもらう良い機会となった。学校についての熟議は、その学校で実施することに意味があると感じた。

当日は地域のお祭りがあり、参加したくても参加できなかった地域の方々がいらしたと聞いた。日程については、慎重に決めなければならないと再認識した。

模造紙、カラーペン、付箋紙などを用意していたので、自由に活用して頂いたが、使い方の例を簡単に提示しても良かったと感じた。

「より良い学校」の「より良い」というフレーズが、大きなテーマであったことから、多くの意見が出されたが、と同時に、明確な行動に繋がるような意見は少なかった。大前提として、継続して熟議をしていく、というところから始まっているので、ゆっくりとでも継続していきたい。

政策ではなく、その学校の抱える課題そのものについてじっくり話すことができる場を、学校の中で持つことができることは、本当に有意義である。他の学校でも行ないたい。

2-5 プレ*リアル熟議 未来の学校


主催団体	津和野町の教育を考える会
テーマ	これからの津和野町における教育～みんなで語ろう 子育て！教育！町づくり！～
内容	乳幼児期、児童期、中高生期の参加者の興味のある年代ごとにグループに分かれて話し合う
日時	* 平成 22 年 7 月 18 日(日曜日) 午後 1 時 3 0 分～ 4 時
場所	島根県鹿足郡津和野町 「日原山村開発センター」
参加者	保護者 10名 行政 2名 教員 2名 保育士 2名 地域 7名 合計 23名 (5～6人×4グループ)
熟議の概要	4つのグループに分かれて問題点、次に解決策を議論し、その後全体会で各まとめを発表
主な問題点 など	<p>乳幼児グループ</p> <p>* 子育ての悩み・・・子どもに元気、たくましさがない(全グループ共通) 足りない事・・・親も子ども体験不足、核家族化、少子化で孤立 遊ぶ場所、環境、異年齢とのかかわり(全グループ共通) 逆に物、情報がありすぎる</p> <p>小学生グループ</p> <p>* 学校・・・いろんなことを抱えすぎでは？ 給食食材が松江から運ばれたり、冷凍食品もある 学校再編のあり方、メリットとデメリット、全国一律でいいのか？ 学力も体力も全国より低い(小中高共通)</p> <p>* 地域家庭・・・遊ぶ時間もない、子どもは忙しい 地域を支える人づくりのためどうすればよいか？ メディア社会で育つ子ども達(全グループ共通) 子ども達にどうなって欲しいのか？(津和野町教育ビジョン)</p> <p>中高生グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 親が不安定、自信が無い、経済負担大、 ・ 体の発達についていけない精神的未熟さ ・ 都会へ出す教育による過疎化～ここではダメという価値観～ ・ 部活最優先でいいのか？地域行事の場でない ・ センター試験 45 番目の県の学力レベル

<p>解決に向けて</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大人が子育て教育にビジョンを持って次世代を育てる意識を持つ ・ 幼児期から町の歴史、産業体験を増やす。 ・ 大人から先に挨拶、声かけを意識してする。 ・ 保育から高校までの連携の中で育てる ・ 行政間の連携も重要! ・ 田舎ならではの産物を生かし、自校給食、自給率から地域を誇る。 ・ 環境の良い周辺の小規模を生かした学校再編で基礎学力を上げていく。 ・ 地域のよさとともに 過疎化や学力状況など現状を子どもにも伝える。 ・ 事務手続きなど簡略化して教員の負担を減らし、教育に注いでもらう。 ・ 教員のうち一人くらいは地域内に住んで欲しい。 ・ 学校支援地域本部事業、ふる里教育は地域と一緒にカリキュラムを組む ・ 先生も親も一緒に勉強や意見交換(熟議!!)できればいい。
<p>参加者の感想</p>	<ul style="list-style-type: none"> * 少ない人数で話しやすかったが、あっという間に終わった、時間が足りない。 * 何回もやる事、色んな立場と一緒に話す事で熟される。次回に期待!! * もっと教職員の参加を!! しかし意見が言いにくいかも、、、。 * 託児があったので参加できた。 * こういう機会が縦や横につながる。

【主催団体・者の所感】

- * 初めての試みではあったが、津和野町の教育を考える会で半年ほど前から会員同士で意見しあい、各グループのファシリテーターとしてうまく進行してくれたと思う。また意見を書く事や貼ることで、自分の思いを整理しながら進行できたと思う。
- * テーマ設定が一番難しいと思う。できるだけ多数の人に感心を持ってほしいが、反面具体的な問題提起したほうが、解決に向けて活発に意見が出るし、行政に反映されやすいのではとも感じる。
- * 民間主導だとチラシの配布や、PRの協力を得るのが難しいところがある。教育委員会の後援を取っていても各戸配布をしてもらえない学校もあつたりした。文科省から来ていただくことで、教員の意識が変わるのもちょっと情けないところもある。
- * 人数が少なかったが逆にじっくり話せたので皆喜んでいおられた。多くても7人くらいまでが良いと感じた。また教育される側の中高生も参加できる方法も考えていきたい。この街を支える次世代は彼らだという事を大人も彼ら自身も意識するきっかけになるのでは。
- * 11月27日の2回目のリアル熟議では 前回の感想や意見を積み重ね深める形で開催するために、前回の意見や感想のまとめも資料に添付したり貼り出したりする予定
- * 二度のリアル熟議の意見をまとめて、現在策定中の【津和野町教育ビジョン】に反映させるため、町教育委員会へ提出したい(要望書? 報告書? どのような様式をとるかは未定)

2-6 リアル熟議@慶應義塾大学

主催	リアル熟議を実施する学生の会（共催：文部科学省、NPO 法人、慶應義塾大学金子郁容研究会）
テーマ・内容	大学はもういない?! ~ 私たちと大学はいかにあるべきか ~
日時	平成 22 年 7 月 24 日 (土) 13:00 ~ 17:00
場所	慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎
参加者数	100 名 (約 10 名 × 10 グループ)
熟議の概要	<p>大学生、高校生、経営者、企業人事担当者等が参加し、大学入試、大学内での学習・研究や活動、就職と進学等について、議論が深められた。</p> <p>鈴木副大臣、金子熟議懇談会座長、田村熟議懇談会副座長、小林浩熟議懇談会委員に加え約10名の文部科学省職員も参加し、車座になり様々に意見交換がなされた。</p> <p>大学入試に関する議論では、高校生から、「進学の先の職業・就職に関する情報がもっとほしい」といった意見が出され、高校の教員やオープン・キャンパスを主催した学生からも、大学が提供したい情報と高校生が求める情報に乖離がある旨指摘がなされた。</p> <p>大学内の学習・研究や活動に関する議論では、「研究する教授だけでなく、教えることに特化して専門性を持った教授の存在も認めていくべきである。それと関連して、教員の位置づけを明確化していかなばならない。」といった意見も出された。</p> <p>就職と進学に関する議論では、「学生の主体性が醸成されるために、本熟議のように、学生、教員、企業人等との間で情報交換、意見交換する場があるとよい」といった意見も出された。</p> <p>まとめの発表では、「新・大学職業体験プログラム」を独自に提案してプレゼンテーションをしたグループもあった。</p>
熟議の様子	

【主催団体・者の所感】

リアル熟議を開催するに至った経緯

「公」を「官」と「民」が協調して担うという「新しい公共」のコンセプトを提示した鳩山政権が短命に終わり、「新しい公共」の灯を絶やしてはならないとして若者が立ち上が

ろうということが、直接的な要因であったと思います。そして、補完性の原理とコミュニティ・ソリューションによって、自分たちの問題は、自分たちの問題としてとらえ、問題を特定し、その解決のために行動を起こしていくことが必要であると考えました。そのためには、「熟議」が最も適切な手段であると確信し、開催するに至りました。

当日の運営に関するポイント

- ・参加者に事前に希望調査を行い、「大学入試」、「大学内での学習・研究や活動」、「就職と進学」という3つの分科会を設け、議論を深めました。テーマが大学について考えるという漠然としたものだったので、総花的に議論するのではなく、参加者の問題意識に沿って、分科会方式で議論することが良いと思いました。
- ・当日は、大学に関する熟議でしたので、大学入学前の高校生から、大学に通う大学生・大学院生、大学を卒業した企業関係者やNPO関係者等10代から70代までの多様な参加者に参加していただきました。このことにより多様な参加者属性が充実した熟議を行うための必須条件であると思いました。
- ・会場が若干狭かったが、それゆえに、参加者同士が近づき互いの意見に耳を澄まして議論をしたことにつながったという面も見られました。
- ・風船を用意し、論点・視点を変えたい際、ゲストに質問をする際には、風船をあげてもらおうよう工夫を行いました。
- ・「私の宣言」カードを用意し、社会に問題解決を要請するだけでなく、その問題解決のために自分は何ができるかということを考えるきっかけを提供しました。このことは、「新しい公共」という趣旨で本イベントが開催することになったこととも密接に関係しています。また、その一部をFace Albumという形で作成し、ウェブ上に掲載しました。
(HP：<http://real-jukugi.org/724result/>)
- ・当日は、130名もの応募を頂いたにも関わらず会場の関係で受け入れることができませんでしたので、U-STREAMでの映像配信やTwitterでの議論の公開を行いました。議論をオープンにすることによる波及効果もありました。

その後の波及効果

- ・NPO法人、愛媛県へ
「リアル熟議7.24」を終えた私たちの最初の使命は、熟議によって提案された意見をどのように提案していくかということはもちろん、どのようにして他団体へ広めていくかということでした。「リアル熟議7.24」は、リアル熟議を実施する学生の会という完全な学生団体が主催となり、実施されました。そのため、他の学生団体やその他団体でも水平展開できるように、当日出た意見をまとめることはもちろん、ロジスティクスに関係する書類や、議論を盛り上げるためのマインドマップの知見等々運営に関するノウハウを可視化しました。そして、NPO法人教育再興連盟主催の「教育夏祭り2010」、愛媛県で行われた「愛媛リアル熟議9.4」の開催のために尽力を行いました。
- ・東京大学、慶應大学@共立芝へと
また、10月になると「大学熟議」に関して、東京大学と、慶應大学@共立芝での開催することができました。大学改革を進めるためには、ステークホルダーが一堂に会し、

熟議することが最も効果的でかつ実効性のあるものになるのではないかと考え、他大学での実施を模索している最中でしたので、非常に良い取り組みだったと思います。前述したように、リアル熟議実施のマニュアルを作成済みであったので、主催者団体にそれを伝えました。マニュアル以外のオリジナリティを盛り込んでもらうことで回を重ねるごとに、それぞれの知見が活かされたすばらしい実施の手引きができています。また、議論の質も回を重ねるごとにあがっていき、「リアル熟議 7.24」で灯された火は、次々と志ある若者によって継承され、発展していています。

2-7 リアル熟議 in 秋田 < 佐々田委員 >

主催	秋田県由利本荘市教育委員会、文部科学省
テーマ・内容	学校・家庭・地域の連携強化に向けて～子ども達が語りかけるもの～
日時	平成 22 年 8 月 1 日（日）13:00～16:00
場所	秋田県由利本荘市立 本荘南中学校
参加者数	120 名（約 11 名×11 グループ）
熟議の概要	<p>【実態・現状】</p> <p>「読書力向上」を3つの場（学校・家庭・その他）で考えていくが、それぞれの環境整備は整っているのだろうか。読書をする親の姿が見られない。</p> <p>【私たちがすぐできること・すべきこと】</p> <p>図書館を「蔵書がたくさんある部屋」との位置づけだと、利活用は向上しない。そこに人がいて、利用客を迎えてくれることに大きな意義がある。地域のボランティアの力を借りながらでも温かな場を作っていきたい。</p> <p>子供の入学前検診時、人生最初の絵本をプレゼントする「ブックスタート」事業がある。若いお母さんは本の大切さなどを学ぶ機会にもなっている。</p> <p>読書をする大人を育てる必要がある。大人の読書離れを改善させることが重要である。生活上のゆとりとかかわりなくそうありたい。</p> <p>低学年の子は読み聞かせが大好き、その子供たちが主体的に本を読むことができるように、そのつながりをいかにするか、考える必要がある。</p> <p>学校に図書支援非常勤職員の配置と継続をすべきである。</p> <p>「ブックスタート」事業を確立すべきである。</p>
熟議の様子	

【佐々田委員の所感】

秋田県初のリアル熟議は、夏真っ盛りの 8 月 1 日、由利本荘市立本荘南中学校の体育館で開催しました。

「学校・家庭・地域の連携強化に向けて～子ども達が語りかけるもの～」をテーマに、保護者・PTA、地域住民、校長・教頭、教職員等 121 名（11 名×11 グループ）が参加

し、傍聴等も含めると総勢約 300 名にも上りました。

熟議の初めは、模造紙・付箋を前にぎこちない姿が目立ちましたが、途中からは、あるグループでは汗だくの中総立ちで侃々諤々の熟議が展開されるなど、会場の議論の熟度が、温度を上回る勢いでした。

具体的には、読書力向上を共通テーマに、実態・現状や「私たちができること・すべきこと」について熟議し、読書をする親の姿が見られないことが課題として挙げられ、読書をする大人を育てる必要があるといった意見なども寄せられました。

<リアル熟議の成果>

1 県民・市民と、リアル熟議の情報・在り方等を共有できた

開催前・後双方において、本熟議の情報が秋田魁新報社の記事に取り上げられました。当日の様子について、由利本荘市域内CATV・ケーブルテレビで放映されました。

2 リアル熟議後、読書推進についてのアクションプランの契機になった

読書推進の見直しと強化

親子読書の実施

親子読書感想発表会の継続・拡大・充実

3 「PTAリアル熟議 in 西目小～近くでトーク～」に連動・発展した

8月1日のリアル熟議に参加したPTAが中心となり、10月27日同市立西目小学校において、「伝えたい・ふるさと西目のよさ」「家庭における豊かな体験活動」をテーマに、約60名によるリアル熟議に発展しました。

<感想>

「リアル熟議」、今、このことを聞くと胸が高鳴る思いがする、なぜでしょうか。それはやっと地域が、大人が学校・子どもと真正面に向き合い、相手の意見を聞き、共有し、認め合い、よりよい考え・行動・アクションを起こそうとしているからです。相手を説き伏せる議論、優劣を極める議論が目的ではありません。地域社会のシンボル・本市にとっては最後の砦でもある学校の発展、将来の担い手・無限の可能性を秘めている子どもの成長を願って、大人が「明日からできることは何か」を議論し合い、アクションを起こす、まさに、子どもづくりであり、学校づくりであり、地域づくりであるからです。大人が子どもを視野に語り合うことは、勿論自らをさらけ出し、自らを語ることであり、苦しく切なく時として空しいことが多いです。しかし、保護者、地域住民、教職員等関係者が集まって『熟議』を行うことによって、それらマイナスイメージが払拭され、しかも克服されアクションプランが誕生し、実行されています。『熟議』そのものに、何か大きな価値創造が潜んでいるに違いありません。「リアル熟議」の積み重ねによって、学校、保護者、地域が連携・融合一体となり、本県の「ふるさと教育」、それに学校支援地域本部事業、コミュニティ・スクール、そして地域と学校の共助による「新しい公共」型学校が大きく位置付けられるものと確信します。

そこで、次のことを提案し、本市でできることは可能な限り実践していきたいと考えます。

< 提案 >

- 1 「リアル熟議」の推進を期待したい。熟議の主宰者やコーディネーター、更にファシリテーター等の養成に努めたい。
- 2 教職員研修及びPTA活動における「リアル熟議」を提案したい。
 - ・研修・活動では、多くのテーマが考えられるが、次のようなテーマも構想したい。子どもが学習上つまずきの多い単元・領域等を大学、先輩の教職員（保護者も加わり）で開催；例、「数直線熟議」「関数熟議」「天体熟議」等々。
- 3 8月1日を由利本荘市の「リアル熟議の日」にしたい。
 - ・平成22年の8月1日、鈴木副大臣、板東生涯学習政策局長、関係者をお招きして「リアル熟議」が開催できたことを記念し、教育に関して議論する場を設定したい。
- 4 熟議スタッフ、熟議サークル、熟議学会等を提案したい。

2-8 「熟議」 in 横浜（教育夏まつり 2010）

主催	NPO 法人日本教育再興連盟
テーマ・内容	学校のために、これから自分ができること
日時	平成 22 年 8 月 7 日（土）13:00～16:50
場所	横浜サイエンスフロンティアハイスクール 交流センター
参加者数	55 名（約 6 名×9 グループ）
熟議の概要	<p>生徒は自分の立場をはっきりした上で先生と積極的にコミュニケーションをとっていく（中学生 Group）</p> <p>多くの保護者が参加したくなる行事を企画することで、学校にみんなで参加するという雰囲気を作っていきたい。親同士のコミュニケーションを強めることによって、保護者の間で問題を解決し、教員の負担を軽減したい。（保護者 G）</p> <p>現在は地域が学校作りに十分参加できていないので、地域が参加できる新しい行事を提案していく。また、盆踊りなど既存の地域の企画の中に学校が入り込んでいくことも大切。（校長、副校長 G）</p> <p>先生には、もっと誠意を持って授業をしたり生徒と接してほしい。そのためには、生徒からも敬語等を使って、誠意をもって先生に接していく。また、学校は生徒視点を取り入れたシステムルールを導入してほしい。そのためには、生徒と先生との交流の場を作り、先生と一緒によりよい学校を作っていくことが大切。（高校生 G）</p> <p>問題点で挙げたものの 80%は、非常に忙しいということ。忙しいから生徒のこと、授業のことを考える余裕が十分でない。結局は、忙しいけど子どものために働きたいということに気づいた。そのために何をしたらいいか一生懸命考える。（教員 G）</p> <p>全ての根底にあるのは「学校の閉鎖性」。その打破のため、部活の指導など身近な部分で行動していく。ただ、問題は継続性がないこと。そこで長期休みを利用 / 同窓会のつながりを使う / 大学と学校との連携 / 授業見学をする / 学生がイベントを企画などの案が出た。（大学生 G）</p> <p>民間と学校の間には壁がある。教員になるルートも限られている。解決策としては、実際に学校に入ってみないと分からないため、相互で交流を行っていく。普通免許とは異なる限定的な免許を企業が出せるような制度など、民間から教育に携われるルートを増やす。（民間企業 G）</p> <p>納得できないルールは、先生に「なぜ出てはいけないのか」を聞いて、その上で先生と話す。（小学生 G）</p> <p>問題点としていじめや喧嘩等の人間関係、委員会や規則などの学校活動に継続性がない（1 回で終わってしまう）などが出た。自分たちにできることは、月に一度何がいけなかったか話し合いをする、いい噂をする、コミュニケーションを直す、等。大人にしてほしいことは、子どもと平等に接する、一面でなく全体を見て欲しい、等。（小学生 G）</p>

熟議の様子



【主催団体・者の所感】

これまで開催されたリアル熟議では、「ひとつのグループにさまざまな属性の人が参加することで、より多角的な議論をしよう」という志向のものが大半を占めていました。こうした形式は、議論の幅を豊かにするという目的においてはすぐれた方法だといえます。しかし今回は全く逆に、小学生・中学生といったように属性ごとにグループ分けを行ない、議論を行いました。

その結果、各班では、それぞれの属性に固有の問題に議論が焦点化され、「自分"たち"(We)が心からどうにかしたいと思っていること」を楽しそうに話している様子が見られました。

今回我々が重視したのは、最後の発表タイムです。というのも、属性ごとにグループ編成をしたことで、他の立場の人の意見を聞けなくなることを避けたかったためです。議論の基本部分は属性ごとに行いつつも、最後の発表タイムで、異なる立場の先鋭化された意見を交流させたい、と考えました。異なる立場の意見に気づき、新たな学びを生む場として、発表タイムに十分な時間をとりました。

具体的には、小学生グループが「先生に してほしい！」僕たち/私たちは する！」と発表した際に、司会が教員グループや校長・副校長グループに発言を求め、「先生たちもそれはこう思って悩んでいる、一緒に解決していこう」「それは素晴らしい意見だ、こういうふうに工夫して、先生に提案してみたらどうだろう」などとコメントをし、会場全体がそれに拍手を加えることで、「自分たちの意見の価値を認識するとともに」「異なる立場の意見に触れ、刺激を受ける」という機会を創りだすよう工夫しました。

そして発表を見て感じたことは、「属性ごとに班構成するリアル熟議もアリだな」ということでした。たしかに各班別々のことを言っているわけですが、それゆえに、立場ごとの

固有の問題意識がはっきりし、自分以外の立場の人がどのように感じているのかが明確に分かります。属性混合グループは、ともすれば総花的な問題意識・解決策になる危険性を秘めています。属性別のグループ編成は、「立場」ごとの「差異」を明確化したうえで全体の合意を目指す方法論といえるでしょう。

今回の「夏まつり熟議」は、実質的な準備期間が1週間というなかで、運営的にも100%満足いく結果を出すことはできませんでした。しかしながら、逆に捉えれば、1週間でも参加者に一定程度の学びを得てもらえるリアル熟議は実現可能であることが分かったとも言えます。とはいえ、リアル熟議が単発の「お祭り」に終わってしまっただけではない、というのが正直な実感です。現在、各地で様々なリアル熟議が開催されており、「横に広げる」運動になっています。しかし、リアル熟議の参加者が、リアル熟議で得た学びを十分に咀嚼し、具体的な行動に結びつけていくためには、同じ参加者（あるいは、同じコミュニティ）で繰り返し熟議を行うなど、「縦に深める」（継続性）方向の運動が待たれると強く感じました。当団体の開催する「教育夏まつり」においても、例年実施したり、あるいは夏まつりをキックオフとして第二回、第三回の小規模リアル熟議を実施することを検討したいと思います。

なお、以下では、アンケート結果の分析を紹介します。


アンケートに回答した参加者は、ほぼ全員が本イベントに満足感を抱いていた。その主な理由は、様々な立場の人の意見を聞くことが出来たから（そして、そのような機会は貴重だから） 自分の意見を自由に言うことが出来たから の2つにまとめる事が出来る。 のような回答は、特に中学生、高校生に見られた。普段、学校教育や教育政策に物申すことの出来る立場にない子どもたちが「教育の受け手」として自分たちの考えをしっかりと述べ、大人たちに伝える貴重な機会を設ける事が出来たというのは、本イベントを実施した意義の一つであったと言える。

逆に、参加者が感じた不満として、「議論の時間が足りなかった」という意見が多く出された。「話し合いが途中で終わってしまった」「もっと話し、もっと聞きたかった」等の声がある。この点は、本イベントの一番の改善点である。

アンケートに回答した参加者のほぼ全員は、「他の参加者の発言がためになった、参考になった」と考えている。本イベントに参加して、「子どもの意見に気づけた」「教員や学校のニーズに気づけた」という声もある。

回答者の多くが、「本イベントに参加した経験を、今後の活動で積極的に活かしたい」と答えている。しかし、「本イベントを受けて、今後どのようなことをやってみたいと思うか」という質問については回答が非常に少なかった。熟議で話し合われた内容を、参加者がその後の具体的な活動にうまく繋げられるような工夫が必要なのではないかと考えられる。なお、回答の中には、「PTAや学校で『熟議』のような取り組みをやってみたい」というものが多かった。また、「コミュニケーションを大事にする」という回答も多く見られた。

2-9 教員熟議 2010 先生の学校

主催	エデュケーショナル・フューチャーセンター/文部科学省
学びとテーマ	<p>- 子どもたちのために教員として私たちができることは何か -</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育目標と授業法 授業評価における授業法研究の位置づけについて 2. クラスファシリテーション概論 クラスづくりとファシリティティブな関わりについて 3. ファシリテーション論 ファシリテーションの考え方、チームの発達段階について 4. オルタナティブ教育論 世界のオルタナティブ教育の紹介。自立した学び手とは。 5. 教授論 実際の取り組みの紹介。今の制度や現状でできること。 6. フューチャーセンター論 学校と社会は繋がっている。もっと繋がるためには。 7. 教師論 私たちはどのような教員になりたいのか。教員という仕事とは何なのか。
日時	平成 22 年 8 月 7 日 (土) ~ 9 日 (月)
場所	長野県下伊那郡阿智村 清内路中学校
参加者数	36名 (教員、教職希望者、NPO 関係者、出版関係者、など)
熟議の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・自律した学び手を育てるためには、自分自身もそうありたい。 ・学びの場をどうデザインするかが教員の仕事であり、教えることだけではない。 ・学校は社会と繋がっているということを再認識した。 ・教室をリビングルームのようにすることで、学校に居心地の良い場所をつくる。 ・子ども達の笑顔のために、家族のために、自分のために働いている。 ・子ども達の学びをきちんと評価をすることにより、自分自身の評価に繋がる。 ・他校の先生達と連携し、切磋琢磨していきたい。
写真	

【主催団体・者の所感】

初めての合宿形式での熟議だったため、じっくり・ゆっくりと深めることができた。時間がたっぷりあったことにより、知識や情報を共有する時間も多くとることができた。普段忙しくて、考えることができないような「本質的な問い」について熟議することができた。

多人数で話す時間だけでなく、「ひとりで考える時間」もゆっくりとることができた。2泊3日という濃い時間を過ごしたことにより、教員同士のネットワークが強くなった。問題点としては、2泊3日という形式をとると、仕事の都合などで希望していても参加

できない人もいた。

文科省の共催ということで、先生方から「参加しやすかった」との声も聞かれた。会場が廃校になった中学校だったため、常に「現場」を想いながら熟議することができた。

宿泊型だったため、参加費の負担が他の熟議に比べて多かった。また、それまでの準備への労力も多かった。

宿泊型熟議には、1日型の熟議とはまた違った良さがあり、その後も参加者同士の関係がより繋がっていくと感じている。

2-10 「学びを支援する学校事務」シンポジウム・ワークショップ（リアル熟議）

主催	学びの支援ネットワーク
テーマ・内容	小・中学校をよりよくするために - 事務職員からの提言 - 市町村交流のなかでつながりを深め、これからの学校・学校事務の在り方を考える
日時	平成 22 年 8 月 8 日（日）10:15～16:30
場所	愛知県豊橋市民センター（カリオンビル）6F 多目的ホール
参加者数	59名（学校事務職員 52名、教育長 1名、教育行政職員 1名、小学校長 1名、 大学生 1名、文部科学省職員 3名）
熟議の概要	<p>午前：シンポジウム「学びを支援する学校事務 ～事務職員の未来を求めて～」 午後：リアル熟議「小中学校をよりよくするために - 事務職員からの提言 - 」</p> <p>シンポジスト 宮崎県五ヶ瀬町 教育長 日渡 円 氏 西三河教育事務所 次長兼総務課長 浅井 重一 氏 豊橋市立花田小学校 校長 安藤 正紀 氏 一宮市立中部中学校 主査 風岡 治</p> <p>コーディネーター 豊川市立御津中学校 主事 中 広行</p> <p>「学校の未来を考える - 学校事務はどうあるべきか - 」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まず学校はどうあるべきかから学校事務を考える。 ・学校の自主性・自律性の確立が求められたが、人（人事権）・もの・かね（予算）についての責任と権限がないため、学校は組織の体をなしていない。 ・分権、教育改革の流れから、これからの時代の課題を新しい手法で解決することが求められている。 ・地域のニーズに応えるためにも、学校事務の役割・機能を根っこから変える。 ・学校を良くしようとする優秀な人材・スタッフの活用が必要である。 <p>「これからの学校に必要な事務職員の役割」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員以外の職員の活用の工夫が必要。機能を結び付けるゼネラルスタッフとしての在り方が求められる。 ・学校事務職員の質の向上のために、国段階での研修・育成システムの確立が必要。 ・学校は企画・創造する組織である。学校事務職員は参画とか支援ではなく、学校を創る人そのものであるという気概を持ってほしい。 <p>「学びを支援する学校事務 若い世代へ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若い事務職員へ……。教員、地域とともに学校を創るスペシャリストとして社会に貢献する学校事務職員であってほしい。 <p>「教育の支援体制の充実、家庭・地域との連携、学校の自主性・自律性の確立」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校事務職員として、学校をどうしたいのか？ 教員や地域住民と認識を共有し、

教員の多忙観を軽減するための、適切な業務分担と組織体制の整備が必要である。

- ・学校と地域を繋ぎ、情報を共有するための組織的な取り組みとして、小中学校間の連携による共同実施組織を活用することは有効である。
- ・校長の経営ビジョンの実現を、多角的視点からマネジメントできる教育行政職員としての学校事務職員の役割の充実が、教育の支援体制の充実には必要である。

熟議の様子



【主催団体・者の所感】

準備・当日の運営

- ・「学びの支援ネットワーク」は愛知県内の学校事務職員の自主研修グループであり、熟議の運営には、県内の学校事務職員の多くの協力を得られた。
- ・初めてワークショップを企画・ファシリテートする運営側のスタッフも多く、事前に熟

議のプログラムとチームについてのつくりこみ、段取りを入念に行った。

- ・スタッフは、事前にファシリテーター研修を受講し、ファシリテーターとしての資質向上に努めるとともに、ワークショップについて学んだ。
- ・当日は、時間に余裕がなかったこともあり、タイムキープの難しさを実感した。また、プログラムを欲張りすぎた感もあり、慌ただしい運営になってしまった。

成果・効果

- ・午前にシンポジウムを行い、論点を整理したことで、テーマについての共通の土台が確認できた。そのため、導入での議論の論点、目指すもの（ゴール）についての確認がスムーズにいったと考えられる。
- ・同一職種（事務職員）による熟議であったこともあり、議論のなかで若年者とベテランの学校事務観と認識が共有できたことが成果として挙げられる。
- ・ファシリテーション・グラフィックの視覚効果は素晴らしいものがあった。議論を「見える化」することで、参加者の納得感を高められた。

課題とその解決に向けて

- ・同一職種（事務職員）での議論ということもあり、認識の共有はできたが、議論の広がりには欠けたと考える。今後、教員や管理職、保護者・地域住民へと議論の輪を広げていくことで、議論の広がりと認識の共有を期待したい。そのためには、一回きりの熟議ではなく、二回、三回と熟議を重ねていくことが必要である。
- ・議論が在るべき論に終始してしまったことがある。現場の実践者として、次の一歩（実行策）が出なかったことは残念であった。熟議の目的として、提言をするためのものか、実行のためのものか、意識開発なのか、その位置づけがあいまいであり、多くを求めすぎた。目的、内容、参加者の意識などに合わせた熟議のレベル設定が必要ではないかと考える。
- ・参加者の知識や情報に差異が大きかったこともあり、チームによってはファシリテーターが結論や落とし所にこだわり、議論をコントロールしすぎたきらいがあった。結論にこだわらず、流れに任せることも必要と感じた。


熟議をコーディネートしての感想

- ・プログラムとチーム、ファシリテーターが熟議を成功させる要素とすれば、最後はファシリテーターの段取り、臨機応変な対応が鍵を握ると感じた。議論の場をデザインするコーディネーターとファシリテーターの事前の打ち合わせと確認が必要と感じた。
- ・時間配分の難しさを改めて感じた。具体的なタイムテーブルを事前に示しておくことで、参加者に全体の流れと時間配分を意識してもらう工夫が必要と感じた。
- ・同一職種・役職での熟議では、お互いのなかでのまあまあ感とけん制があり、広がり深まりのある議論とならず、熟議がイベントで終わってしまう危惧を感じた。熟議の成果を今後どう活かされるか、活かしていくかといったことを押えながら進める必要があることを実感した。

リアル熟議全般に関する感想

- ・熟議の参加者は、持っている知識や情報、興味の対象などに違いがある。熟議の前に、これまでの経緯や現在の状況などを、参加者に「プチ熟議」(Web上)のような形で知らせることで、おおよその予想をしてもらう手立てが必要ではないかと考える。
- ・今後、リアル熟議を広く一般化するための方策として、リアル熟議を開催したいというニーズを支援するための仕組みが必要となる。例えば、リアル熟議をコーディネートするチームを編成、派遣するなどの方策が考えられる。
- ・熟議の成果を次につないでいくための方策として、参加者が引き続き交流・交歓できる場の設定が必要であると考え。また、主催者が目的に応じて継続的に活動できるような措置や、主催者どうしの情報交換の場やネットワークづくりが必要と考える。
- ・多くのリアル熟議が行われているが、学校現場(内部)の教職員が主体となった熟議はあまり見られない。外部の盛り上がりに対して、多くの教職員は在るべき論ではなく、具体的な次の一歩(実行策)を求めていることがある。学校内部からの内発的な改革を促すための熟議の在り方について再考が必要と考える。

2-11 リアル熟議 i n 横浜町 < 柏谷委員 >

主催	横浜町教育委員会、文部科学省
テーマ・内容	「未来の学校」～2020年の学校を語ろう
日時	平成22年9月4日(土) 13:00～16:00
場所	青森県横浜町ふれあいセンター
参加者数	約71名(1グループ約9名)
熟議の概要	<p>保護者の再教育をすべき。 教育環境改善には学校と地域社会の協力が不可欠。家庭や地域の教育力をもっと活かすべき。</p> <p>キャリア教育をする際など、空き教室を利用して地域の力を活用すべき。 教員研修で、教員に地域のことを知ってもらうようにすべき。 学校図書室と図書館を結びつけるシステムを構築すべき。</p> <p>学校を核としたエネルギー小社会を形成していきたい。全国に先駆けた低炭素対策の学校を作りたい。</p> <p>今日を契機に、学校として、地域として、互いに何が出来るかを考える新たな組織作りに取り組みたい。</p>
熟議の様子	

【柏谷委員の所感】

青森県の横浜町というのは下北半島のむつ湾に面し、ちょうど斧の形の柄の部分にあたる、人口が5000人余のところ。実は2年ほど前から中心校である横浜小の地震耐震度調査を行い、結果、学校を新しく作らなければいけないということ、それから町内の小学校の全児童生徒の数が現在よりも6年後には100人減っていくという現実の中で、どのような学習環境が良いのかを町民を挙げてお話ししようというようなことを横浜町教育委員会では進めておりました。

現在、小学校は4つありまして学校区ごとにこの現実をどのように捉えていくか、自分たちの子供達にはどのような学習環境で学んでいけば良いのかということ、全員参加で解決していくにはどうしたら良いのか話し合っておりました。

文部科学省から平成 22 年度、人の話をよく聞く、挨拶をする、簡潔に分かりやすく伝える、人を傷つけない、共感や感想、考えの変化があったら表明するという心を心がけた「熟議」ということを大切にして、建設的に参加とプロセスを大切にしたい話し合いを進めていきたいと思いますとお話がありました。


横浜町ではこれを全面的に取り入れまして、2 年ほど前からやっている地域の中で学習環境を考えるということ、平成 22 年度は強く推し進めてきておりました。

そんなとき「9 月 4 日リアル熟議をいかがですか」ということがありましたので、うちのような小さい町ですが構いませんかということで開かせていただきました。当日は県内外から 50 人の募集に対しまして約 100 人近くのご応募がありました。(遠くは秋田、東京からの参加もありました。)町はじまって以来のことで地域の住民の方々もお昼ご飯をせっかく横浜町に来てくださるのだからということで、地元のホタテ入りカレーライスをご馳走したり、大変温かいムードの中でお話し合いができました。テーマは「2020 年未来の学校はどうあるべきか」ということでした。熱い議論が交わされまして、かなり建設的な良いお話しがもてました。熟議の中では教育環境改善には、学校と地域社会の協力が不可欠。家族や地域の教育力をもっと活かすべき。教育研修で教員に地域のことを知ってもらうようにすべき。学校を核としたエネルギー小社会を形成し、全国にも先駆けた低炭素対策の学校を作りたい。今日を契機に学校として、地域として互いに何が出来るかを考える新たな組織作りに取り組みたい等の意見が出、発表されました。その姿を目の当たりにした横浜中学校三年の男子生徒は県の防犯弁論大会で熟議のことを取り上げ「人間関係の悩み」を解決するには、相手の立場に立ち物事を考える熟議の大切さを訴え高成績をあげました。

町では先述の課題解決に向け、リアル熟議参加議員(2 名)を中心に町をあげての熟議に取り組みつあります。その後、隣の市のむつ市から熟議について開催希望の問い合わせがあり、住民の方々が全員参加で教育のことを考えられる良い機会だということで、是非むつ市でも「横浜町の熟議」のような熟議を行いたいということでお話がありました。それを受け、官民一体となった 20 年の歴史ある下北半島活性化研究会(事務局むつ J C)が主催で、10 月 25 日鈴木副大臣の「熟議について」と題しての講演会が開催されました。月曜日の午前中にもかかわらず、多くの住民が集い大好評で 1 時間 20 分に及ぶ講演は地元のコミュニティ FM アジュールにて 11 月 3 日全市民(6 万人)にむけ放送されました。また、青森県教育委員会と連合 P T A 連合会では既に「地域・家庭・学校の連携はどうあるべきか」ということで、熟議を 10 月 7 日開催し(参加者は青森県教育委員会、県連 P 正副会長、青森県中学校長会々長、青森県小学校長会々長)、熟議五箇条、人の話をよく聞く・挨拶をする・簡潔に分かりやすく伝える・人を傷つけない・共感や感想・考えに変化があったら表明するということを全面に押し出して、みんなで建設的な意見を取り交わしたということ聞いております。青森県では、熟議五箇条はどんな会場でも参加者全員に共感を得やすいので全面に打ち出しています。

口が重く、なかなか口を開こうとしない北国の人と思われがちな青森県民ですが、なかなかどうして活発な熟議が各地で行われてきており、人口 5000 の北辺の小さな町のリアル熟議の波が確実にその波紋を広げつつあります。

2-12 愛媛リアル熟議

主催	愛媛リアル熟議を実施する会
テーマ・内容	明日の学校を語り合おう -小中学校をよりよくするために、私たちができること-
日時	平成 22 年 9 月 4 日 (土) 13:00 ~ 16:45
場所	愛媛県 松山市立椿小学校
参加者数	計 171 名 (内訳: 参加者 93 名 (約 10 名×10 グループ)、傍聴者 26 名、スタッフ 26 名、ゲスト兼参加者・来賓 16 名、報道 10 名)
Web サイト	http://ehime.real-jukugi.org/ 報告書や当日の写真など、成果報告を掲載しています。
熟議の 主な意見	学校は、子どもたちだけのためにあるのではなく、地域に住む人々みんなのためにある。
熟議の様子	

【主催団体・者の所感】

概要

初のリアル熟議 四国開催。

準備期間 40 日間で開催。準備に 400 時間以上を費やした。特に時間がかかったのが、国、県、市との同時調整、熟議を知らない地元運営チームのマネジメントであった。市の教育委員会などからは何度も怒られ苦心したが、最後には彼らは応援団になってくださった。

「熟議カケアイ」ボランティアスタッフの神野(愛媛リアル熟議 9.4 代表、慶應義塾大学 3 年)が、故郷愛媛の新しい公共・教育向上の実現を目指し熟議を開催したいと思ったのがきっかけ。

新しい公共円卓会議委員 寺脇氏はじめ、政務官の高井氏(当時)、愛媛県知事 加戸氏、愛媛県教育委員会、松山市教育委員会教育長 山内氏、松山市教育委員会、地域の小学校を巻き込んだ。

現地で協力者を募り、新しい公共や熟議の趣旨に共鳴する市民・NPO による、手弁当の運営チームを発足させ、開催。今までのリアル熟議にない形で実現した。また、個人として多くの愛媛県庁、松山市役所の方々のご協力があった。

地方熟議の先導者になろうと、スタッフ一同意気込み開催。

会場は、松山市教育委員会のご厚意で、公立小学校の体育館を使用した。また、松山市

教育委員会と椿小学校には、来賓対応や熱中症対策、会場設営など、多くのご協力をいただきました。

予算ゼロで開催した。しかし諸経費を、運営チームおよび松山市教育委員会、会場の松山市椿小学校が負担した。

参加者・議論について

参加者は、四国四県、山口県、広島県、東京都から参加。3割は、四国の元気な大学生。また、東京から文科省職員、地元から教育委員会関係者、教員、地域の方たちの参加があった。

四国という地域の特性上、webによる広報は殆ど効果がなく、足で稼ぐしかなかった。様々な方々のご協力で、最終的に、募集を上回る人数の参加をいただいた。

異世代と自分たちの地域の教育について議論するという機会は、なかなか愛媛で開催されないことから、今後の開催を望む声が多かった。(webサイトのアンケート結果をご参照ください)

参加者の満足度は、五段階評価で「満足だった」「やや満足だった」を合わせると85%であった。

会場の都合上、終了後に交流の時間を設けなかったが、交流の時間があれば、今後のネットワークづくりができ、新たな創発が生み出される雰囲気になっていた。

参加者の教育に対する認識に差があるので、それをまとめるのが大変だった。

教育現場の具体的な話をあまり知らない参加者(例えば大学生)が学びの姿勢でいてくれることは、議論が進む大事な要因であると思うので、学生、会社員、NPO関係者、教育関係者など様々な人が参加してくれると良いと思う。

なんとなく参加した人を、次のステップに進めていく必要がある。

私の熟議宣言カード「私ができること」を持ち歩き、後日自分で確認できるよう、名刺サイズで作ればよかったのではないかな。

当日について

前半熟議 60分について

アンケート結果では、長い3.7%、ちょうど良い63.0%、短い33.3%となっている。

テーマ次第で、時間が変わってくると思うので、今回のようにテーマが大きければ、90分くらいにしてもよいのではないかな。

実際にやってみて、前半は60分より短くては熟議ができない。

後半熟議 60分について

アンケート結果では、長い3.7%、ちょうど良い58.0%、短い38.3%となっている。

短かった。時間が足りなかったために、参加者それぞれが自分の気持ちを言うだけになってしまっていた。大体まとまってきたな、と実感できる時間が必要ではないかな。それによって、参加者の満足度も変わってくると思う。90分がちょうど良いのではないかな。

多少時間の猶予が可能であれば、進行がやり易い。

全体

後半熟議にまとめの時間を付けるかどうかは問題ではなく、まとめができる段階まで熟議ができる時間を確保することが大事なのではないか。

議論をまとめる段階まで議論が進んでいなかったグループや参加者の意見を一端だけ見た形になってしまったグループもあったので、熟議の時間が、計 120 分より多く必要ではないか。

画面に大きく、カウントダウンタイマーを表示させ、進行時間が全体共有できるようにすれば、さらに運営やファシリテーションが円滑になるのでは。

「熟議」まで果たして行けたかな、という心残りがある。

グループについて

私の熟議宣言カードを、参加者同士で共有すればよかった。

各グループに配布したホワイトボードと付箋は大いに活用され、論点整理に役立った。最後のグループ発表時にグループ全体の意見が反映できるよう、発表のためのグループワークの時間が必要である。

当初、10 人が熟議の適正規模だと思われたが、実際にやってみて、7 人か 8 人くらいが適正規模ではないかと実感した。ファシリテーターの力量とテーマの幅、熟議の時間にもよるだろうが、一人ひとりが十分に発言できるようにするには、10 人は多い。

ファシリテーター

10 グループのうち、半分を地元のスタッフがファシリテーターを務めた。文科省職員、プロファシリテーターに劣らないものだった。

事前のファシリテーター講習会に参加して気持ち became 楽になった。慣れていない人にとっては、事前の講習会が必要。

ファシリテーターは、熟議が終わった直後にログとアンケートを見ると、ファシリテーターの振り返りをすぐにできるのではないか。

ホワイトボードを、ファシリテーターが率先して使うことで、参加者の距離が縮まり、議論が進んだ実感があった。

その他

終了後、ごみがあった。ごみを持ち帰るよう、特に公共施設の場合は徹底しなければならない。

来賓（政務官、知事、松山市教育長）の方々のあいさつで、参加者が緊張したかもしれない。（参加者の中でも特に教育関係者。）

熟議する場で、オフィシャル感は必ずしもいらぬ。

参加者が熟議後どう意識や行動が変化したか、追跡調査ができればよいのでは。

もしもの時のために、大事なパートにバックアップが 2 人必要では。

今後について

学生の力で、多くの人が集まり、多くの議論が深まり、これからにつながる人間関係ができたのではないだろうか。

次のステップに進むための熟議をする必要がある。


またいつか開催されるのを待つ、ではなく、今度は自分がやろう、という声が拳がればよい。

志を持った人が、一生懸命に活動すれば、共感してくれる人が必ずいる。そのような人を見つけられるか、さらに協力してもらえるかが鍵ではないか。

1回だけの開催は、ボランティアでもできると思う。だが住民企画、参加で熟議を重ねるには経費の持ち出しは負担になる。そのためには、費用を捻出する手法を検討していく必要がある。

愛媛リアル熟議 9.4 をきっかけに、現在愛媛では、今後新しい公共、その手段としての熟議をいかに実現するか、議論が行なわれている。

2-13 三鷹熟議<貝ノ瀬委員>

主催	鷹南学園コミュニティスクール委員会
テーマ・内容	教育活動を活性化させるコミュニティスクール委員会
日時	平成 22 年 9 月 18 日 (土) 13:00 ~ 16:00
場所	鷹南学園三鷹市立 中原小学校
参加者数	24 名 (4 グループ × 約 6 名)
熟議の概要	<p>コミュニティ・スクールの協議が消化不良に終わらないために、資料の事前配布を徹底する。</p> <p>コミュニティ・スクールに期待することを集約したり、全体会、分科会、部会の役割、機能を明確にしたり、研修会を行ったりすることで、CS の在り方がはっきりする。</p> <p>学校が抱えている問題を率直に出し、問題を焦点化して、解決の方策をさぐる。</p> <p>評価のポイントになるものは、事前に十分示し、学校評価の充実に向けてさらに工夫する。</p> <p>会議の雰囲気を柔らかくし、開催曜日や開始時刻を見直すなどをするに ことよって、時間を確保し、話し合いを充実させる。</p> <p>CS 委員の人財としての活用をもっと図ったり、CS 委員会が地域に根付く ようにな活動を工夫する。</p> <p>CS 委員会の目指す学園の姿を共通のイメージで毎年確認したり、単年 度ごとの目標を掲げる。</p> <p>話し合いを活性化するために、課題ごとにワーキンググループをつくっ たり、ワールドカフェ方式を取り入れたりする。</p> <p>CS 委員会のホームページをもっと活用し、PR する。</p> <p>CS 委員の人選が適切か再検討したり、後継者を育成したりなど地域協 力者をふやしていく。また公募も取り入れてよい。</p>
熟議の様子	

【貝ノ瀬委員の所感】

教育における熟議は、市民一人ひとりが、教育の当事者として、より良い教育、より良い地域社会を創っていくために、「熟慮」と「対話」を重ねながら問題解決を図ることである。

それは、その諸課題について学習し、熟慮し、そして議論することをいう。

したがって、熟議は、その前提として議論する人間関係が人間としてフラットで対等であれば成り立たない。自分こそが全知を専有しているといった思い上がり人間同士では、正に「話にならない」。相手に学ぶものがあるという謙虚な意識や敬意を持って接することができる人こそが実りある成果を得る。

このプロセスを経て、当事者としての市民文化の醸成、そして真の人間的つながり、地域のつながりが形成されるのである。これは、民主主義、社会における市民社会・コミュニティ形成の重要なツールである。

教育においては、様々な場面での熟議が想定されるが、特にコミュニティ・スクールの学校運営協議会での熟議が有効である。

それは、学校側と委員との間、委員側と地域社会との間、学校側と地域社会との間等にある問題意識や認識のギャップを縮小することに、大いに役立つ手法である。

例えば、三鷹市の鷹南学園コミュニティ・スクール委員会での熟議である。これは、平成22年9月18日(土)の午後「鷹南学園の教育活動を活性化させるCS委員会の在り方は？」というテーマで実施された。

学校側も委員側もCS委員会で話し合いの時間が取れず、承認ばかりの会になってしまい、何んとかしたいという同じ思いで始められた。

4グループ編成で、1回休憩の2時間にわたって行われた。当初は、初めての熟議であり、参観者も多かったためか、緊張ぎみでぎこちなかったが、次第に慣れて活発な論議になった。ファシリテーターの役割も重要で、極力意見を引き出して、支援することに徹したかいもあり、予想以上に大変な盛り上がりのある会になった。

まとめの発表では、新奇なものは無かったが、学校側の情報提供の不十分さや資料の事前配布などを改善していこうなど当たり前ことがらが多かった。しかし、お互いにしっかり話し合い、確認し、共通理解を得ることができた満足感、達成感、参観者側にも十分伝わってくるものがあった。その日は、多忙な鈴木副大臣も駆けつけてきてくれ、激励をいただいたことも大きな励みとなり、次につなげることができたと思っている。

11月にも第2回が開催され、その後も継続的に熟議が行われているようで、頼もしい限りである。また、他の学園にも熟議が波及しつつあり、これからが楽しみである。

フェイス・トゥ・フェイスの熟議を基本にネット熟議を組み合わせ、問題解決を図るプロセスは、「強い学校、強い地域、強い市民」を醸成していくものと思う。

(鈴木副大臣講評の概要)

教育はスーパーマンがやるのではなく、皆さんが参加して取り組むものである。

提案、承認だけの会議が、日本全国で行われていて、これを何とかしたい。「熟議」はそういう発想で生まれた。


国や大企業の会議であっても、「大物」をたくさん集めて会議をするが、ほとんどがその人財を生かせていない状況がある。

分科会報告の中で、机や椅子、時間、雰囲気の話が出たが、会議を演出することは大切で検討すべきことである。もちろん、会議の目的を峻別することも大切である。

これからの日本は、長寿社会となり、100年先はだれもわからない。わからないことにどう対応するか、という力をつけることこそ重要であり、みんながジグソーパズルを持ち寄って、全体像を明らかにする。未来を予測するのではなく、一緒に創る、そういう思いで熟議に取り組んでいこう。

2-14 八王子教育熟議（様々な立場の参加者によるリアル熟議）

-1-

<p>主催 協力団体 後援 協力</p>	<p>公益社団法人長寿社会文化協会（独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業） 子ども支援アンアンネット、八王子・学生の子ども応援団 八王子市、八王子市教育委員会 文部科学省職員</p>
<p>テーマ・内容</p>	<p>市民による学校支援を広めよう（5回シリーズの第1回目） メインテーマ ～私たち市民は 何をやれるか?!～</p>
<p>日時</p>	<p>平成22年9月26日（土）10:00～12:30</p>
<p>場所</p>	<p>八王子市教育センター</p>
<p>参加者数</p>	<p>108名</p>
<p>熟議の概要 （主な意見）</p>	<p>子どもの育ちのために、<u>私、あるいは私たち市民ができる学校支援ボランティア</u>は何かについて、具体的実践策を練り、実践に結びつけるための熟議。 「実践しなけりゃ意味がない！」の考え方のもと、2か月間5回にわたり同じ卓に座って同じ卓テーマを実践レベルまで掘り下げることにした。</p> <p>初回は、日本や八王子市の現状や課題を報告する企画者からの基調講演のあと、ワールドカフェ方式で、少人数の卓に分かれてメインテーマについて自由に出しあい、優先度の高い項目を選んでもらった。その後、参加者の関心度の高い分野を10件選択して、2回目以降の卓テーマとした。</p> <p>参加者からは「ワールドカフェは初体験であったが、参加者一人ひとりが主体となって楽しく参画でき素晴らしい方式であることを実感した。（殆どの参加者が初体験であり絶賛している）」「現場で様々な活動がなされていることをリアルに知ることができ、この人脈をつないでいくことで更に良い活動ができる予感がしてワクワクした」「市民ができることがたくさんあることが分かった」「多世代や様々な異団体の参加があったので、いろいろな意見を聞いて視野が広がり有意義であった」など非常に好評であった。反面、その影響もあってか時間不足を述べる参加者も多かった。</p>
<p>熟議の様子</p>	

【企画運営を行った子ども支援アンアンネットの所感】

開催を決定してから本番まで1カ月足らず、チラシが完成してから3週間だったがチャレンジしてみた。やればできることが証明された。これからの世の中スピードアップは重要。呼びかけはチラシとクチコミで行なった。「チラシはPR、応募はクチコミ」と割り切った。市民に呼びかける場合、熱意が伝わるクチコミ応募による参加者が圧倒的に多くなる。短期間に老若男女様々な立場の12名の実行委員が準備した(2回目には17人に増えた)。委員の熱い思いやバリバリの企業マンによるしっかりした行程表の影響などもあってスムーズに準備できたことも成功のための大きな要因である。

10代~80代という多世代、及び教師、市民団体、企業マン、シニア、学生、医師、議員、行政、カウンセラーなど数十種類を超える異団体の人たちがフェイス to フェイスしたことで、異なった考え方を共有しあい、広い視野にたった様々な案が出てきたと思う。

アンケートによると、ワールドカフェによる熟議のスタイルが、可視化、楽しさなどの面で大変好評であった。市民一人ひとりからの政策を創りだしていくためにワールドカフェを使った熟議をどんどん広げていきたい。カフェについては時間不足を述べた意見が多かった。初めにワールドカフェ・エチケットを説明して、自分の団体紹介に時間を多く費やさないなどの注意点を確認することで、テーマに集中しやすくなる。



格差にあえぐ子どもたちや、課題を抱えて多忙でストレスもたまりやすい先生たちが元気になるよう、何かやりたいという市民は多勢居るし出来ることは沢山あることがわかった。

学校やコーディネーターが企画してこれをやって下さいと依頼するよりも、ボラ自身が企画から参画することでモチベーションと継続性がアップする。今回のような熟議は重要。

学校側の参加が極めて少なかった。毎日、様々な案内が来たりして忙しすぎるなどの現状は理解できるが、各教員に案内が届くことが必要。学校を手伝おうという市民たちは、何はともあれ学校が何を希望しているのか、ニーズを知りたいと思っている。

ファシリテーターは経験者がつとめ、原則数名で卓を囲む方法が良い。笑い、楽しみながら本音を語り、お互いの異なった考えを共有できるので、今後ともそのように進めていきたい。

様々な声の中から選んだ10(最後は12テーマに)の卓テーマは、小学校コーディネート、中学校コーディネート、放課後算数教室、中学生学習支援(主として生活困窮家庭)、大久保長安伝承、図書ボラ、教育漫画教室、寄り添い、虐待防止、育児ママ家庭訪問など。会場は今回のように広くてゆったり間隔で卓を置ける方が、熟議に集中しやすいので良い。

主催 協力団体 後援 協力	公益社団法人長寿社会文化協会（独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業） 子ども支援アンアンネット、八王子・学生の子ども応援団 八王子市、八王子市教育委員会 文部科学省職員
テーマ・内容	市民による学校支援を広めよう（5回シリーズの第2回目） メインテーマ ～私たち市民は 何をやれるか?!～ 基調講演：子どもも先生も市民もイキイキ 学校コミュニティー応援団
日時	平成22年10月9日（土）10:00～12:00
場所	八王子市教育センター
参加者数	56名
熟議の概要 （主な意見）	参加者は、1回目で選択した10種の卓テーマのうちの希望する卓に着き、ワークショップを行なった。 参加者からは「前回、ワールドカフェで慣れていたので今回はアイデアを出しやすかった」「学校応援団を設立することの意義がよくわかった」「学校コーディネーターの重要性がわかった」などの意見がだされた。各テーマ毎にも沢山のアイデアがだされた。
熟議の様子	 

【企画運営を行った子ども支援アンアンネットの所感】


市内でうまくいっている小学校応援団の設立と現状を伝える基調講演を聞いて課題共有した後の熟議になったことで熟議がとても深まった。

数人ずつで活発なアイデアの拡散が行なわれた。短時間しか熟議時間がない中で効果を上げるには4人構成がベターである。6人だと2人は頭の中で他のことを考えがち。

現在、学校支援を実践している人たちが集まっているので、いいアイデアが出やすかった。

現場で活動している人の声で主導されることはいい政策提案に結びつきやすい。

合計2時間のフォーラムは、いかにも時間不足。しかしこの後3, 4, 5回目で同一卓テーマで熟議できるので良い実践策が出来るであろうことを期待する。


主催 協力団体 後援 協力	公益社団法人長寿社会文化協会（独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業） 子ども支援アンアンネット、八王子・学生の子ども応援団 八王子市、八王子市教育委員会 文部科学省職員
テーマ・内容	市民による学校支援を広めよう（5回シリーズの第3回目） メインテーマ ～私たち市民は 何をやるか?!～ 基調講演：家庭訪問型支援ホームスタートの紹介
日時	平成22年10月23日（土）10:00～12:00
場所	八王子市教育センター
参加者数	45名
熟議の概要 （主な意見）	参加者は、原則、前回と同じテーマ卓に座ってワークショップを継続した。参加者からは「同じ思いの人たちとのつながりが広がって今回も楽しかった」「基調講演の、孤立して孤育てしているママ宅を市民がささえる支援に興味があるので今回その卓に移って熟議した。」などの意見が出された。
熟議の様子	 <p style="text-align: right;">ワールドショーチュー</p>

【企画運営を行った子ども支援アンアンネットの所感】

10に分けた卓テーマ毎に、数人ずつで活発なアイデアの拡散が行なわれた。短時間しか熟議時間がない中で効果を上げるには4人構成がやはりベターである。現在、学校支援を実践している人たちが集まっているので、いいアイデアが出やすかった。

現場で活動している人の声で主導されることはいい政策に結びつきやすい。合計2時間のフォーラムは、いかにも時間不足。しかしこの後3, 4, 5回目で同一卓テーマで熟議できるので良い実践策が出来るであろう。新しく参加した人がながながと自分が属している団体の話をして混乱したので、次回からワークショップのエチケットなどは毎回説明して再確認することとする。

今までの盛り上がりが高じて、焼酎を飲みながら小中校生を語るワールドショーチューを急遽開催。26名も集まって熱き思いを語り合った。ランチ懇親も毎回。楽しいが一番。



主催 協力団体 後援 協力	公益社団法人長寿社会文化協会（独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業） 子ども支援アンアンネット、八王子・学生の子ども応援団 八王子市、八王子市教育委員会 文部科学省職員
テーマ・内容	市民による学校支援を広めよう（5回シリーズの第4回目） メインテーマ ～私たち市民は 何をやれるか?!～ 基調講演：困っている子どもの現状とその対策（虐待予防）
日時	平成22年11月6日（土）10:00～12:00
場所	八王子市教育センター
参加者数	58名
熟議の概要 （主な意見）	参加者は前回と同じテーマ卓で、アイデアの収斂と発表準備を行なった。 参加者からは、「大人社会のひずみの縮図でもある虐待の現状を知り愕然とした。私たち市民ができることを出し合い実践することが大切」「実践策に優先順をつけるのが難しかった」「WSは楽しい」などの意見が出された。
熟議の様子	

【企画運営を行った子ども支援アンアンネットの所感】

各卓とも進行に慣れてきたが、日によって人の入れ替わりがあると、戸惑っている。
ワークショップが楽しいのでその分時間不足を訴えられた。今シリーズはやむを得ない。
4回目ともなると仲間意識ができて熟議が更に深まっている。対話のすばらしさを実感。
毎回は参加できない人が多く卓のメンバーが毎回変わったことはやりにくい原因だった。

当シリーズ 全体の成果 11/8 現在	各卓テーマについて、市内で実践するための熟議は、実践策を練りながら確実に進んでいる。参加者は地域の様々なことを知り人脈も増えたので今後の子どもの育ち応援に期待と夢を持てたことがうかがわれる。リアル熟議では一人ひとりが主体となって自治に取り組む姿勢が大いに養われることが実証された。 既に5つの卓テーマでは、今日までにプロジェクト会議を開催して実践策を固め始めた。中には、市民に対してボランティア参加を呼び掛け始めたテーマもある。 特徴とした 講座とワークショップの同時開催。 実践への結びつけ。 ワールドカフェの普及。 沢山の異団体との協働。 横断的応援隊創出については、幸いなことにいずれもクリアできそうである。リアル熟議のパワーをまたもや実感した。参加してくださった方々、運営してくれた17人の維新の志士たちに心から感謝したい。 一句「ひ孫らが 幸せ それとも不幸せ 未来を決める リアル熟議！」 おまけ「地域での 子ども支援は 超急務！」
次回最終回	11月20日（土）～笑いとユーモアで子育てを楽しく～ 人と人を結ぶ潤滑油である笑いとユーモアのコツを学び、子育てや団体運営を楽しもう。

2-15 教頭熟議（教頭によるリアル熟議）

主催	四日市市教育委員会 文部科学省
テーマ・内容	学校における教職員の資質能力の向上について ～授業力・子ども理解・地域、家庭との連携～
日時	平成22年10月2日（土）9:00～12:00
場所	四日市市総合会館 7階 第1研修室
参加者数	44名（約6名×7グループ）
熟議の概要 （主な意見）	<p>【テーマ1】子ども理解・生徒指導 管理職と職員が一丸となり、ミドルリーダーとなる教職員が若手教職員を育てていくようなOJTが重要。 日ごろから教職員同士が子どものことについて情報交換を密にする。一人で抱え込まずチームで対応していくことが大切。</p> <p>【テーマ2】授業力向上 教職員の年齢構成の二極化が進む中、ライフステージに応じた意識改革が必要。今後は、若手教師と経験豊富な教師が組み、若手を育成するような仕組みづくりが重要となる。 授業の相互参観を日常化し、授業のあり方を研究していく。 教師にゆとりが必要である。同僚と話し合う時間や教材研究の時間の確保。 30人以下学級の早期実現や複数担任制の導入、スクールカウンセラーの常駐など、制度の改善も必要である。</p> <p>【テーマ3】地域・保護者との連携 活動後の評価や教師が頑張っている姿を積極的に校外・地域へ発信していく。 うまく連携できている学校も多い。授業だけでなく、さまざまなボランティア活動の場を活用するなど工夫していく。</p>
熟議の様子	 

【主催団体・者の所感】

小・中学校の教頭が一堂に会し、同じテーマについて校種を交えて議論することは初の試みであったが、現場の現状・課題の交流や意見交換ができ、大変有意義なものとなった。



熟議経験者が全体のファシリテーター（進行役）を務め、進行がスムーズに行われた。前半はグループによる付箋を用いたワークショップ、後半はワールドカフェ方式を用いたワークショップで議論を行った。いずれも「意見の出しやすさ」と「議論の見える化」がメリットとなり、熟議が活性化した。

ワールドカフェ方式により自分のグループ以外からの意見をもらうことで、新たな視点が生まれ、後半の議論がさらに深まった。

グループ討議発表の際にファシリテーショングラフィックを用いたことで、全体の意見を総括することができた。

文部科学省職員や宮崎県五ヶ瀬町教育長日渡円さんから、最新の動向や管理職としての方向性を示唆するようなお話をいただいたことで、現場発の熟議内容を広い視点から見つめなおすことができた。

今回は初の試みであったため、議論内容については、やや概論に走る傾向があった。「現場の教頭だからできること・始められること」という視点に向かいにくかった感がある。現場発の教頭熟議という特性を活かし、今後もこのような会を継続して開催していけるとよい。

主催	青森県PTA連合会（担当：教育問題委員会）
テーマ・内容	熟議：学校支援と地域との連携について ～学校支援地域本部事業の現状と課題～
日時	平成22年10月7日（木）15:30～17:20
場所	青森市アラスカ会館
参加者数	29名（約14名×2グループ）県教育委員会、小中学校長会、県PTA連合会
熟議の概要	<p>県教育委員会、小中学校長会、PTA、三者による熟議は、取り組みとして新鮮に映ったようで、立場を超えて個人的な発言もあり、違う立場を理解しようという様子が見えた。</p> <p>先生にも温度差があり、多忙・無関心が障害。</p> <p>コーディネーターの確保とその資質向上への要望。</p> <p>継続的にコーディネーターへの報酬を確保する必要。</p> <p>地域との連携とともに、コミュニケーション不足を多くの人が感じている。</p> <p>PTAと学校支援ボランティアの違いや役割に戸惑い。</p> <p>地域・学校・家庭の連携については、学校と家庭はともかくとして、やはり地域とどれだけコミュニケーションを取れるかが課題。特効薬は“呑み込め”という結論も、そのもどかしさを現している。</p> <p>PTAが、子供の中学卒業・高校進学とともに、小中学校から離れるのではなく、今まで地域にお世話になったご恩返しに、町内会などの地域の活動へ関わっていくことが望ましく、その活動を通して学校を支援していくしくみが欲しい。</p> <p>小中学校を終えると、子供は次の高校へのステップへ。親もPTAを終えて、次のステップへ進むのが社会教育であり生涯教育。</p> <p>私がPTA会長をしている中学校は「おやじの会」入会が原則として永久会員であって、卒業をしても、学校行事の手伝い等に借り出される。また、PTAを卒業したら町内会活動へ参画しようという掛け声もかけている。</p>
熟議の様子	 

【主催団体・者の所感】

熟議の流れ

ファシリテーター：工藤健教育問題委員長と相場一宏副委員長

熟議五箇条

全員に事前配布・通知

- 一、人の話をよく聴く。
- 一、挨拶をする。
- 一、簡潔に分かりやすく伝える。(一回の発言で言いたいことは一つだけ。)
- 一、人を傷付けない。
- 一、共感や感想、考えの変化があったら表明する。

1) 趣旨説明・ルール

工藤委員長

- ・学校と地域の問題を未来志向型で考える。
- ・WSの方法と進め方について事前説明。
- ・WSを通して、互いの意見を尊重し、立場を通しての理解を進める。
- ・課題と解決策(必要性)の共有を計る。
- ・学校と保護者の区別はあるが、全ての人間は地域の人間である。

2) 前提の情報提供(県教育委員会) 現状と課題含む〔20分〕

3) 第1ステージ。学校支援と地域の連携、現状の問題はあるか。〔35分〕

- ・説明・簡単な自己紹介(ひと回り) 10分 拍手つき
発表者指名
- ・問題点、ポストイット(黄)へ書き出し 10分
- ・発言&ポストイット(一人一枚) 15分

4) 休憩 〔10分〕

5) 第2ステージ。問題点への提案と対策。 〔35分〕

- ・グループ分け・テーマ書き出し 5分
- ・提案・対策、ポストイット(赤)へ書き出し 5分
- ・発言&ポストイット(一人一枚) 15分
- ・まとめ、感想 10分

6) 発表。グループ×5分 〔10分〕

7) 講評

益川副会長

タイムスケジュール進行管理は、事務局が担当。

人数設定と時間は、やはり適正な人数・時間が望ましい。人数は一桁9人以内、時間は説明・休憩を含め3時間必要。

テーマについての事前レクチャーを入れたのがアイドリングタイムとして良かったが、


もう少しわかりやすい言葉に置き換えても良かった。どうしても硬い言葉が並ぶと構えてしまい、アイスブレイクに時間がかかる。

「熟議五箇条」は特に重要。教育者を前に「皆さんが普段子供たちや生徒にお話しているルールです」というと笑いが出るが、進むにつれて、熱くなるにつれて、いつの間にか守られなくなっていることが不思議。

ポストイットの貼り方、まとめのグループ分け・基準、グループのネーミング、それぞれに個性があって、楽しい。

2-17 神奈川県秦野市第1回「スポーツ熟議」

主催	エデュケーショナル・フューチャーセンター/NPO法人おおねスポーツコミュニティ/文部科学省
テーマ・内容	地域スポーツのこれから... コミュニティとして私たちができること
日時	平成22年10月10日(日) 14:00~17:00
場所	神奈川県秦野市立鶴巻公民館
参加者数	53名 スポーツ指導者、保護者、教員、大学生、中学生、小学生など 文部科学省職員4名
熟議の概要	<p>今回の熟議は、地域スポーツに関心のある指導者、保護者、教員、大学生、中学生、小学生など多種多様な関係者が集まりました。</p> <p>第1回スポーツ熟議を終えて、参加者それぞれの課題をお互いに共有し、解決方法を一緒に考えることができました。</p> <p>回数を重ねるごとに、人と人のネットワークも更に広がり、みんなでスポーツに関する多くのことを考える場として「熟議」への期待がふくらみます。</p> <p>14:00開会 オリエンテーション・グループづくり(15分)</p> <p>「熟議」に関する説明。</p> <p>誕生日や血液型で集ってみるなど、初対面の人たち同士でも和やかな雰囲気です。</p> <p>【休憩10分】</p> <p>第1部「私と地域とスポーツ、どんな問題がありますか?」(50分)</p> <p>まず、それぞれの立場で「私と地域とスポーツ、どんな問題がありますか?」をテーマに日ごろから感じていることを出し合いました。</p> <p>「遊び場がない」「活動場所がない」などのハード面、「指導者がいない」「一緒にやる人がいない」など人材面について課題が洗い出され、グループ内で共有しました。</p> <p>【休憩10分】</p> <p>第2部「私たちが何をすれば、その問題が解決、実現されますか?」(50分)</p> <p>次に、第1部で洗い出された課題について、「今すぐにできることはないだろうか?」とグループごとに知恵を絞って意見を出し合いました。</p> <p>「指導者がいない」ということに対して大学生から「指導をする場を求めている」ということや、「場所がない」ということに対して「一緒にできないか」などの解決策を共有しました。</p> <p>発表(各グループ3分)</p> <p>各グループで話し合った内容を、1グループ3分で発表を行い、全体で共有しました。他グループの発表を聞きながら、「なるほど!」「そうだよな!」と共感</p>

	<p>する姿が多く見られました。</p> <p>閉会・次回の確認（3分）</p> <p>今回の熟議で出てきたアイデアを「できることから始めてみましょう！」を合い言葉に、実際にできることからアクションを起こしてみることを確認して閉会しました。</p> <p>17:00開会</p>
<p>熟議の様子</p>	

【主催団体・者の所感】

「スポーツ」を切り口に実施された熟議であり、「教育」よりも敷居が低いのか多様な参加者に集まってもらえた。小学生や中学生なども熟議に参加し活発に意見交換をしていたのが印象的だった。


当日は体育の日ということもあり、地域での行事が多く（特にスポーツ大会等）そちらに参加しなかなければならない方も多かったが、敢えてこの日程にしたことで「地域におけるスポーツ」に関心を寄せている方が多く集まった。

「熟議とは何か?」「なぜ熟議が必要なのか?」という社会教育的な情報のインプットが少なかったため、次回は「対話集会」にならないようにコンセプトの部分積極的にインプットする時間を取りたい。

「問題/課題抽出」「解決策の立案、計画化」「実施した行動計画の振り返り」「熟議を通して学んだことを振り返る」という全4回の継続した熟議を計画している。リアル熟議そのものが目的になるのではなく、コミュニティ・ソリューションの手法としての熟議、結果として社会教育そのものに繋がる熟議を目指したい。

地域の「公民館」で実施された熟議だった。教員や教委関係者以外では「学校」を会場にした熟議はハードルが高い。公民館を積極的に「熟議の場」として開放されていくことを希望する。

2-18 コミュニティ・スクールの在り方を考える熟議

主催	文部科学省
テーマ・内容	より良いコミュニティ・スクールに向けて ～コミュニティ・スクールで目指すもの、これまでの成果、これからの課題～
日時	平成22年10月12日(火) 9:30～12:30
場所	学術総合センター(東京都千代田区)
参加者数	コミュニティ・スクールを設置している教育委員会の教育長等33名 (6～7名×5グループ)
熟議の概要	<p>【熟議において出された主な課題】</p> <p>学校課題の改善という観点から学校運営や人事に関する意見を述べて学校運営へ参画するという学校運営協議会の役割が十分果たされていない。 学校運営協議会の経費等を確保し、活動基盤を整備する必要がある。 社会総がかりの教育を進める観点から、企業や大学との連携、幼稚園から高等学校までの校種間連携を踏まえた学校運営協議会の在り方を検討する必要がある。 学校運営協議会の運営事務や、地域住民とのコミュニケーションなど、コミュニティ・スクールに係る業務等に対して、教員の負担感が生じている。</p> <p>【熟議において出された主な解決策】</p> <p>各委員が意見を自由に出し合いながら課題を共有化して活動を構築することができるよう、学校運営協議会で「熟議」を活用した議論を行う。 地域の理解を得て活動に要する経費等の拠出を依頼する。NPOなどとの連携を進める。 地域性にとられない学校運営協議会の取組、中学校区で1つの学校運営協議会の取組など多様な方法を検討する。 教員が地域住民と円滑にコミュニケーションし連携できるよう、コミュニケーション能力の育成、社会教育についての研修、成功例(効果的な事例)の普及啓発などを進める。</p>
熟議の様子	



【主催部署（初等中等教育局参事官）の所感】

実施決定から熟議開催までの準備期間が短期間であったにもかかわらず、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を設置している82市区町村教育委員会から、33名の教育長等が5つのグループに分かれて熟議を行い、学校運営協議会のこれまでの課題とその解決策などを活発に議論した。

グループに分かれて熟議を行う前に、「コミュニティ・スクールの取組を通じて、新しい公共型学校を考える。」と題して、鈴木寛 文部科学副大臣と金子郁容 慶應義塾大学SFC研究所所長・大学院教授による対談が行われたことで、より良いコミュニティ・スクールの在り方を考える上での認識や課題の共有化を図ることができ、スムーズに熟議をスタートさせることができた。

各グループでは、第1ラウンドで様々な課題の共有化を図る場とし、第2ラウンドで課題解決策を出し合って意見交換する場としたが、第1ラウンドの途中から建設的な解決策を含んだ意見を述べるなど、白熱した議論が交わされた。終了後のアンケートによれば、まだまだ時間が足りない、もっと議論がしたかった等、次回の熟議開催を期待する意見が寄せられていた。

学校と地域の連携を図り、学校運営をより効果的・効率的なものとするためのひとつの手段としてのコミュニティ・スクールの在り方を考える良い機会となった。

（「熟議」の実施概要詳細）http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/1298651.htm

(参考)

グループ熟議の結果概要 以下、5つのグループにおける熟議結果を整理統合した。

【課題1】学校運営協議会の実効性の向上

学校課題の改善という観点から学校運営や人事に関する意見を述べて学校運営へ参画するという学校運営協議会の役割が十分果たされていない。

解決案

- ・各委員が意見を自由に出し合いながら課題を共有化して活動を構築することができるよう、学校運営協議会で「熟議」を活用した議論を行う。
- ・学校運営協議会の議論を活性化するため、学識経験者などの協力を得る。
- ・学校運営協議会において人材育成を図るという観点から、委員の資質向上を図る。
- ・教育活動の充実に資するため、教員評価や学校評価との関連を図る。
- ・コミュニティ・スクールの成功例・失敗例を把握・分析し改善に生かす。
- ・校長のリーダーシップのもとで、委員の人材発掘を行う。地域の商工会や企業、大学などから若い世代の人材も依頼していく。

【課題2】活動基盤の整備

学校運営協議会の経費等を確保し、活動基盤を整備する必要がある。

解決案

- ・地域の理解を得て活動に要する経費等の拠出を依頼する。 NPOなどとの連携を進める。
- ・首長部局と連携し、市町村の総合計画にコミュニティ・スクールを位置付け、総合的な取組を推進する。
- ・コミュニティ・スクールの運営事務担当の教員の加配を措置する。市町村の独自予算によるコーディネーターを雇用する。

【課題3】より地域に根差した学校運営協議会の取組の推進

社会総がかりの教育を進める観点から、企業や大学との連携、幼稚園から高等学校までの校種間連携を踏まえた学校運営協議会の在り方を検討する必要がある。

解決案

- ・地域性にとらわれない学校運営協議会の取組、中学校区で1つの学校運営協議会の取組など多様な方法を検討する。
- ・「新しい公共」の観点から、学校と地域が連携した取組への学校予算の配当が可能となるようにする。
- ・「熟議」の活用などで関係者が参加することで、当事者意識を醸成し、地域住民に

コミュニティ・スクールの意義について理解啓発を図る必要がある。

【課題4】教員の負担感の軽減

学校運営協議会の運営事務や、地域住民とのコミュニケーションなど、コミュニティ・スクールに係る業務等に対して、教員の負担感が生じている。

解決案

- ・教員が地域住民と円滑にコミュニケーションし連携できるよう、コミュニケーション能力の育成、社会教育についての研修、成功例（効果的な事例）の普及啓発などを進める。
- ・コミュニティ・スクールに興味のある教員を公募する。
- ・学校運営協議会をコーディネートする人材と予算の確保、コーディネーターを担える人材の発掘、ボランティアを活用する。

（ コミュニティ・スクール導入期の多忙感はある。しかし、地域との役割分担ができてくると、負担軽減を図ることができた事例が多い。 ）

「新しい公共」型学校の在り方について

教育長アンケートから一部抜粋

地域の教育力を引き出し、学校の閉鎖性を打破する方向を探求したい。

学校・地域両方にとってメリットのある施策を検討していきたい。

学校を地域コミュニティの核とするために校長の意識改革が必須。

地域から支援を受けるだけでなく、学校が地域づくりに寄与し、貢献していく時期が来ている。「新しい公共」型学校のコンセプトは時機を得たもの。是非取り組みたい。

主催	文部科学省
テーマ・内容	高校教育改革、中高一貫教育（中等教育学校、併設型、連携型）
日時	平成 22 年 10 月 15 日（金）13:00～16:30
場所	国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟
参加者数	271 名（約 5～8 名×42 グループ）
熟議の概要	<p>< 高等学校教育改革 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 廃校跡地の利用 地域との調整、再編計画の検証 学科の在り方 ソフト面（教育課程等）の改善 定時制高校における入学生の多様化への対応 通信制高校における多様な生徒への対応 学力の保証・向上 新学習指導要領への対応 社会との連携によるキャリア教育の推進 広域通信制高校の現状と課題 <p>< 中高一貫教育（中等教育学校・併設型） ></p> <ul style="list-style-type: none"> 適性検査問題の内容について 抽選の在り方について 教育課程における中高の接続について 高校入試が無いなかでの目的意識の持続 中高一貫校に求められるものについて <p>< 中高一貫教育（連携型） ></p> <ul style="list-style-type: none"> 連携型中高の教職員の意識について 特色ある連携型中高一貫教育 簡便な入試、学力保証 連携高校の定員確保 連携型中高一貫校の魅力ある教育内容等

熟議の様子



【主催部署（初等中等教育局初等中等教育企画課）の所感】

協議会終了後のアンケート結果では、主に以下のような意見が見られた。

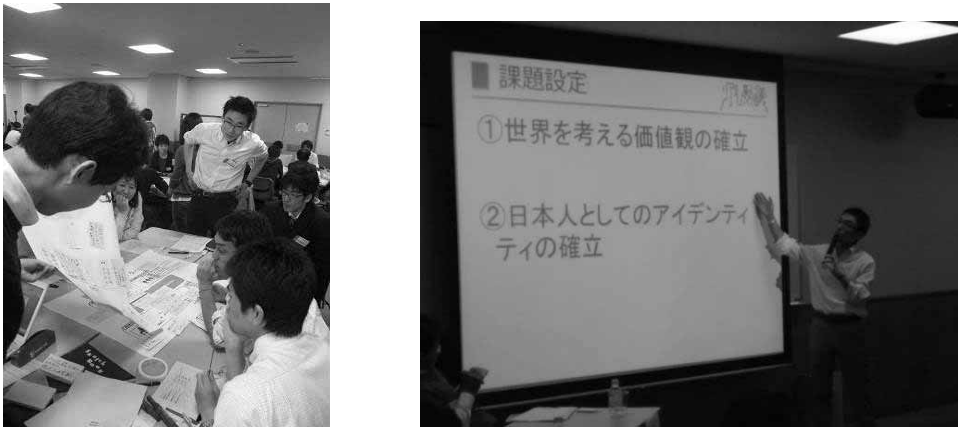
熟議のグループ編成について、都道府県教委、公立高校教員、私立学校担当者などが混在するグループもあったが、都道府県担当者、政令市担当者、公立高校教員、私立高校教員などある程度課題意識等に共通点のあるメンバーを集めたグループ編成に欲しかったとの意見が多く見られた。一方で、様々な立場の参加者からの意見を聞くことができよかったとの意見も見られた。

参加者の自由な議論を期待しテーマを広く設定していたが、グループの中には総花的な議論となり、問題点や課題の焦点を絞りきれず、さらに細分化したテーマで議論したかったとの意見も見られた。

熟議の時間を2時間とし、その後その結果を発表する会を1時間半として設定したが、もっと熟議の時間の方を長く設定した方がよいとの意見が多く見られた。

熟議について、問題解決の一手法として研修等において体験させてみたい、熟議の手法等について更に詳しく知りたい等の意見があった。

2-20 東大から切り拓くフロンティア人材の養成～リアル熟議 10.17～

主催	東大リアル熟議を実施する学生の会
テーマ・内容	世界を舞台に活躍できる人材をどう育成すればいいのか？
日時	平成 22 年 10 月 17 日（日）13:00～17:00
場所	東京大学本郷キャンパス 医学部教育研究棟 13 階 第 6 セミナー室
参加者数	97 名（約 10 名×10 グループ）
熟議の概要 （主な意見）	<p>人材の流動性を確保するため、教員の研究内容ではなく教育内容を評価すること、多様な人材を評価すること、ケーススタディなどのカリキュラムを充実させること、を大学に期待したい。</p> <p>日本の大学はリスクテイクを十分に育成できておらず、エントリーコストやリカバリーコストといったリスクに関するコストを減らすこと、リスクテイクを評価するシステムを構築することが社会に期待される。</p> <p>21 世紀のリベラルアーツの「知の広さと深さ」の具体的検討の必要性を解決するため、社会は理系と文系の区別の再考、ユニバーサル教育化の中でのトップレベル研究担保、社会科学分野での競争資金の導入を進めるべきである。また大学では、研究者教育と高度専門化教育の両方が大切である。</p> <p>大学では教養課程での教育の見直し、入試制度で求める素養を再考すべきであり、学びをするよりも、単位や点数を取ることが重視される進学振り分け制度の見直しをすべきである。また、若い間に海外に学生を派遣する制度を充実させる必要がある。</p>
熟議の様子	

【主催団体・者の所感】

「公共領域」「経済・産業領域」「学術領域」という 3 つの分科会に分かれたものの、発表では各領域において求められる人材像がそれほど異ならないことが明らかになり、テーマが広汎にすぎた感があった。「2013 年の東大の教育プログラムを策定しよう」などといった、もっと具体的解決策まで導くようなテーマ設定をすると良かったかもしれない。

ファシリテーターの方々と事前に打ち合わせをしっかりとし、意識共有をしていたため、当日の議論の進行が円滑になされていた。

熟議中、ゲストの方々が若干議論に参加しづらい雰囲気があった。

参加者に対するアンケートを分析すると、リアル熟議への参加について 66.1%が興味・関心を持っており、今後も継続的に熟議を開催する意義を示していると言える。また、Web における文部科学省政策創造エンジン「熟議×カケアイ」や政策コンテストに関わるパブリックコメントについても関心・興味が高まったことが分かり、リアル熟議と Web 熟議とが相互補完していく可能性が示されている。さらに、37.2%という参加者がリアル熟議の企画運営に興味・関心を持ったという事実は、今後の熟議の普及・浸透にとってかなり有意なものだと言えるのではないだろうか。

今後東大で開催する場合、今回のような一般的テーマではなく、個別の専門分野について深掘りをしていくことが求められる。すでに東大内部だけでも、医学部熟議、教員養成熟議、法曹熟議、就活熟議、駒場熟議などが開催される契機が芽生えており、学生の会としてもこのような動きを積極的にサポートしていきたい。



【城山委員の所感】

「東大から切り拓くフロンティア人材の養成～リアル熟議 10.17～」は、東大リアル熟議を実施する学生の会が主催者となり、東京大学及び東京大学の部局横断的機構である東京大学政策ビジョン研究センターが協力する形で平成 22 年 10 月 17 日に東大本郷キャンパスで行われた。このリアル熟議においては、3つの分科会、計 10 のグループ(A～C: 公共領域で活躍する人材の育成、D～G: 経済・産業領域で活躍する人材の育成、H～J: 学術領域で活躍する人材の育成)にわかれて熟議を行った。このリアル熟議の参加者は一般公募による高校生、大学生・大学院生、企業人などのほか、議論の多様性を確保するために東京大学側が確保した公務員、国際機関関係者、企業人、若手研究者、大学職員、大学教員など計約 100 人であり、各グループにおいて多様な属性の参加者が化学反応を起こすように気を遣った。また、議論のファシリテーターは、一定のファシリテーター経験を持つ若手教員、大学院生、若手公務員等によって担われた。

東京大学内において、理系と文系、学部生と大学院生と教員と職員が横断的にこれだけの規模で大学における教育の在り方を議論したことはなかったと思われる。その意味では、このリアル熟議の場は、多様な大学関係者が自らのあり方を語る場を可能にしたという意味において画期的であった。さらに、このような場に、外部の社会人や学生が参加することによって、より開放的な議論空間を確保することができた。リアル熟議は、政策提言の素材を生み出す場であるとともに、現場当事者の様々な連携の可能性を探る場であり、このリアル熟議はそのような現場連携を探る 1 つの契機となったといえる。

内容的には、若い段階での海外交流経験の重要性、個々の現場に立脚しつつも幅広い教養を持つことで自ら新たな課題設定のできる能力の重要性という指摘が様々な観点からみられた。また、興味深いことに、このような指摘は、公共領域での人材育成、経済・産業領域での人材養成、学術領域での人材養成のいずれの領域においても見られた。しばしば学術領域の人材養成というのは特異な領域のように見られるが、学術研究の基本である自ら課題を設定し、それを解いていく能力は、社会一般において要求される能力と共通であるというのは、当たり前ではあるが重要な確認であった。逆にいえば、大学が社会における新たな課題設定能力を持つ人材を育成するとともに、実際に課題を設定していく重要な場であることを再認識したといえる。

2-21 リアル熟議(生涯学習フォーラム・熟議 in 和歌山)

主催	文部科学省、国立大学法人和歌山大学
テーマ・内容	地域における大学の役割 ～大学に期待すること～
日時	平成 22 年 10 月 23 日 (土) 10:30～15:00
場所	ホテルグランヴィア和歌山 (和歌山市友田町 5-18)
参加者数	121 名 (約 8 名×15 グループ)
熟議の概要	<p>依然として、大学 - 地域間のネットワークが希薄であることにより、情報の共有が出来ていない。</p> <p>大学内部における生涯学習、地域貢献への意識、意志統一が図れていない。教職員及び学生の協働による意識付けが必要。</p> <p>大学 - 地域間を結ぶ窓口の集約化、明確化が必要。</p> <p>必修科目等により学生参加を促すシステムの充実化を図ることが必要。</p> <p>自治体、産業界、団体等が積極的に熟議の場を設けることが必要。</p>
熟議の様子	 

【主催部署 (生涯学習政策局政策課) の所感】

前日に開催された「全国国立大学生涯学習系センター研究協議会 (主催: 国立大学法人和歌山大学)」終了後に、引き続き実施したことから、当該協議会における議論を基礎とした「熟議」を行うことができ、大きなテーマの割には、個々に充実した議論をすることが出来たのではないかと感じた。



大学の教職員をはじめとして、大学生や高校生、和歌山県教育委員会の職員など、幅広い世代の方々が参加したことにより、様々な角度（職種、立場、目線）からの議論を行うことが出来たのではないかと感じた。

後日ファシリテーターの方々にグループでの議論について報告を求めたところ、拒否反応が少なからず見られた。当日の議論内容を、今後、各自の活動に生かすための方策について意識付けが必要であると感じられた。

その他参加者についても、当日の議論内容等を自らの現場に戻って還元する意識が低く、その場かぎりの議論になってしまいがちであると感じられた。

和歌山大学スタッフに模造紙・付箋等の必要性の認識が低く、当日は模造紙ではなく数枚の画用紙で対応することとなった。主催側にも熟議の細かい進行方法等について徹底する必要があると感じられた。（事前に、熟議をしているビデオを見ていただくなどしておけば良かったと思った。写真だけでは進行イメージが掴みにくいのだと感じた。）

2-22 UniFes 熟議 ～ダイガク、ガチトーク～

主催	札幌合同大学祭 (UniFes2010) 実行委員会
テーマ・内容	UniFes 熟議 ～ダイガク、ガチトーク～ 秋の大通公園で「大学における学びの意味」と「地域における大学・大学生の価値」を議論しよう
日時	平成 22 年 10 月 24 日 (日) 13:00 ~ 15:30
場所	札幌市中央区大通西 7 丁目 (大通公園内)
参加者数	26 名 (約 8 名 × 3 グループ) + 一般観覧 15 名程度
熟議の概要 (主な意見)	<p>大学の<入口>グループ テーマ 「高校の学びはどうあるべきか、大学はどのように選ぶべきか」 テーマ 「高大連携、面倒見の良い大学について」 テーマ 「100 年後の大学について」</p> <p>大学の<真ん中>グループ テーマ 「大学時代に熱心に取り組んだこと」 テーマ 「大学でしか学べない事はあるのか」 テーマ 「100 年後の大学」</p> <p>大学の<出口>グループ テーマ 「就活の思い出」 テーマ 「社会に出る前に大学で学んでおくべきこと」 テーマ 「100 年後の大学」</p>
熟議の様子	 

【主催団体・者の所感】

企画・会場・運営について

- ・ 「合同大学祭」というイベントの一部のコンテンツという側面があり、単独の熟議としてみるとやや物足りない企画だったと言える。ただし、ミスコンなどのコンテンツとともに硬軟のバランスを取るとい意味ではとても効果的だった。

- ・ 札幌の晩秋期の屋外開催ということで、気温等を考慮して 13 時開始 15 時 30 分終了とし、実質的な議論は 30 分間×3 テーマの 90 分に限定したため、必ずしも十分な議論ができたとは言えない。
- ・ 大通公園の芝生の上で車座になって議論するという企画は、結果的には良い効果が大幅に上回った。具体的には、良い効果として、テーマの重要性が高いほどシリアスな議論になりやすいが空間の開放感がそれを和らげる、異なる年代や社会的な立場にある初対面の参加者が打ち解けて議論に入りやすい、特に高校生や大学生が萎縮しないで議論に加わることができる、(今回はさほど上手くいかなかったが)一般の飛び込み観覧者が入ることでオープンな議論ができる。大通公園は札幌都心の象徴的な場所なので“ど真ん中で議論している感”が自然に出る、逆に、問題点・課題としては、周囲の騒音などで議論に集中できない。プロジェクタやホワイトボードなどの議論のためのファシリティが制約される。また、運営上は天候や気温などの不確定要素がリスク要因となる。また、そのこと(中止や会場変更の可能性)により一般参加への呼びかけが困難になっている面がある。
- ・ 上位イベントの札幌合同大学祭の理念のなかに、学生が主体的に活動することが唱われていた関係で、この熟議についても全体進行および各グループのファシリテーションと書記は学生が担当した。一般キャストについては、キャスト同士はほぼ初対面で議論の内容についても打ち合わせ無しであったが、ファシリテーターについては、事前にある程度の打ち合わせをしていたため、各グループの議論が大きく混乱したり、進まなくなったりはしなかった。
- ・ キャストの選定については、事前の打ち合わせ等がほとんどできないという制約を考慮し、特に議論が紛糾しないことを前提にして配慮した。結果的に各グループの議論は極めて建設的に進行したが、キャスト同士の立場の違いなどにやや気配りしすぎた感もある。

テーマの設定について

- ・ 慶応 SFC の熟議を参考に、大学の入口、真ん中、出口の 3 グループに分けたが、やや重複する議論があったように思われる。もう少しはっきりとテーマ設定を絞り込んでおいた方が良かったかもしれない。ただし、いずれのテーマの単独で議論するだけでは不十分なものなので、軸足を持ちつつ全体のビジョンを持っているキャストが居たことで議論自体は安定していた。
- ・ 企画段階で、3 部の構成について、第 1 部：キャストの立場や基本的なスタンスを相互に理解し、共有することを目的にして、あまり厳しめの議論に展開しない、第 2 部：高校生などにとっては参加困難な議論になったとしても、そこで交わされている議論の内容は彼らにとって有益だろうと考え、なるべく本質的な問題点に迫り、より深い議論を目指す。第 3 部：一朝一夕に解決することが難しい問題点などが列挙されることを想定し、短絡的な結論や、あまりに対処療法的な解決策が提案されることを敢えて避け、むしろやや非現実的なものを許容する超長期的視座に立った未来の大学の姿を語るために「100 年後の大学」をテーマにした。また、実際の議論はグループごとに進められたものの、このテーマを全グループ共通とすることで、全体の一体感を感じ

じていただくと同時に、同じテーマに対する各グループの異なる答えを比較する楽しさを感じていただくことをねらいとした。

議論の進め方について

- ・ 前述のように、各グループのファシリテーションは学生が担当したが、ある程度のスキルを期待できる学生を選定したことと、キャスト選定の配慮により、議論が制御不能になることは無かった。万が一のことを想定して、各グループに必要な場合はヘルプをしていただける大人をキャストとして配置してあったが、明示的にピンチヒッターをした場面は無かったようだ（発言等で間接的にサポートしていた）。
- ・ 論点の明確化とキャストの長時間発言の防止、また USTREAM 配信時の視覚的効果を考慮して、全キャストにスケッチブックとマーカーを持たせ一斉回答式を基本とした。このことにより緩慢な議論にならず、テンポアップに繋がった。また、ホワイトボードや模造紙、付せんなどを用いたファシリテーショングラフィックを物理的に導入できなかったデメリットの一部分を結果的にカバーした。

議論の内容について

- ・ 個別の議論は前述のまとめの通り。ファシリテーターを通じて、熟議開始時に「最後に結論や提言をまとめることはしない」とアナウンスしたこともあり、全体を通じて、大学の理想と現実、大学の内側と外側、大学の過去と未来がバランス良く話題になったように思われる。裏返せば、個別のテーマや問題点についての議論が不十分で、やや未消化に終わったと言うことになるかもしれない。
- ・ 札幌もしくは北海道という地域性がキーとなるような議論には進まなかった点は、企画者としてやや残念である。

（参考：企画担当学生のコメント 原文まま）全国初の青空熟議 UniFes リアル熟議を振り返って

今回、学生主体の当イベント「Sapporo UniFes 2010」にて、大学生がモノもお金も人脈もない状態から4ヶ月で開催に至ることができて、ひとつの奇跡を見たと思っています。そして、そのSapporo UniFes 2010のひとつにこのUniFes リアル熟議を実施できたのも、当イベント開催の根本のところにある思想の裏打ちのように思えて仕方がありません。


UniFes リアル熟議のテーマは「ダイガクの価値」。自分自身が大学生という立場に身を置きながら改めてダイガクの価値、社会における大学の役割などを考えていきたいと思ったことがこのテーマ設定の動機です。当日はテーマに付随する3つのキッカケを設定し、3グループで議論をしました。「入り口」 大学入試制度や高校生としての勉強と大学の学問との関わり。「真ん中」 部活、サークル、ゼミ、研究室、バイト、留学、旅行 etc たくさんの大学生活の形をどのように社会人は見ているのかに言及。「出口」 早まる就職活動、その裏にある大学生の想いや社会人の想いなどの共有。

そして、最後には3グループ共通のテーマである「100年後の大学の姿」ということで、大いに夢を語り合ってもらいました。みな、様々な大学の形を提案してくれましたが、

根底にあるものはみなオーバーラップしているものがあると感じました。それは、「多様性」。様々なポジションの人が、様々な形で関わって、そして新しいもの・新しい価値を生み出していく / 生み出しやすい社会が未来の社会であり、一種の大学の姿なんだろう、と。人間の価値観の幅が広がることで多様なものの在り方が認められる、そんな社会こそがイコール大学なのではないか？ということです。いろんなことがすべて「学び」につながる。大学＝大きく学ぶ、そのコトバ通りあらゆるものからあらゆる学び・気づきを得て次の学びにつなげるような生き方が主流となるのではないかと思います。

最後に、今回の Sapporo UniFes 2010 は札幌圏の様々な大学の学生、様々な学年、様々なバックグラウンドをもった若者たちが創りだした奇跡です。今回僕たちが得た姿もまた、ひとつの「大学生の在り方」なんだと思います。

2-23 国立教育政策研究所における熟議

主催	国立教育政策研究所教育課程研究センター・生徒指導研究センター
テーマ・内容	日米の教育比較～米国の教育制度から日本は何を学べるか～
日時	平成 22 年 10 月 25 日 (月) 10:30～12:00
場所	文部科学省講堂 (東館 3 階)
参加者数	約 60 名
熟議の概要 (主な意見)	<p>日米の教育制度の違いについて</p> <p>NCLB法に代表される米国の近年の教育改革について(アカウンタビリティの重視や教育成果を厳格に求める仕組みをどう考えるか)</p> <p>米国の教育政策は日本の教育政策を考える上でどこまで参考になるか</p>
熟議の様子	

【主催団体・者の所感】

教育課程研究センター・生徒指導研究センターではほぼ2週間に1回連絡会を開催されているが事務的な報告に終始することが多く、職員間の情報交換の場としては必ずしも機能しているとは言えない状況にあった。

そこで、後日両センターの職員向けに開催される全米最優秀教員の講演に備え、予習的に問題意識を高め合い共有するとともに、より実質的な職員間の情報交換を実施する場として、試験的にリアル熟議を開催した。

冒頭に、オバマ政権下における初等中等教育の動向について調査企画課岸本調査官の基調講演を聞いた後に、8グループに分かれ、30分程度の熟議を行い、最後には各グループの代表者が結果を発表した。


ほとんどの参加者にとってリアル熟議は初体験であったが、各グループとも開始して間もなく活発な意見交換が始まった。時間が限られていたことで、却って効率的に議論を展開し、まとめようという意識が参加者の間で共有されていたのかもしれない。最後の発表を聞いていると、課題によっては議論が深まらないものもあったが、多くの話題に対して突っ込んだ問題意識や意見が出され、それらをまとめて参加者間で共有する段階にまで達していた。

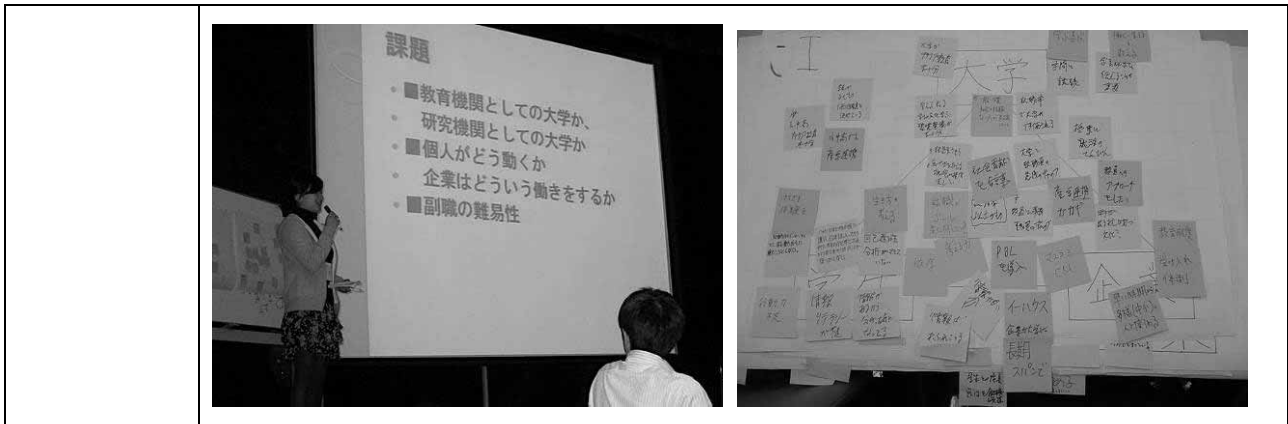
また、議論の過程で自身の海外体験を披露する場面もあり、意外な職員が米国の事情に詳しいことがわかるなど、普段の連絡会からはわからない発見もあった。ほとんどの職

員にとって初のリアル熟議は貴重な経験になったことは間違いない。

今後各センターが主催する教委職員や学校教員向けの研究事業を実施する中でリアル熟議を取り入れることにより、より多様なアイデア、問題意識を踏まえた上で研究を深化させるとともに、研究成果をより効果的に普及・共有させることも期待できると感じられた。

2-24 リアル熟議@慶應義塾大学芝共立キャンパス

運営団体	主催：学生団体 STUNITY（スタニティー） 共催：文部科学省、NPO 教育支援協会 協力：慶應義塾大学薬学部
テーマ・内容	今、就職活動のあり方を問い直す～ここから私たちが変わる、変えていく～
日時	平成 22 年 10 月 31 日（土）13:00～17:00
場所	慶應義塾大学芝共立キャンパス 2号館 406号室
参加者数	84名（8～9名×10グループ） 傍聴者 約30人
熟議の概要 （主な意見）	<p>学生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就活サイトをうのみにしすぎない。 ・自分から情報を獲得しに行く。人と出会う機会を作る。 <p>大学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先輩と話す機会の制度化。 ・主体性を育むためのサポート体制。ポイント制と単位制の併用。少人数コミュニケーションの必要性。 ・大学からのラインナップの提示。学生は自分のキャリアプランに対して、大学側が提示しているものから選択する。 ・インターンを活発化させる（単位を認めるなど）。 <p>企業、社会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・損得なしに企業・社会人が学生と直接触れあう機会を増やし学生を社会として育てる。採用とは関係なく学生を育てることを目的とした真インターンシップを始動すべき。 ・採用タイミング多様化。正規雇用の流動化を目指す。 <p>人材の出入りしやすい組織へ</p> <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生、大学、企業の三者が同時に変わる必要がある。 ・雇用の流動性 ・辞め易く、戻りやすい雇用形態。 (例)産休・育児休暇等からの職場復帰。 ・就職情報サイトの「年度別」は適正だろうか。
熟議の様子	



【主催団体・者の所感】

準備

- ・今夏、菅直人総理が新卒者の雇用に関する新戦略を発表し、大手商社6社が新卒者の採用時期見直しを経団連に呼び掛けるなど、就職活動のあり方に変化の兆しが見られる中、「今、就職活動のあり方を問い直す」というテーマで、現場の当事者が集いリアル熟議を行うことには大きな意義があった。
- ・テーマ設定
「今、就職活動のあり方を問い直す～ここから私たちが変わる、変えていく～」というテーマには、今日私たちが直面している就職活動という問題について、学生だけでなく、企業・大学・行政関係者たちが集い、熟議する場を設定することで、参加者一人ひとりが意識を新たにし、自分の周りや社会を変えていくという意識を持つことができるようにとの願いを込めてある。
- ・ファシリテーター養成ミニ熟議
団体メンバーからファシリテーターを出すため、頻繁にファシリテーションの練習としてミニ熟議を行った。その際、学生だけで話し合うのではなく、ゲストの方々にもご協力いただき、議論がどのように広がる可能性があるのか確認した。

広報

- ・告知が遅れてしまい、大学関係者の応募が不足。また企業の人事担当者は、公的な参加と考えてしまう傾向があり、“一市民としての参加”をなかなか理解していただけなかった。
今後開催予定のテーマに関して、重要な役割を担う立場からご協力して下さる方々とのネットワーク(メーリングリスト等)があるとよい。このようなつながりから更に広く、多様な熟議参加者を募れるような正の連鎖を起こしたい。
- ・ツイッターの活用
ツイッターでも「jukugi_project」というSTUNITY専用のアカウントを作成し、告知を行った。会議の様子をツイートしたり、ホームページとのリンクを貼るなどし、ツイッター利用者が当団体の熟議プロジェクトに気軽にアクセスできるよう配慮した。ツイッターリンクからの応募者も複数おり、一定の広報効果があったものと見られる。
- ・メディアとの協力
「新しい公共」を考えるラジオ番組の中で「大学生が取り組む熟議とは」というテーマ

で出演した。また、某全国紙の教育面にも掲載された。こうしたメディアとの協力も「熟議」や「学生団体 STUNITY」の動きを広く世間に広めることにつながったと思われる。

当日の運営

- ・会場設備
ステージにプロジェクターがあり、タイムラインやツイッタ を常時スクリーンに映し出すことができた。ホワイトボードも各班に1台ずつ用意することができた。
- ・参加者の半数を学生に設定していたが、当日無断欠席が多かった。参加者の遅刻や無断欠席への対策が不十分だったため対応が遅れた。遅刻・欠席は、台風の接近が予報されていたことも一因であると思われるが、予期せぬ事態にも柔軟に対応できるよう準備が必要だった。
- ・ワークシートとして、大学・学生・企業を主なプレーヤーとして三角形で図示した模造紙を各班に用意した。班ごとの熟議では、一人ひとりが「就職活動」の問題点をポストイットに書き込み、ワークシートのどの部分に該当するかを考えながら貼り付けていった。このことにより、テーマに関わる問題点を視覚的に参加者全員が理解することができたと見られる。
- ・各班からの発表の可視化
各班で、ログ係が班員の名前・問題点・解決策（提言）を簡潔にまとめたパワーポイントを作成した。班ごとに沢山のポストイットを貼った模造紙と共に各班代表者がステージで発表。
- ・ゲスト席の変化
熟議前のゲスト紹介時は、ゲストには壇上に並んで座って頂いたが、熟議後の講評時には、参加者と同じフロアにゲスト席を設けた。ゲストを含め、すべての参加者が熟議を通して対等な一市民として課題に取り組んだということ視覚的にアピールした。
- ・事後アンケートの内容はもう少し簡潔なものに修正する余地があった。多くとも両面印刷1枚程度で記述形式の問が少ない方が回答者の負担を減らせたのではないだろうか。
- ・Ustream 配信
会場のインターネット回線と用意していた機材の接続がうまくいかなかった。事前にリハーサルして見る必要がある。
- ・4時間にわたる熟議のあと、参加者から「のどが渴いた」という声があった。会場近くに自動販売機もなかったため、開催側で適宜飲み物を準備することも必要だったと考えられる。

事後の対応や成果、効果

- ・参加者のメーリングリストを作成し、今回のリアル熟議のログやまとめを共有するとともに、今後のリアル熟議の告知等にも活用していきたい。

その他

- ・団体初の開催ということもあったが、準備段階からあまり時間の余裕がなかった。

2-25 学生主催のリアル熟議について <小林委員>

【小林委員の所感】

熟議懇談会委員として、また高等教育の専門誌の編集長として、高等教育をテーマにした3つのリアル熟議にゲストとして参加しました。

日時	テーマ	開催地	主催
7月24日(土)	大学は、もういらない？ ～私たちと大学はいかにあるべきか～	慶應大学 日吉キャンパス	リアル熟議を実施する学生の会
10月17日(日)	東大から切り拓くフロンティア人材の養成～ リアル熟議 10.17～	東京大学 本郷キャンパス	東大リアル熟議を実施する学生の会
10月31日(日)	今、就職活動のあり方を 問い直す～ここから私 たちが変わる、変えていく～	慶應義塾大学 芝共立キャンパス	NPO 教育支援協会、 学生団体 STUNITY

リアル熟議にかかわって、最も強く感じたのは、主催者である大学生たちの頑張りです。テーマを設定し、関係者を回り意見を吸収し、参加者に共有するデータ収集や資料作成を行う。参加者を募集するとともに、応募者多数の場合は抽選・連絡、お揃いのTシャツやポロシャツの準備、ファシリテーターの研修を受け、そして当日の設営と運営。当日は徹夜続きで、目の周りに“くま”を作りながらも、高い志のもとで、この場から新しい「何か」を生み出そうという熱意が伝わってきました。慶應で開催された2回のリアル熟議では、私も主催者側の学生と相談しながら、テーマを検討したり、当日共有するデータや資料について提供しました。

いずれの会も応募者多数になり、参加者は抽選になったとのこと。当日は、70名から100名の参加者による熱い議論が交わされ、あっという間に時間が経過していきました。参加者も、大学関係者、企業人、学生、省庁関係者と比較的バランスのとれた構成だったと思います。全体の進行やファシリテーションも、事前の準備が奏功し、多様な立場の参加者がいる中で、苦労しながらも、滞りなく進んでいたと思います。

議論の進行については、大概社会人が「私たちのころの大学は…」という形で口火を切りますが、議論が進むうちに現役の学生からリアルな現状が紹介され、自分たちが学んでいた時代との違いを認識するという流れが、多くのグループでみられました。この「自分たちの時代の経験値」から抜け出し、議論の共通認識(同じ土俵)を形成するプロセスに、一定の時間がかかっていたようです。この共有の過程こそが大切だというご意見もあるとは思いますが、しかし、限られた時間の中での進行を考えると、熟議の最初に紹介するデータや資料について、何を準備し、どのような形で共有するかについては、議論のベース揃えという意味から見て、改善の余地があるように感じました。

進行という点においては、参加者全員を同じテーマで議論させるのか、いくつかのテーマに分けた方がよいのか、というのも検討の余地があるように思います。7月24日と10月17日のリアル熟議では、いずれも10程度のグループを3つのテーマに分け、一方10月31日は10グループが同じテーマで熟議を行いました。それぞれ、一長一短があるとは思いますが、しかし、時間の制約を踏まえると、同一テーマで議論した方が、他のグループの発表内容について、自分のグループと比較して聞くことができるのではないかと感じました。また、そもそも、熟議後の双方向コミュニケーションや、議論の背景を共有するため、各グループ発表後には質疑応答の時間を何とか捻出すべきだとも感じました。

そして、最も課題だと思う点は、終了後のフォローをどのように行うかだと思います。せっかく教育に興味・関心の高い関係者が集い、さまざまな立場から熱い議論を繰り広げたとしても、これがどのように政策形成に役立てられるのか、参加者は納得して帰路についたのでしょうか。1つの成果としては、個々人が教育現場で課題に感じているテーマについて、共有できたり、刺激を受けたり、新しい視点を得られたり、翌日から新たに気持ちでそれぞれの教育現場をより良くしていこうというドライバーになった、というのがあると思います。実際、webを検索すると、リアル熟議に参加して、思いを新たにしたり、ブログやつぶやきを数多く目にしました。しかし、熟議が「問題に関わる多くの当事者が集まり学習・議論することによって政策を形成していくもの」なのであれば、言いっぱなしや個人レベルの改善で終わりになってはいけません。熟議の結果が政策にどう生かされたのかについて、参加者にどのようにフィードバックしていくのか、もう一歩突っ込んだ検討が必要だと思います。

今回、私はわずか3つのリアル熟議に参加しただけですが、総勢300人近くの参加者の課題認識や熱い議論、そしてそこから生まれた様々な意見を聞くことができました。確かに多くの民意を反映して政策という形になるには、時間がかかるかもしれませんが、しかし、熟議の面白いところは、前向きに、そして主体的に未来を創っていくプロセスに参加できることです。日本各地におけるこのような熟議の広がりは、教育現場から日本の教育を変えていくための大きな原動力になるのではないかと改めて感じました。

日本の熟議は、第一段階としてやっと「孵化」したところだと思います。まだまだ、日本中に浸透するまでには至っていません。これからは、第二段階として熟議をさらに浸透させ、政策形成のプロセスにどのように生かしていくのか、本格的に問われてくるのだと思います。そのために、この報告書を生かしていただければ幸いです。

【日渡委員の所感】

1 同職種によるリアル熟議

各地で開催されたリアル熟議は、教育に関心を持ついろいろな人が参加し熱心に議論を行い、市民目線や世論という点では一定の価値観を反映するものであった。しかし、リアル熟議当日初めて顔をあわせ意見を交わすことに対して次のような危惧を持った。

誰もが遠慮し意見が平均化されるのではないか。

いろいろな価値観を持つ人が多く集まるが、最終的には全体をリードする意見に終始左右されるのではないか。

学校の性格を表すことであるが、学校職員が参加しても外部の評価に弱く、学校の主張ができないのではないか。

以上、3点の危惧から、フリーな市民によるリアル熟議の向こう側にある議論として、学校で働く教職員だけの熟議では、日頃なかなか声として出てこない教職員の本音を聞き出せるのではないかと予想した。日頃から問題意識を持つ教職員によるリアル熟議。さらに、教職員の職種を問わずフリーにリアル熟議を行うと、前述のような問題が教職員内で行われるので、教職員の内でも同職種によるリアル熟議を行い。開催職数を多くし全体を見ることによって、相対としてはリアル熟議になるのではないかという想定し、同職種によるリアル熟議を開催した。

同職種によるリアル熟議の対象職種を、校長、教頭、養護教諭、事務職員とし、教職員ではないが保護者だけによる熟議も計画した。今回の報告までに開催できたのは教頭、事務職員、保護者である。

事例1 保護者によるリアル熟議 島根県津和野町

平成22年7月18日

「これからの津和野町における教育」

～みんなで語ろう子育て！教育！町づくり！～

乳幼児から小学生、中学生、高校生までの教育の在り方について意見が出されたが、改めて議論する機会の少なかったところに、熟議を持ち込めた意味は大きい。今後はより発展しながら、地域住民が教育について話し合う土壌ができた。

事例2 事務職員によるリアル熟議 愛知県豊橋市

平成22年8月8日

「小中学校をよりよくするために」

～事務職員からの提言～

学校や教育の在り方について、教師ではなく学校の管理運営を担う事務職員が議論したことの意味は大きい。これからの学校を考える上で、組織の在り方や、マネジメントはどうしても避けられない部分であるし、重要な部分である。

事務職員が自ら学校や教育の在り方をテーマに熟議することによって、今後の学校の在り方に一つの示唆を与えた。

事例3 教頭によるリアル熟議 三重県四日市市立小中学校教頭
平成22年10月2日

「学校における教職員の資質能力の向上について」

「子ども理解」、「授業力」、「地域・保護者との連携」の3つのテーマに分かれて議論した。教頭という学校運営の要の職員による熟議であり、本音を引き出すことができれば、学校が抱えている問題の本質に迫ることができること期待された。

2 まとめ

一般的なリアル熟議によって危惧されたことは、誰もが遠慮し意見が平均化されるのではないか、いろいろな価値観を持つ人が多く集まるが、最終的には全体をリードする意見に終始左右されるのではないか、学校の性格を表すことであるが、学校職員が参加しても外部の評価に弱く、学校の主張ができないのではないか。等であり、同職種によるリアル熟議によって予想される効果は、議論の深まり、議論の焦点化による実効性、本音が出る等であった。

結論からいうと、リアル熟議ということである程度構えた議論となってしまう、本音を引き出すことができずに、議論の深まりや焦点化の程度が期待を下回るものであったことは否めない。しかし、学校で普段に行われていること、思っていることを再認識することや、当たり前のこととして、議論する意味さえ見いだせなかったことを改めて議論することによって、学校文化の見直しにつながる緒に就いたと言える。

今後は、学校現場で日常的に教職員が小さなリアル熟議から始めて、組織としての意思形成や意思決定をリアル熟議で進める雰囲気を作ることが重要ではないか。

一貫して管理的な色彩が強かった学校の管理運営は、学校のマンパワーを集中させることによって学校組織を効率的に動かす事ができた。これからの学校は学校を構成する一人一人のマンパワーを引き出すことによって、学校組織を効率的に動かし、組織力を高めるものと思われる。リアル熟議は学校の組織観を変える大きな材料となり得るのではないか。

3 その他

3-1 プレ熟議

「プレ熟議」実施までの経緯

「熟議」プロジェクトは、立ち上げ期より多くの民間ボランティアスタッフが関わりながらスタートした、画期的な取り組みでした。私たち民間ボランティアスタッフは、この「熟議カケアイ」をひろく市民にアクセスされる仕組みとして始動する上で、すくなくともふたつの課題を克服せねばならないと想定しておりました。

A：内容面：違う背景に立脚する市民同士が、教育に対して建設的な議論を交わすことができるのだろうか？

B：形式面：インターネット上で議論を交わすことができるのだろうか？

教員・学生・行政など教育に関わるマルチステイクホルダー間での議論を、しかもインターネット上で実施しようとする以上、上記の課題は「熟議カケアイ」始動において避けられない課題です。

そこで私たち民間ボランティアスタッフは上記2点の課題に備えるため、インターネット上の「熟議カケアイ」サイトを本格始動する前に、まずは「特定のコミュニティを選出して」「ネット・リアルを交差した」熟議の場づくりにトライしてみることに決めました。私たち民間ボランティアスタッフは、このチャレンジを「プレ熟議」と呼び、平成21年10月より約半年間にわたり2つの教育現場に寄り添ってまいりました。

実施した2つのトライアル概要

1：ネット上での「プレ熟議」(全国：NPO法人教育支援協会)

全国にネットワークを持つNPO法人教育支援協会にお声掛け頂いた教育関係の有志の方々に「試作版：熟議カケアイ」に参加してもらい、7点のテーマに沿った各掲示板で、インターネット上で2ヶ月間にわたり議論していただきました。

2：「プレ熟議」リアルキックオフ(横浜：大口・白幡小学校区)

神奈川県横浜市の大口小学校・白幡小学校区の教育に関わる40人(教員・PTA・地域住民・ボランティア)に集まっていただき、「校区における全国学力調査のあり方」をテーマに対面でディスカッションをした後で、インターネット上(横浜市公式の地域SNSハマっち)で2ヶ月間議論を続けてもらいました。

参加者の方々の反応等

1：ネット上での「プレ熟議」(全国：NPO法人教育支援協会)

・7つのテーマで議論を進めたのですが、テーマによって盛り上がりには差が生まれてしまい、全体をうまくファシリテートすることは非常に難しいと感じられました。

2 : 「プレ熟議」リアルキックオフ (横浜 : 大口・白幡小学校区)

- ・ 対面の議論は盛り上がりはしたものの、その後ネット上の議論に引き続き関わってくださる方は四分の一以下にとどまり、ネット上の議論を活性化させることはできませんでした。
- ・ 教員や PTA の多くの方は個人の E メールアドレスを持っておらず、そもそもインターネットでの議論に参加することが難しい方が約半数を占めておりました。
- ・ メール環境をお持ちの方でも、横浜市公式地域 SNS ハマっちに参加登録することに対して抵抗感があったようです。インターネット環境で議論することにネガティブなイメージが染み付いている方が多いように感じられました。
- ・ 行政 (文部科学省) を中心とした公共の試みに対する根強い距離の遠さを感じられました。当事者意識を引き出すことの難しさを実感しました。

「プレ熟議」結果からの分析手法

まずはネット上に書き込まれたコメント全てを、議論上どのようなはたらきを示しているか、9つの類型に分類いたしました。その分布をマッピングし、ネット上でコミュニティがどのように推移していったのかを可視化するところからスタートしました。

その一次データを元に、どのようなコミュニケーションがネット上での熟議に寄与したのかを考察していきました。

「プレ熟議」を通しての考察

1 : デジタルデバイド

首都圏ですら、インターネットに慣れ親しんでいる層 / 抵抗感がある層、その差はきわめて大きいことが強く実感されました。特に教育における重要な存在である「教員・PTA」層の、インターネット接触頻度を把握した上でないと、「熟議カケアイ」は市民にひろくアクセスされる公共サービスにはなりえません。

だからこそ当面の課題として「熟議カケアイ」は、対面の熟議との両輪で進行していくことが不可欠と断言できます。

2 : 公共に関与することに対する抵抗感

「プレ熟議」に関して実感されたのは、公共と日常の断絶でした。メッセージを投げかけても応答を得られないコミュニケーションの数々に、私たち民間ボランティアスタッフは、何度も、くじけそうになりました。当然のことかもしれませんが多くの市民にとって日常の生活空間が関心事の中心であり、ひろく公共について議論することは、どこか縁遠い世界の出来事と感じられているのかもしれない。

しかし対面/ネット上で議論を重ねていく上で、日常は公共とつながっているのだという感覚が、一部参加者の中に共有されていくプロセスは、この「プレ熟議」の醍醐味でした。公共をみんなでシェアしていくために対話・熟議という方法論は決して間違っていない、という確信を得ることができたのもこの「プレ熟議」の成果です。

「プレ熟議」から「熟議カケアイ」本格始動に向けて

市民が相互に意見を交わしあう対話の経験は、社会に圧倒的に不足しています。対話のための情報共有・議論スキル向上・IT環境普及など課題は多いこともその要因かもしれません。

しかし「プレ熟議」トライアルが導き出した暫定的な結論は、まずはその機会を数多く生み出すことの重要性です。機会が社会を成長させることを信じるからこそ、私たち民間ボランティアスタッフは「熟議」が全国へ広がっていくことを、強く支持します。

3-2 熟議・ファシリテーション研究会

3-2-1 趣旨

平成 22 年 4 月より熟議の取組が開始され、教育現場に関わる当事者による熟議に基づく教育政策形成の在り方について大きな可能性が見出されるとともに課題等も見えてきたところ。

熟議の理念、目指すもの等について改めて生涯学習政策局職員等と共有し、今後の更なる取組の推進が求められる。

「ネット熟議」・「リアル熟議」双方において課題となるファシリテーションについても研究・実践が重要となっている。

わが国の成長戦略(新しい公共関係)に「現場対話とインターネット活用等による「熟議」を通じた政策形成メカニズムの導入」が盛り込まれたことに伴い、熟議について、他省庁職員等と共有していくことも求められる。

国の政策形成における、本格的な熟議の政策形成の取り組みは海外含め前例は無く、先行して実施する本省において、積極的な研究・実践が求められる。

3-2-2 目的

熟議の政策形成、新しい公共に支えられた社会像を共有する

熟議ファシリテーターに必要な知識・スキルを考える

熟議ファシリテーター知識・スキルを身に付ける

府省横断で全国熟議展開をするネットワークのキックオフ

3-2-3 実施内容

鈴木副大臣が構想十五年のビジョン「熟議民主主義、コミュニティソリューションによる 21 世紀の社会像」を自ら語る

チームビルディング・ファシリテーターとして、10 年以上にわたって教育現場やスポーツチームで活躍する長尾彰氏によるファシリテーション講習

熟議の社会、そして熟議ファシリテーションを「熟議」実践を通して考える

3-2-4 開催概要

日 時：平成 22 年 7 月 18 日（日）10：00～17：30

場 所：文部科学省東館講堂（3 階）

講 師：

1. 文部科学副大臣 鈴木 寛 氏
2. 「文科省政策創造エンジン 熟議カケアイ」民間ファシリテーター 長尾 彰 氏

参加者：

- 熟議に基づく教育政策の在り方に関する懇談会委員等
- 文部科学省職員
- 文部科学省共催のリアル熟議企画者
- その他関係者

3-2-5 プログラム・タイムテーブル：

鈴木副大臣 講演 熟議デモクラシーとコミュニティ・ソリューション

1. なぜ熟議か（その政治哲学・公共哲学）
2. 日本の熟議の歴史（熟議前史、熟議本史）
3. コミュニティ・ソリューションの事例
4. 熟議の実践とモデル
5. これからの教育現場・政策現場が担う役割

長尾氏 講演 ファシリテーションについて

熟議ファシリテーション基礎講座【入門編】

熟議ファシリテーション基礎講座【応用編】

観察技術編

介入技術編

1. これまでの取組の評価

【ネット熟議・リアル熟議 共通】

リアル熟議、ネット熟議双方に教育現場の当事者が積極的に参加し、政務三役や国・行政に対する「文句」ではなく、真摯な議論が重ねられた。熟議の教育現場実現、文化醸成の芽は確実に出てきている。

教育現場の当事者による、実践に根ざした議論の中で、課題意識の全体像や濃淡が浮かび上がり、また多くの示唆が得られる提案も多数存在し、教育政策の洗練につながっている。

「若手教員や子育て中の保護者等当事者の声を広く吸い上げることが難しい」、「国民にとって自らの意見が政策に反映されているという実感が乏しい」といった文部科学省の課題に対して、補完的な役割も着実に果たしつつあり、教育政策・課題に関する国民の関心・理解も高まりつつあるところ。

熟議のプロセスや結果が審議会等に報告されることで、審議会がさらに活性化し、それを受けてまた熟議も活性化するという相乗効果が生まれている。

ネット熟議を契機に全国各地でリアル熟議が開かれている一方で、リアル熟議を契機にネット熟議に参加するようになった人も多数おり、相乗効果が生み出されているところ。

【リアル熟議 関係】

平成 22 年 6 月に神奈川県横浜市で開催されたリアル熟議において、多数の参加者から学校と地域をつなぐ「地域コーディネーター」の重要性が指摘されたこともあり、横浜市の「中期 4 か年計画」(原案)中に「地域コーディネーター」の養成が盛り込まれる等、自治体の制度に結びつく事例も出てきている。

リアル熟議後も継続的に熟議を重ね、当事者による教育現場作りに率先して取り組む等、現場の具体的アクションに結びつく事例も多数出てきている。

リアル熟議参加者が、新たなリアル熟議を主催するといった波及効果も生まれており、国民が主体的に教育現場等をよりよくする取組が広がっている。

リアル熟議の主催者が、その経験を活かし、他の地域におけるリアル熟議の主催者に助言・支援を行う事例も多数生まれ、リアル熟議の広がりに厚みが出てきている。例えば、平成 22 年 8 月に愛知県豊橋市で開催されたリアル熟議の主催者が、その経験を活かし、平成 22 年 10 月に三重県四日市市で開催されたリアル熟議の助言・支援等を精力的に行った。

社会貢献活動としてリアル熟議を支援する企業も登場する等、まさに、官だけでなく、市民、NPO、企業等多様な当事者が共助の精神で支えあう「新しい公共」の実現に向けた力強い動きが生まれている。例えば、平成 22 年 11 月に愛知県名古屋市で開催されたリアル熟議においては、企業により会場の提供等が行われた。

【ネット熟議 関係】

「教員の資質向上」に関する熟議では、「文部科学省への提案書」も参加者によりまとめられ、文部科学副大臣に直接手交されたとともに、中央教育審議会でも審議の材料として活用されているところ。

熟議の場と審議会等において双方向的に意見・情報交換されることにより、熟議及び審議会等双方が相乗的に活性化されていると考えられる。

「研究費」に関する熟議では、科学・技術に携わる多数の当事者により、現状の課題や解決策の案が提示され、それらを受けて文部科学省で精査を加えた中間報告には、研究開発の現場に直接望ましい影響を与える内容が盛り込まれ、複数の専門誌で一面を飾る等注目を集めるとともに、報告内容の一部を平成23年度概算要求に反映されるなど、迅速な取組が行われているところ。

「ICTの活用」に関する熟議では、ネット熟議における議論が審議会等における議論の土台になる等、「熟議」に基づく教育政策形成が推進されてきているところ。パブリックコメントと併行してネット熟議でも意見交換されることは、政策案に関する現場の浸透度を高める上でも一定の効果が挙げられていると考えられる。

2. 今後の展開における基本的な在り方

教育を取り巻く様々な状況の変化を踏まえつつ、課題に立ち向かい、乗り越えるための知恵と実行力を生み出していくためには、教育現場に関わる様々な立場の方による「熟議」に基づく教育政策形成を促進することが求められている。

中教審をはじめとした審議会等での専門家による議論との両輪として、当事者による「熟議」を位置づけた政策形成を進める。時間的・物理的制約なく、全国の多数の当事者が参加するネット熟議を通して、政策を洗練させる。

教育政策の形成過程を開き「見える化」することで、教育現場当事者への浸透度を高めるとともに、政策決定後の実行力を生み出していく。

日本全国でリアル熟議を展開し、これを契機とした、当事者のコミュニティによる教育現場作り（コミュニティ・ソリューション）の実践を広げ、熟議の教育現場・文化を創造していく。

国の政策形成における、本格的な熟議の政策形成の取り組みは海外含め前例は無く、先行して実施する文部科学省における積極的な研究・実践が求められる。同時に、得られた知見を踏まえ、政府内での浸透や、自治体等の取り組みの支援を行っていくことが求められる。

3. 具体的な課題と今後の展開

【ネット熟議・リアル熟議 共通】

教育現場に対するさらなる熟議の取り組みの周知が求められている

- コンテンツによる訴求の強化が必要。(懇談会委員等による「意義・実施のコツ・効果等」に関するリレーコラム、動画コンテンツ、その他話題性ある広報コンテンツ等)
- 利用者の再訪を促し、常に新たな利用者が熟議サイトを訪れるようにするための導線増を検討すべきである。SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)サイト GREE との連携を先行して開始しているが、RSS、Twitter、Open-ID、SNS 各社の提供する API を経由した連携など、登録作業を簡素化し、利用者との接点を増やすための方策を継続的に講じる必要がある。
- 文部科学省のサイトとのさらなる連携の検討や、政府広報との連携の検討も求められる。
- その他、教育委員会等の各種関連組織を通じた教育現場への周知が求められる。

リアル熟議とネット熟議の連携についても検討が必要

- 全国リアル熟議参加者のサイトへの導線の強化が必要である。具体的には、ネットで続きの熟議を行うエリアの開設、リアル熟議会場でのネット熟議への参加登録方策の整備、メールや郵送での連絡が可能なよう主催者にて個人情報の許諾を得ること等を検討する。
- 双方の熟議の結果を、熟議の議論に反映し活かしていく方策についても検討が必要である。
- リアル熟議に先立って情報提供を熟議サイトで行う、リアル熟議参加者同士の連絡の場を提供する、リアル熟議に先立ってネット上で論点整理などの作業を行うなどの方策も検討が求められる。

文部科学省内における熟議の推進体制をさらに強化することが求められる。

- 熟議のデータなどの材料を提供し、ファシリテーションにより熟議をサポート(市民の創発環境をプロデュース)することが必要である。
- 制度の専門知を活かし、当事者の現場知と共鳴又はアイデア・コミュニケーションを創発する参加者として貢献することが必要である。

【リアル熟議 関係】

「熟議」が、授業や教員研修等、いろいろな場面で使えるツールとして教育現場へ埋め込まれ、「効果」を目に見える形にしていくステージに入っている。

- 「学校運営」のツールとしての熟議(「新しい公共」型学校等)
 - 「良い学校統合」を実現するツールとしての熟議
 - 「深刻だが表立って議論することがはばかれてきた問題」を解決するツールとしての熟議
 - 「子どもたちの学び」のツールとしての熟議(コミュニケーション力、進路選択、主体的な学校づくり等)
 - 学校と学童の連携等、新しい協調関係や枠組みを検討するツールとしての熟議
- リアル熟議に関するさらなる研究と、知見・ノウハウの共有が求められている
- 熟議での議論をより深めるために、熟議を実施する時間、テーマ設定、参加者の属性や地域の限定等、さらに深い熟議をするための具体的法則の研究が求め

られる。

- リアル熟議実践パッケージ「リアル熟議虎の巻」の一定の完成を図った上で、そのノウハウを共有し、主催者によるリアル熟議の開催を支援する仕組みを構築する必要がある。また、全国での実施を受けて「リアル熟議虎の巻」の改訂を重ねていくことが求められる。
- リアル熟議の主催者や参加者向けの「研修・トレーニングプログラム」も必要である。地域で出来るとなお良いが、定期的にリアル場で開催したり、e-learning 等も組み合わせる形で検討が必要である。

具体的なアクションにつながるリアル熟議のモデルの研究が求められている

- 開催する際の狙いに合致した、望ましいテーマ設定やメンバーシップ、開催前の参加者の学習や、開催後のフォローの継続等の在り方についての整理が求められる。
- 学校現場により近いコミュニティで熟議が実施されることが重要であり、教育委員会、各地教委の巻き込みを検討する必要がある。

教育関係者のみの狭い議論に留まらない、国民的広がりを持たせる方策として、教育委員会等のリアル熟議主催者が無作為で参加者を抽出するような実施形態についても検討が求められる。

リアル熟議主催者をネットワーク化し、コミュニティ・ソリューションの教育現場の核となる方々のネットワークへと発展させ、さらなる取り組みの推進を支援することが求められている。そのために、リアル熟議を契機としたコミュニティ・ソリューションの事例を、経緯、成果、課題等も含めて共有していく必要がある。

【ネット熟議 関係】

政策形成のステップと対応した熟議の「型」と、それぞれの「型」における運営方法の整理が必要である。

- 「問診型熟議」政策形成における問題提起のステップで実施

主な狙い：

問題点の明確化・アジェンダセッティング（議題設定）

運営方法：

政務三役によるテーマ開設のほか、熟議懇談会委員が適宜テーマを設定し、2週間程度熟議を実施することにより、多様な教育政策課題に対する迅速・的確な議題設定の推進を図る。

また、文部科学省職員による政策課題コンテストを行うこととし、そこで支持を得たテーマについて、2週間程度熟議を実施する等の方策により、職員が日常的な政策の検討に熟議カケアイを活かし、企画立案能力の向上等を図ることも検討する。

- 「解決策検討型熟議」政策形成における政策立案のステップで実施

主な狙い：

政策案のブラッシュアップ

運営方法：

政務三役によるテーマ開設のほか、熟議懇談会委員が適宜テーマを設定し、2週間程度熟議を実施することにより、多様な教育政策課題に対する迅速・的確な議題設定の推進を図る。

また、ファシリテーションや熟議のまとめへの文部科学省の踏み込み方は(1)参加者による解決策の検討をファシリテーターとして実質的なことを文部科学省がサポートするという形、(2)解決策の編集機能を参加者や外部が担い、その取り組みを文部科学省が支援する等の在り方を検討する必要がある。

素案となる提案書を参加者が投稿し、それらが比較され、また統合され、磨かれていくようなプロセスについても検討を行う。

- 「パブコメ型熟議」政策形成における政策決定のステップで実施

主な狙い：

政策案の実効性の確認と調整

運営方法：

文部科学省担当者が積極的な情報提供・ファシリテーションを行うことが求められる。

予算策定の時期等に合わせた熟議の年間サイクルの整理・定例化（シーズン制）の検討が求められる。

- 春の課題発掘型、秋のパブコメ型等の年間スケジュールの確立
- 各種政策とりまとめ、中教審、懇談会等の議論プロセスと、熟議スケジュールの関連を明確化
- 熟議結果を反映する範囲や、求めている意見の領域等を明確化
- 幅広の論点一覧や、今後の中期的な熟議実施カレンダーの掲載もあればなお良い

参加者を増やす方策が強く求められる

- 熟議の質とともに参加者数も重要な指標となる。その際、数のみを追うのではなく、熟議の主旨を理解した参加者を増やす方策を検討する。
- 閲覧者も熟議の重要な参加者と捉えることが出来る。サイトを訪問する月間ユニークユーザー¹数を増やす方策を検討する。
- リアル熟議からの導線を強化し、熟議の主旨を深く理解した参加者の流入を定常的に確保する。
- ターゲットを検討した上で、効果的な他のサイトからの導線を確保する。その際、新しい参加者の投稿を誘発するサイト上でのイベント等の実施も検討する

発言者の固定化を平準化する取り組みが求められる

- 「熟議」の主旨から多くの方に偏りなくご発言いただくことが必要であり、一部の発言者が極端に多くの発言を行う状況は望ましくない
- 発言回数制限（チケット制）等のルール作り等も考えられるが、当面は他の運用方策によって対応する

¹ ユニークユーザーとは、ある期間内において、同じ Web サイトにアクセスしたユーザーの数のことをいう。

- ウェルカムを丁寧に行う等のファシリテーション強化や運用上の工夫が必要
- オープンな熟議だけでなく、「見せる熟議」として、属性や志向のバランスを考慮した、指名による限られたメンバーでの熟議を平行して行うことを検討する。

携帯電話等、参加の敷居を下げながら熟議性を確保した熟議（「ライト熟議」）の設置が強く求められる。

- 掲示板とは別の仕組みの活用や、ID登録の垣根を下げる等の方策も検討する。
- 関心ある方が多く集まる状況をつくるため、「就職活動」や「グローバル人材の育成」等、社会的に注目度の高いテーマを取り上げることも重要である。その際、キックオフとしてリアル熟議やネット中継を行うことも検討する。
- ライト熟議と本格的な熟議の組み合わせによる熟議のサイクルも検討する。

熟議の議論の可視化についてはさらなる検討が求められる。

- 参加者は議論の全体像を把握した上での発言が求められる。また、熟議結果の取りまとめや、運営時等にも熟議の全体像の把握をサポートする可視化方策が求められる
- テキストマイニングの活用が求められる（ファシリテーションへの活用、発言状況や意見の傾向の把握に活用）
- マインドマップ等による議論の可視化には、個々の意見のつながりを把握できるメリットがある一方で、全体像の把握については課題もあり、更なる可視化方策の検討が求められる。
- 熟議の結果の整理の際には、議論の論点、濃淡、強弱や、熟議で挙げたエピソード・アイデア等、より教育現場のダイレクトな感覚を反映させる方策の検討が求められる。

当事者による「熟議」をより深めるためのファシリテーション・運営の強化が求められる

- 議論の構造の整理や、具体的トピックの設定等、内容に踏み込んだファシリテーションを行う可能性の検討が必要である。
- 熟議の進行に応じて熟議を分離したり、ステップバイステップで整理の時間をインターバルとしておきながら運営するような方策の検討も必要である。
- テーマとは関係のない意見の投稿や、一方的な投稿のみを行う参加者、インターネット上の円滑なコミュニケーションが不足することによるトラブルの兆候等が散見される。これらは熟議の主旨から望ましいとは言えず、コミュニケーションの円滑化の施策が求められる。

熟議を通じた協働の仕組みの検討が求められる

- 掲示板でのコミュニケーションのみでは協働を通じて提言などの成果物を仕上げていくプロセスを支援する仕組みとしては不十分である。
- 参加者が熟議の発言とあわせて、参考資料を掲示し、相互の提案や編集で磨き上げられるような運営形態やシステムの検討が求められる。
- 協働作業や熟議のスケールアウトを支援する仕組みも提供することが考えられる。

当事者による「熟議」に基づく意見の更なる洗練を図るために、参加に際して、熟議ライブラリのコンテンツの参照・学習を行うモチベーションを引き出す方策が求められる。

- 熟議開始時に一定の検討状況や基礎情報を掲載することが必要である。
- 適切なタイミングでのコンテンツの紹介が必要である。
- 閲覧しやすい形態でのコンテンツの掲載。文字情報に限らず、映像等のマルチメディアコンテンツによる訴求力の向上が求められる。
- 熟議参加のための多様な視点の獲得のため、グッドプラクティスの紹介や各種情報（データや発表資料、会見録等）の掲載も有効である。

熟議を経ての政策決定に際して、意思決定者への熟議の結果の引き渡しの手順や、それを受けての意思決定に際してのアカウントビリティの果たし方についても研究が求められる。

- 熟議の意見をどのように引き取るかの明確化が必要である。
- 「成果公開」のページで意見を踏まえた状況を可視化することが重要。メディア経由での熟議結果の発信も検討する

審議会との連携の可能性の検討が求められている。

- 審議会の効率化、あるいは、審議会の幅を広げていくモデルを検討する。
- 将来的には、中教審等の審議会委員が開設・参加する熟議の可能性も検討する。
- ネット熟議での意見の対立を超えたアウフヘーベンの場合としての施策（審議会の場合への持ち込み）等の可能性も検討が必要。

効果的・効率的な運営を支援するシステムの検討が求められる。

- 現状ではファシリテーションや監視等に多くの人手を要しており、持続的な運用や他府省への横展開を見据え、運営の省力化をシステム面で支援する仕組みを検討する必要がある。
- アンケートや意見募集等と掲示板での熟議を組み合わせ、参加者の意見傾向を把握・可視化したうえで熟議を行う等の方策も考えられる。

インフラについては、突発的な負荷に耐える柔軟なスケーリングの実現が求められる政府全体での浸透や自治体等での展開の支援が求められる。

- 他省庁が熟議の取組を実施しやすくなるよう、熟議の取組のパッケージ化・オープンソース化等を図ること。
- 教育委員会や教育現場の希望者に、熟議カケアイ内の掲示板を開放し、地域の課題に関するネット熟議の実施や、リアル熟議のフォローアップに活用いただける方策を検討する必要がある。

マーケティング観点で、運営状況の分析を強化する必要がある

- 基礎データの取り方や分析方法の再考が必要
- 利用状況等についてのユーザアンケートの実施も有効ではないか

各地域でネット熟議連携を実現するネット熟議協働員（サポーター）を設置する等、運営支援体制の強化の検討が求められる。

【執筆者一覧】(敬称略)(括弧内は担当部分)

「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会委員

貝ノ瀬 滋(第二部 2-13) 柏谷 弘陽(第二部 2-11)

金子 郁容(第一部 1,2-2,2-3,3-1,3-2-1,3-8)

鎌田 真樹子(第一部 3-2-2,3-2-5) 楠 正憲(第一部 3-3)

粉川 一郎(第一部 3-2-2,3-2-3,3-2-3,3-2-4,3-2-5)

小林 浩(第二部 2-25) 佐々田 亨三(第二部 2-7)

城山 英明(第一部 3-7,第二部 2-20) 竹原 和泉(第二部 2-2)

田村 哲夫(第一部 3-7) 日渡 円(第二部 2-26)

熟議協働員

青木 崇行(第一部 3-3) 天野 恵(第一部 3-6)

天野 貴博(第一部 3-2-3,3-4) 今村 亮(第二部 3-1)

小塚 仁篤(第一部 3-5) 園田 紫乃(第一部 3-2-2)

寺田 以統子(第一部 3-6,第二部 3-1) 中前 周(第一部 3-3)

馬場 大輔(第一部 3-2-4,3-4) 松澤 巧(第一部 3-6)

松田 紘和(第一部 3-2-2) 守屋 英義(第一部 3-3)

各ネット熟議テーマ担当部署・者、各リアル熟議主催団体・者

文部科学省「熟議カケアイ」事務局

参 考 资 料

「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会

平成 22 年 2 月 4 日
文部科学副大臣決定

1. 趣旨

教育を取り巻く様々な状況の変化を踏まえつつ、課題に立ち向かい、乗り越えるための知恵と実行力を生み出していくためには、教育現場に関わる様々な立場の方による「熟議」に基づく教育政策形成を促進することが求められている。

このため、教育政策を形成する上で、現場対話とインターネット活用等による、「熟議」に基づく国民の意見を収集方策について検討を行う「「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会」(以下「懇談会」という。)を設置する。

2. 検討事項

- (1) 「熟議」に基づく教育政策形成の在り方について
- (2) 現場対話とインターネット活用等による、「熟議」に基づく国民の意見の収集方策について
- (3) その他

3. 実施方法

- (1) 懇談会の主催は、教育担当の文部科学副大臣(以下「副大臣」という。)とする。
- (2) 懇談会の委員は、別紙のとおりとする。
- (3) 副大臣が必要と認めるときは、別紙の委員に加えて、他の有識者等の参画を求めることができる。
- (4) 懇談会は、必要に応じ、ワーキンググループを置くことができる。
- (5) 前各項に定めるもののほか、懇談会の運営に関する事項その他必要な事項は、副大臣が定める。

4. 実施期間

懇談会は「2. 検討事項」に係る意見交換が終了したときに廃止する。

5. その他

懇談会の庶務は、関係局課の協力を得て生涯学習政策局政策課において処理する。

「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会 委員名簿
 H23.7.19 現在
 (50音順 敬称略)(計24名)

天 笠 茂	千葉大学教育学部教授
貝ノ瀬 滋	東京都三鷹市教育委員会教育長
柏 谷 弘 陽	青森県横浜町教育委員会教育長
金 子 郁 容	慶應義塾大学SFC研究所所長・大学院教授
鎌 田 真樹子	Association of Social Media Entrepreneurs Growing Tree evangelist
菊 池 省 三	福岡県北九州市立貴船小学校教諭
菊 地 正	特定非営利活動法人高津総合型スポーツクラブ SELF 副理事長
楠 正 憲	マイクロソフト株式会社法務・政策企画統括本部技術標準部部長
粉 川 一 郎	武蔵大学社会学部教授
小 林 浩	株式会社リクルートカレッジマネジメント編集長
小 松 郁 夫	玉川大学教職大学院教授
佐々木 かをり	株式会社イー・ウーマン代表取締役社長
佐々田 亨 三	秋田県由利本荘市教育委員会教育長
塩 見 善 則	兵庫県加西市教育委員会参事
城 山 英 明	東京大学大学院法学政治学研究科教授
竹 原 和 泉	横浜市立東山田中学校コミュニティハウス館長
田 中 良 和	グリー株式会社代表取締役社長
田 村 哲 夫	学校法人渋谷教育学園理事長、渋谷教育学園幕張中学校・高等学校長
中 竹 竜 二	杉並区三谷小学校コミュニティスクール協議会長
日 渡 円	兵庫教育大学大学院教授
別 所 直 哉	ヤフー株式会社CCO兼法務本部長
村 上 美智子	京都市教育委員会学校指導課参与
吉 田 博 彦	特定非営利活動法人教育支援協会代表理事
与 良 正 男	毎日新聞論説委員

: 座長 : 副座長

サイト運営委員会について

平成 22 年 4 月 5 日
「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する
懇談会決定

1. 趣旨

インターネットにおける「熟議」を適切に設置及び運営することができるよう、助言及び支援を行うため、「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会(以下、「懇談会」という。)のもとにワーキンググループとして、サイト運営委員会(以下、「委員会」という。)を置く。

2. 役割

- (1) インターネットにおける「熟議」に必要な機能に関する助言及び支援
- (2) インターネットにおける「熟議」の運営に関する助言及び支援
- (3) インターネットにおける「熟議」に係る広報に関する助言及び支援
- (4) その他

3. 実施方法

懇談会の座長が委員会の委員を指名し、実施する。

4. 実施期間

懇談会の実施期間と同様とする。

サイト運営委員会 委員名簿

H23.7.19 現在
(50音順 敬称略)
(計5名)

鎌 田 真樹子 Association of Social Media Entrepreneurs Growing Tree evangelist

粉 川 一 郎 武蔵大学社会学部教授

楠 正 憲 マイクロソフト株式会社法務・政策企画統括本部技術標準部部長

田 中 良 和 グリー株式会社代表取締役社長

別 所 直 哉 ヤフー株式会社 C C O 兼法務本部長

: 委員長

リアル熟議推進委員会

平成22年11月12日
「熟議」に基づく教育政策形成
の在り方に関する懇談会決定

1. 趣旨

教育を取り巻く様々な状況の変化を踏まえつつ、課題に立ち向かい、乗り越えるための知恵と実行力を生み出していくためには、教育現場に関わる様々な立場の方による「熟議」に基づく教育政策形成を促進することが求められている。

また、教育現場の当事者と一体となって「熟議」を推進・浸透できるよう、対面で行う熟議（以下「リアル熟議」という。）を率先して実践している教育現場当事者のネットワーク（協力体制）を構築し、各地での取組について情報の共有を行うとともに、取組の更なる推進のための助言や、新たに取組を行う教育現場の当事者の支援を行うことが求められている。

このため、「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会（以下「懇談会」という。）のもとにワーキンググループとして、リアル熟議推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

また、全国各地で企画・開催されるリアル熟議に対する助言、支援等について、委員会と一体となって実施する者として、委員会のもとに、積極的にリアル熟議の取組を行っている者等からなる「熟議協働員」を置く。

2. 役割

- (1) リアル熟議の取組の、更なる推進のための施策の検討又はその助言・支援
- (2) リアル熟議を企画・開催する者に対する助言及び支援
- (3) リアル熟議を実践している教育現場当事者のネットワーク（協力体制）の構築
- (4) その他

3. 実施方法

- (1) 懇談会の座長が委員会の委員を指名し、実施する。
- (2) 熟議協働員については、委員会が決定する。

4. 実施期間

懇談会の実施期間と同様とする。

5. その他

- (1) 熟議協働員は、リアル熟議への参加経験、懇談会が実施する「熟議」に関する研修への参加経験及び上記役割を積極的かつ継続的に行う意思を有する者の中から委員会において選定する。
- (2) 委員会に関する庶務は、生涯学習政策局政策課において処理する。
- (3) ここに定めるもののほか、議事の手続きその他運営に関し必要な事項は、委員会において定める。

リアル熟議推進委員会 委員名簿

H23.7.19 現在

(50音順 敬称略)
(計9名)

貝ノ瀬 滋	東京都三鷹市教育委員会教育長
柏谷 弘陽	青森県横浜町教育委員会教育長
小林 浩	株式会社リクルートカレッジマネジメント編集長
佐々田 亨三	秋田県由利本荘市教育委員会教育長
塩見 善則	兵庫県加西市教育委員会参事
竹原 和泉	横浜市立東山田中学校コミュニティハウス館長
中竹 竜二	杉並区三谷小学校コミュニティスクール協議会長
日渡 円	兵庫教育大学大学院教授
村上 美智子	京都市教育委員会学校指導課参与

: 委員長

熟議協働員名簿

H23.7.19 現在
(50音順 敬称略)
(計34名)

青木 崇行 (会社役員・経営者)

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム(H22 4/17)の企画、熟議の参加促進施策や可視化方策の検討(主にシステム面)等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

天野 貴博 (会社役員)

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム(H22 4/17)の企画、熟議の可視化方策検討、ファシリテーションスキルの検討等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

天野 恵 (会社員)

愛媛県松山市リアル熟議の支援(H22 9/4)、慶應義塾大学芝共立リアル熟議の支援(H22 10/31)、リアル熟議虎の巻執筆、熟議紹介コンテンツの制作等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

今村 亮 (NPO 職員)

横浜市内小学校でのプレ熟議の企画、慶應日吉リアル熟議の共催(H22 7/24)、熟議ファシリテーションスキル検討等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

遠藤 忍 (学生)

慶應日吉リアル熟議の主催(H22 7/24)、愛媛県松山市リアル熟議の支援(H22 9/4)を実施。インターネットを活用したリアル熟議の広報・可視化とネット熟議との接続の検討において、熟議懇談会・文部科学省と協働。

岡田 実(校長)

文部科学省で行われた熟議・ファシリテーション研究会(H22 7/18)に参加、三鷹市リアル熟議(H22 9/18,11/27)に参加

風岡 治(学校事務職員)

豊橋市リアル熟議(H22 8/7)を主催、四日市市リアル熟議(H22 10/2)を支援。

菅野 祐太(会社員)

横浜市内小学校でのプレ熟議の企画、熟議に基づく教育政策形成シンポジウム(H22 4/17)の企画、熟議ファシリテーションスキル検討等で熟議懇談会・文部科学省と協働。

喜多村 晃(校長)

文部科学省で行われた熟議・ファシリテーション研究会に参加(H22 7/18)、三鷹市リアル熟議(H22 9/18)を主催

倉岡 正高(研究者)

横浜市リアル熟議(H22 6/23)の企画・運営、コミュニティ・スクール教育長熟議(H22 10/12)に出席

小塚 仁篤(会社員)

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム(H22 4/17)の企画、熟議紹介コンテンツの制作等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

榊田 直紀（学生）

慶應日吉リアル熟議（H22 7/24）、慶應芝共立リアル熟議（H22 10/31）、こども熟議@ヨコハマ（H22 12/19）の主催・支援等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

佐々木 英和（大学教員／研究者）

和歌山リアル熟議に参加（H22 10/23）

島 康子（教育委員／会社役員）

リアル熟議 in 横浜町に参加（H22 9/4）

鈴木 栄子（教育委員会）

横浜市リアル熟議を主催（H22 6/23）

曾谷 いず穂（会社員／研究者）

熟議の可視化方策検討、ファシリテーションスキルの検討、リアル熟議虎の巻執筆等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

園田 紫乃（会社員／研究者）

文部科学省熟議の取り組みサポーター、熟議の研究者としての知見を活かし、リアル熟議の要件やファシリテーションの在り方等、骨格の検討において熟議懇談会・文部科学省と協働。

竹本 靖代（NPO役員）

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム（H22 4/17）に参加、横浜市リアル熟議（H22 6/23）の企画・運営、文部科学省で行われた熟議・ファシリテーション研究会（H22 7/18）に参加

寺田 以統子（会社員）

教育関連NPOと連携したプレ熟議の企画、熟議に基づく教育政策形成シンポジウム（H22 4/17）の企画、熟議紹介コンテンツの制作等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

長尾 彰（NPO役員）

「熟議カケアイ」民間ファシリテーター、文部科学省で行われた熟議・ファシリテーション研究会における講師（H22 7/18）を務めるほか、新宿区四谷熟議の主催（H22 7/17）、愛媛県松山市リアル熟議の支援（H22 9/4）等、多数のリアル熟議を主催・支援。

中川 綾（NPO役員）

新宿区四谷熟議の主催（H22 7/17）、愛媛県松山市リアル熟議の支援（H22 9/4）等、多数のリアル熟議を主催・支援。

中前 周（フリーランス）

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム（H22 4/17）の企画、リアル熟議虎の巻執筆等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

西尾 真由美（NPO職員）

「熟議カケアイ」民間ファシリテーターを務め、文部科学省で行われた熟議・ファシリテーション研究会に参加。

馬場 大輔（会社員）

熟議の可視化方策の検討、熟議ファシリテーションガイドライン検討、熟議に基づく教

育政策形成シンポジウム(H22 4/17)の企画等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

林 知明 (NPO役員)

四日市市リアル熟議に参加(H22 10/2)、企業と連携して名古屋市リアル熟議を主催(H22 11/3)。

日比野 政芳 (区役所職員)

横浜市リアル熟議を主催(H22 6/23)

藤原 義朗 (学校事務職員)

豊橋リアル熟議(H22 8/8)に参加、四日市リアル熟議(H22 10/2)を支援

本田 哲也 (学生)

横浜市内小学校でのプレ熟議の企画、慶應日吉リアル熟議の主催(H22 7/24)、愛媛県松山市リアル熟議の支援(H22 9/4)、東京大学リアル熟議の支援(H22 10/17)等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

松澤 巧 (会社員)

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム(H22 4/17)の企画、熟議紹介コンテンツの制作等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

松田 紘和 (研究者)

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム(H22 4/17)の企画、熟議運営における規約やガイドラインの在り方の検討等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

三浦 麻子 (NPO役員)

リアル熟議 in 横浜町(H22 9/4)に参加。

守屋 英義 (会社員)

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム(H22 4/17)の企画、熟議の参加促進施策や可視化方策の検討(主にシステム面)等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。

山崎 伊佐緒 (会社役員)

熟議に基づく教育政策形成シンポジウム(H22 4/17)に参加

山本 竜也 (学生)

慶應日吉リアル熟議の主催(H22 7/24)、愛媛県松山市リアル熟議の支援(H22 9/4)、慶應義塾大学芝共立リアル熟議の支援(H22 10/31)等、多岐にわたる事項で熟議懇談会・文部科学省と協働。